

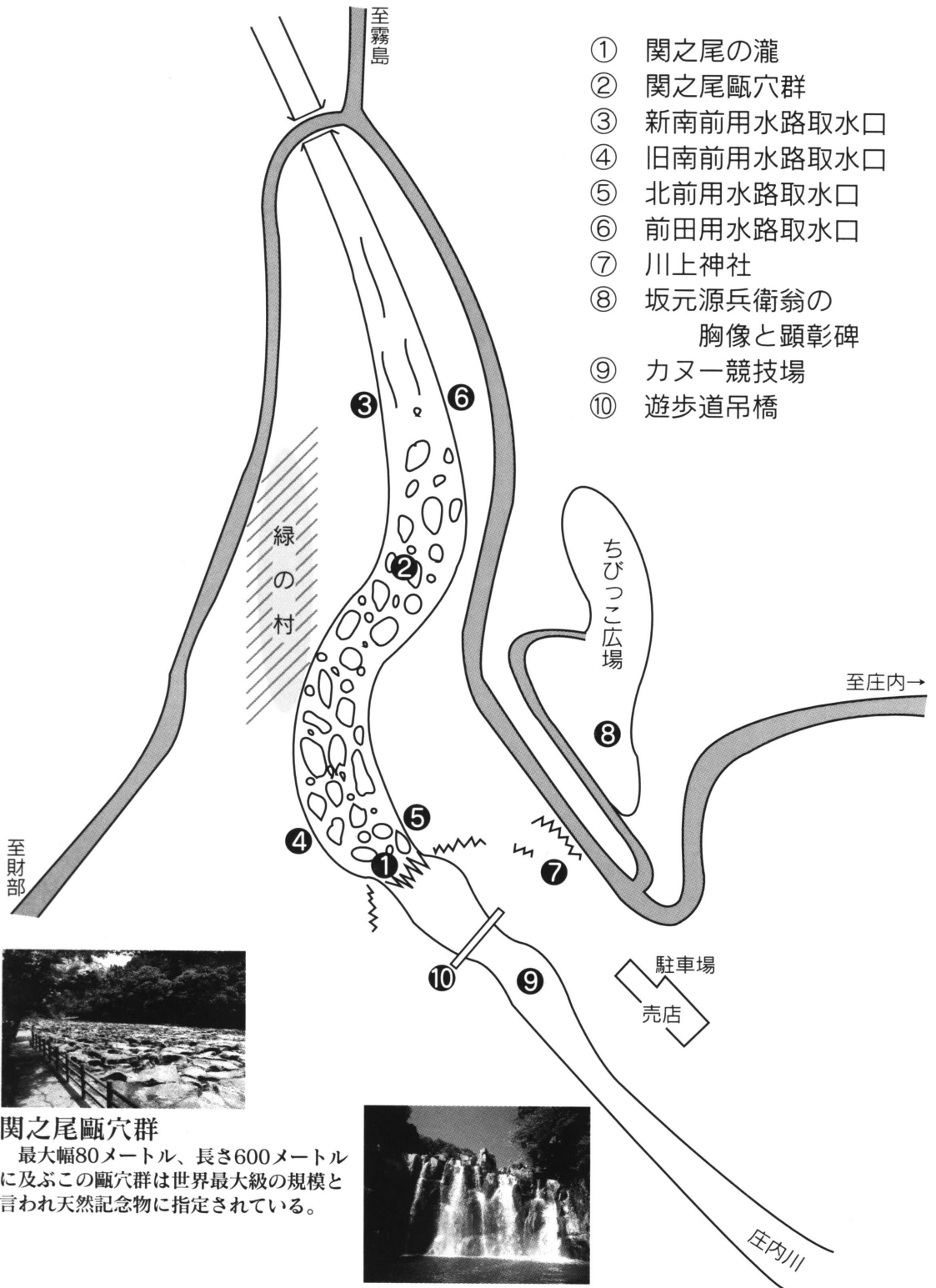


# 庄内

第13号

付：既刊号総目次

庄内の昔を語る会



- ① 関之尾の瀧
- ② 関之尾甌穴群
- ③ 新南前用水路取水口
- ④ 旧南前用水路取水口
- ⑤ 北前用水路取水口
- ⑥ 前田用水路取水口
- ⑦ 川上神社
- ⑧ 坂元源兵衛翁の  
胸像と顕彰碑
- ⑨ カヌー競技場
- ⑩ 遊歩道吊橋



### 関之尾甌穴群

最大幅80メートル、長さ600メートルに及ぶこの甌穴群は世界最大級の規模と言われ天然記念物に指定されている。



### 関之尾の瀧

今から50万年前、大噴火を起こした霧島山の溶岩流の先端が高さ18メートル、幅40メートルの見事な瀧をつくっている。

# 巻頭言

庄内の昔を語る会 会長 坂元徳郎

「庄内」愛読者の皆さん、如何お過ごしでしょうか。

私たち「庄内の昔を語る会」は発足以来、既に十五年の歳月が流れました。

この間、会では庄内地域の史跡の保存や顕彰はもとより周辺地域の史跡探訪、会誌「庄内」の発行等意義ある文化事業を続けていますが、特に会誌「庄内」については毎回三十名から四十名に上る皆様からのご投稿を賜り創刊以来欠刊すること無く今日に至っています。

庄内を愛する多くの皆様が庄内の歴史を会誌として纏め、子や孫に書き残しておこうと言う思いの表われです。この様な地域単位の文化史の継続刊行はとかく至難の業と言われる中で、今年も「庄内十三号」を皆様の机上にお届けする事が出来ました。わずか年一回刊行と言う些細な事業ではあり、又内容も決して他と比肩出来るようなものではありませんが「庄内の昔を知る唯一の史書」です。投稿者の皆さんを始め愛読者の皆さんに心から謝意を表わしこの慶びを分かち合いたいと思います。

ご承知のとおり庄内は歴史の古い町です。まだまだ埋もれた史実や言い伝え等数多くあると思います。どうか庄内を愛する皆さんにはこの会誌「庄内」刊行の意義を十分ご理解いただき一層のご協力をお願い致します。

平成十三年十月吉日

# 目次

巻頭言	……………	会長	坂元徳郎	1
特別寄稿	……………			
庄内小学校に赴任して	……………	庄内小学校長	福留稔	1
歴史・史料	……………			
乙房神社について	……………	乙房(都城市史編纂室)	武田浩明	3
明治三十三年の庄内村議事録から	……………	東区	坂元徳郎	7
私と庄内農協の歩み	……………	東区	黒木正	11
庄内町情報	……………			
宮崎「庄内会」から	……………	庄内会会長(西区)	牧ノ瀬正雄	14
庄内地区公民館に勤務して	……………	都北町	長峯泰太郎	15
庄内地域農業の現状と課題	……………	平田	満永輝実	16
学校便り	……………			
庄内小学校	……………	教頭	後藤良雄	17
菓子野小学校	……………	教頭	別府一男	19
乙房小学校	……………	教頭	日高啓子	21
庄内中学校	……………	校長	黒木敏行	23
随想・追憶	……………			
庄内の人(3)	……………	鷹尾町	得能哲夫	27
水あび	……………	鷹尾町	菓子野康子	31
戦時中を過ごした小学生の頃	……………	東区	帖佐ミヤ	32
あの頃の貧しさが私の心を豊かにした	……………	さいたま市	馬籠京子	35

大正生まれ	.....	宮崎市	松岡優	39
忘れたい少年時代	.....	又木政栄	.....	42
小学校時代の思い出	.....	福村静徳	.....	43
小学校時代	.....	吉川一郎	.....	47
俳句	.....	西區	蒲生敏子	50
東區	内野かね	祝吉町	宮田安子	.....
町區	山元マス子	鷹尾町	菓子野康子	.....
子や孫に語り伝える話	.....	妻ヶ丘町	瀬戸山計佐儀	51
安永の坂道物語(二)	.....	東區	坂元徳郎	57
庄内小学校運動場の造成工事	.....	宮島	今村勇	63
宮島の新しい伝統行事	.....	東區	野崎兼次	65
昔の天神馬場―大正の終りから昭和の初め頃―	.....	川崎	福村文利	67
下川崎の田のかんさあ	.....	川崎	前畑文利	68
忘れられない野山の幸	.....	宮崎市	牧ノ瀬正雄	69
きつね	.....	西區	松吉秀隆	71
宮崎県ラグビー界の発展に尽くした池田政秀	.....	平塚町	山元正三郎	74
警防団と庄内空襲の日	.....	町區	山元昭平	76
庄内ことば雑感(続)	.....	宮崎市	坂元守雄	83
森づくりの光と影	.....	事務局	山下謙二郎	91
ここ一年の歩み	.....	東區	菓子野美和子	92
西岳地区史跡探訪記	.....	東區	菓子野美和子	95
史跡探訪 西都原古墳群	.....	法華嶽薬師寺	.....	.....



「庄内」総目次 創刊号～第十二号

庄内創刊号 (平成元年発行)	.....	101
第二号 (平成二年発行)	.....	103
第三号 (平成三年発行)	.....	104
第四号 (平成四年発行)	.....	106
第五号 (平成五年発行)	.....	110
第六号 (平成六年発行)	.....	112
第七号 (平成七年発行)	.....	114
第八号 (平成八年発行)	.....	116
第九号 (平成九年発行)	.....	118
第十号 (平成十年発行)	.....	120
第十一号 (平成十一年発行)	.....	122
第十二号 (平成十二年発行)	.....	123

編集後記

平成十三年度 会員名簿

表紙題字 (故)大河内 浩 爾  
表紙写真 関之尾滝 坂元 守 雄

# 特別寄稿

## 庄内小学校に赴任して

庄内小学校長 福留 稔

私は今年四月より庄内小学校勤務を命じられました。辞令をいただいた時には、これまでの勤務校が山田町立中霧島小学校でしたので、地域性もある程度共通したものがあろうという事で不安感を抱くこともなかったし、庄内町には母方の縁戚があることで親近感を覚えたというのが率直な感想でした。

ところで、今回投稿依頼がございまして、本誌の趣旨と異なるうとは思いますが、個人的な私の庄内町とのかかわり、思い出や印象等を紹介させていただきます。

先ず、私の庄内町とのかかわりは、およそ五十年ほど前に溯ります。両親ともに財部町出身で、父が国鉄（JRの前身）門司鉄道管理局職員だったため、私たち兄弟は福岡県で生まれ育

ちました。たまたま、母の姉と妹が庄内町に嫁いでいた関係で、小学生のころ母に伴われ、私たち兄弟は庄内町を訪れたことがあります。当時のことですから、父母の実家の財部から庄内までの交通は不便だったのと、交通費の節約もあったのですが、徒歩で随分な時間がかかったように覚えています。特に母智丘を抜けて庄内町が視界に入り、あそこだと指さされても、子どもの中には結構な距離がうかがわれ、有頂天とはいきませんでした。真夏の炎天下を歩きくたびれた苛立ちのため、兄弟で口喧嘩を交わしながらの到着でした。当時流行りのアイスキャンディ屋をやっていた叔母夫婦が歓迎してくれました。早速いただいたキャンデーの冷たさ、甘さ、美味さが懐かしく蘇ります。数日間叔母宅に滞在しましたが、近くの川（きっと前田用水路だったのでしょう）に出かけて遊びました。比較的水量も豊富で流れも速かったように思います。庄内の地元の子どもたちが泳いでいたと思うのですが、その場所が現在どこだったのかまだ確認できていません。上の叔母宅がお寺（願心寺）近くにあります、覚えたての自転車で二軒の間を往來しました。また、店の仕事で忙しい中、部屋で騒いでいる私たちに、叔母がすぐその小学校に行って遊んできたらと勧められ、運動場近くで遊んだことも記憶しています。ところが、全く無縁と思っていたそ

の学校に、五十年後、しかも教職生活の最後に私が勤務することになるうとは、何とも不思議な思いです。

その後しばらくは当地へ来ることもなく、叔母の家を久し振りに訪れたのは大学生になってからです。家庭教師のアルバイトの蓄えで春休みに宮崎観光を思い立ち、叔母の家を拠点に關之尾の滝は勿論、青島、日南海岸方面を観光致しました。春の明るい陽光と青く澄んだ海の色、宮交バスガイドの快い接客態度、家庭的且つ献身的な叔母の家の若奥さんの主婦ぶり、すべてが好印象でした。大学卒業時の福岡県では教職員採用試験が行なわれていなかった事情もありますが、宮崎県の教員となり、都城市より妻を娶り、都城市の人間になったというのは、この時の庄内訪問といささか無関係とは言えません。

ところで、庄内小に實際着任してみても、前任地と共通する地域性に気づきました。中霧島の谷頭地区は前田用水の恵みを得て発展したため、住民は前田正名と石川理紀之介の遺徳を大切に偲んでおります。当地では、三島通庸と前田正名が発展の礎をなしたことで先人の遺徳を尊ぶ点で一致します。庄内の熊襲踊りと同系統だと思うのですが、山内という地区には、ばら踊りという伝統芸能が継承されています。

しかし、地域の学校としての庄内小と中霧島小とは、歴史

や伝統という面で対照的です。庄内小の始まりは明治二年で百三十余年の歴史に比し、中霧島小は山田小より分離独立して六十余年ですから、半分です。学校のシンボル「いちいがし」の巨木が敷地内に聳え、本校の歴史を物語る「学校日誌」（古くは大正八年から現存）が校長室の棚に所狭しと保存されているのには驚きました。

このような由緒ある学校に着任致し、いささか緊張感を味わいつつあります。学校は今まさに教育改革の真っ只中にあります。新しい息吹を吹き込むこともさることながら、地域の皆様の学校愛のもとに先輩諸氏の努力で築かれた本校の校風をさらに維持発展させなくてはと心新たにしているところです。





# 歴史・史料

## 乙房神社について

乙房町 武田浩明

(都城市史編さん室)

### 〈一 はじめに〉

神社は、集落があるところには、必ず、一社や二社はあるとされるほど、日本人の生活の中に溶け込んでおり、境内社や屋敷神などの祠（ほこら）の類まで含めたら、その数はいったいどのくらいになるのか見当もつかないほどであるといわれています<sup>①</sup>。そして、これらの神社はそれぞれの歴史をもって、今日まで維持されてきたものであると言えるでしょう。

拙宅（乙房町馬場地区）の近所（乙房児童公園の西側）にも、「妙見大明神、庚申、田之神、馬頭観音、菅原道真公」などを祭った「乙房神社」という神社があり、七月十一日には「六月灯」が行われております。しかし、この神社は、昔からここに

あったわけではないようです。

そこで、本稿では、筆者にとって身近な神社である乙房神社の歴史について考えてみたいと思います。

### 〈二 現在の乙房神社〉

乙房神社については、境内の掲示板に、

妙見大明神・田之神・馬頭観音は、妙見神社として乙房踏切西北角に位置し、庚申は乙房坂上の月野原の細い道路脇に祭られており四祭神を乙房相中の皆さんで、七月十一日を妙見神社の祭日と定め鎮祭し尊崇してきました。

昭和四十九年小学校前の県道拡張工事にもない、境内も手狭になるなどの理由で、乙房区で移転管理してはとの事で、昭和五十一年の総会にはかり、小松ヶ尾児童公園の上に新築移転するよう決議され、同時に、乙房小学校の前身寺子屋時代の学問の神、菅原道真公も合祀するように決し、社殿を現在地に移し妙見神社を乙房神社と改称し、昭和五十二年八月竣工遷座祭を行う。

とあります。

このことから、乙房神社は、以前は「妙見神社」と呼ばれており、乙房踏切の西北角（星髪屋の東隣）にあったことや、馬

場地区で祀っていたことがわかります。

また、乙房自治公民館の「広報」（平成三年十月）には、菅原道真公について、今平地区の田中チサ氏宅に安置されていたものを譲り受けたことが記されています。

### 〈三 江戸期の妙見（乙房）神社〉

では、この神社はいつごろからあったのでしょうか。

元禄十一年（一六九八）に藩命によって作成し提出したと思われる「北郷領内神社改帳寫」（重永卓爾編纂校訂『都城島津家史料』第二卷所収）には、

#### （前略）

乙房丸  
一森鶴大明神

（後略）  
右同乙房丸門

主左衛門

本地阿ミた 葉師 （観音）  
くわんおん

同所

右同

一濱之宮妙見

平島善兵衛

#### （後略）

とあります。

また、文政一二年（一八二九）に一応の完成をみたといわれる『庄内地理志』<sup>(2)</sup>の巻七十七に、次のようにあります。

#### （前略）

一濱妙見 宝殿老間九尺 拝殿式間方 満行善左衛門

身体十式体 木坐像 内一体男長ヶ六寸

一体女同 六寸

其外寸尺右二同じ 小祠横四尺八寸五部

棟札奉造立濱妙見大菩薩一字事

右意趣者護持信心大檀那藤原忠長公御息災云々

于時寛文三癸卯十月十八日導師法印秀政

裏大工小工畧

例祭十一月十四日 獅々駒壱対 鳥居

元禄之差出帳平嶋善兵衛 宝曆ニ者満行太兵衛

棟札奉造立濱妙見十二社

右奉為護持身心大檀那藤原忠智公息災云々

元禄十丙丑天霜月吉祥日

正祝子石河宮祗左衛門秀行

同寛政十一年四月濱妙見十二社造立之棟有

社主秋永藏人 大宮司満行弥八

#### （後略）

以上のことから、江戸時代には、この神社が「濱妙見」とか「濱之宮妙見」と呼ばれていたことがわかります。また、『庄内

地理志』から、寛文三年（一六六三）には、この神社が存在し、御神体を祀る宝殿や拝殿（一間は約一・八二m、一尺は約三〇・三cm）を有し、獅子駒や鳥居などもあり、十一月十四日に例祭が行われていたことがわかります。

しかしながら、天保十四年（一八四三）に完成した鹿兒島藩の総合地誌といわれる『三国名勝図会』には、この神社は収載されていません。原口虎雄氏は同書索引「神社・祠堂之部」の解説で、「小さな門の神などは無数なので本書収載の対象にはならなかった」と述べています。ゆえに、天保期には小祠となり、門内で自治的に祀られていたと推測されます<sup>4</sup>。

#### 〈四 明治期の妙見（乙房）神社〉

次に、明治期にはどうなったのでしょうか。

明治政府は、明治四年（一八七二）七月に郷社定則を公布しました。この郷社定則により、戸籍法に基づく戸籍区に郷社一社を置き、他の有力な神社は村社すると定められました。

都城県（明治四年十一月に設置され、同六年一月に廃止された）では、「戸籍ノ一区ハ一郷ヲ以テ一区トス」とし、荘内郷（安永村・西嶽村・横市村・丸谷村・岩満村・下水流村・上水流村・野々美谷村・山田村・中霧島村）は第三区になりました。

その郷社・村社をまとめてみると次のようになります<sup>5</sup>。

戸籍区 郷社 村社

三区（庄内） 母智丘神社（横市村） 諏訪神社（安永村）

豊幡神社（安永村）

鹿島神社（安永村）

金山神社（西嶽村）

山田神社（山田村）

科長神社（上水流村）

これらの選定にもれた社は、最寄りの郷社・村社に合祀し、氏神・門神については各屋敷内に遷宮するよう指示されております。

また、瀬戸山計佐儀氏は、「安永の坂道物語（一）——歴史と民俗——」（庄内の昔を語る会編『庄内』第十一号 一九九九年）のなかで、

妙見は北極星を神格化した菩薩で、国土を守護し人の福寿を増すとされており、乙房の鉄道踏切の北隣りと志比田町徳益にも妙見堂があつてオミケン様と呼ばれていたが、同じく明治の初頭に破却され、（後略）

と述べられています。

慶応四年（一八六八）三月十一日に明治政府が、仏像を神体

としている神社は仏像を取り払うように命じていることや、鹿  
児島藩内において徹底した神仏分離（廃仏毀釈）が行われたこ  
となどから、瀬戸山氏の見解は妥当ではないでしょうか。

以上のことから、「妙見神社」は明治期には廃絶したと推察  
されます。

## 〈五 おわりに〉

神社は、私たちにとって身近な歴史的遺産であり、今日も初  
詣や春秋の祭礼が行われる場所として、地域社会において意義  
のある役割を果たしていることは確かです<sup>(8)</sup>。しかし、ほとんど  
の小社や小祠は、過去の神社整理の過程<sup>(9)</sup>で、合祀や廃絶、移転、  
社名変更などがなされ、その成立事情や沿革がはっきりしない  
ことも事実です。

幸いなことに『庄内地理志』などの近世の史料から、庄内地  
区には数多くの神社があったことがわかり、その沿革がわかる  
神社もあります。それらが、何を祭り、どこにあったか、また、  
どうなったのかなどを調べるにより、私たちの先祖の生活  
状況や土地の実情がわかってくるのではないのでしょうか。

最後に、読者の皆様に「妙見神社」に関する情報の提供をお  
願いして、小稿を終わりたいと思います。

## 註

- (1) 牛山佳幸『小さき社』の列島史（平凡社、二〇〇〇年）。
- (2) 都城市立図書館所蔵謄写本。
- (3) 重永卓爾『庄（荘）内地理志』の成立年代と編集に携わった人々  
『都城市史 史料編 近世1』二〇〇一年）。
- (4) この件については、今後『本藩神社誌』を調査する必要がありま  
す。

(5) 『都城市史 史料編 近現代2』解説九八頁。

(6) 内場の宮田家にあった神社は、明治政府の方針に従って、庄内の  
諏訪神社に合祀されたと伝えられています。（瀬戸山計佐儀「安  
永の坂道物語（一）―歴史と民俗―」『庄内』第十一号 一九九  
九年）。

(7) 註（1）参照。

(8) 黒田龍二「神社の歴史と文化を探る」（『朝日百科 日本の国宝別  
冊 国宝と歴史の旅4 神社 建物と祭り』朝日新聞社 二〇〇  
〇年）。

(9) 明治三十九年（一九〇六）には全国に合計一九万四三五の神社が  
ありましたが、明治四十二年（一九一九）には一―万六一九三に  
減っています。（王守華著『日本神道の現代的意義』一四四頁  
（農山魚村文化協会、一九九七年））。

【付記】 坂元徳郎氏執筆の「史跡探訪（その十一） 庄内の馬頭観音（続き）」

『庄内』第十一号所収）を読んだ際、「乙房神社」については、『庄内』  
第九号に詳記されていることを知りましたが、筆者の手元には無く、  
また、図書館にも所蔵されていなかったため参照できませんでした。

# 明治三十三年の庄内村議事録から

東区 坂元 徳郎

まえがき

私たちが庄内の歴史を探求するうえで、旧庄内村役場の取り扱い文書や特に議会議事録は欠かすことのできない貴重な史料となります。

「庄内の昔を語る会」では、会発足直後からこれら庄内に関する行政書類の行方を捜して、都城市役所はもちろん庄内支所や図書館等にも足を運びましたが、残念ながら成果は上がらず半ば諦めかけている現状にあります。誠に残念の極みであります。

私たちにとってこれら垂涎の古文書がなぜ見当たらないのか、行方を追う中で、昔役場の職員であった人達の記憶から推して文書散逸の原因を大凡次の四つに纏ってみました。

一、太平洋戦争の最中、庄内は軍隊の兵站基地になりましたが軍隊の重要書類は役場の石蔵にも収められていました。終戦になり、アメリカ軍の進駐に備える軍隊はこれらの書類を慌てて

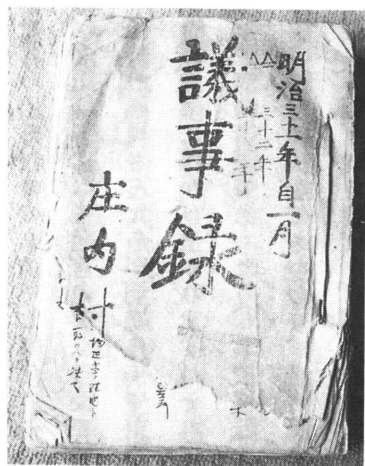
焼却処分し解散しました。役場の石蔵はもともと役場の重要書類の収蔵庫として建てられたもので、庄内の行政関係の書類は全てここに収められていました。三島通庸の新郷立関係書類もここに収められていたかも知れませんが、またヒョットすると藩政時代に於ける地頭飯屋の古文書等も含まれていたかも知れません。

終戦時のあのドサクサの中で、軍隊の書類と役場の書類とを選別する余裕もなく全ての書類は殺気立った軍隊によって焼却されたのであろうと言う推測。

二、戦後の新しい行政を執行するに当たって、雑然とした石蔵の整理の為に相当量の古い書類を数日掛けて焼却処分したと言う当時の職員の淡い記憶。

三、昭和四十年、庄内町は都城市と合併しましたがその時、合併に必要な重要書類

(戸籍簿、資産台帳、納税台帳等)は都城市役所に引き継がれましたが、その他の一般書類はそのまま庄内役場に残されました。そし



て都城市として新しい行政が始まり職員も配置替えによって新しくなりました。

その頃庄内支所に残された旧庄内町の書類は新しい行政の中で利用されることもだんだん少なくなり、用済みになった書類は逐次処分したと言う記憶。

四、合併当初の庄内支所は旧荘内町役場をそのまま使用していましたが、その後一旦空き家になっていた郵便局庁舎跡（現在の土地改良組合）に仮住まいをし、そして新築された現在の庁舎に移転しました。この再度に亘る移転の際に書類の整理が行われ古いものは処分したと言う記憶。

以上、関係者の記憶を辿ると大まかにこの四つの事が書類滅失散逸の原因として考えられます。もちろん確とした結論ではありませんので、今後手掛かりを求めて捜し続ける所存です。折りも折り、明治三十一年から三十六年に掛けての庄内村議会議事録が発見されました。

これは東区の坂元比士夫さん宅に保存されていたものです。比士夫さんの話では、元役場職員であった妹の故坂元クミ子さんが「役場の書類を処分するとき（それは多分都城市と合併の頃と思われます）、昔の書類の中に、偶然にも昔村会議員であった自分の祖父坂元米助の名前が目止まったので処分するに忍

びず大事に持ち帰った」と言う曰く付きのものでした。

毛筆で書かれた議事録は速記録ではなく発言の要点を後で整理記録したのですが、当時の議員さんたちが羽織り袴で重要案件を討議されている様子が見事に浮かび上がります。それは県道や郡道の開削にかかる予算の審議であったり、学校移転の討議であったり、役場職員の給料の決定であったり、当時庄内村が抱えていた案件を如実に再現してくれます。議事録の内容は逐次発表させていただけますが、今回は明治三十三年四月十二日に議会に報告された蒲生才蔵村長の「庄内役場事務報告」を転載致します。（原文のまま）

#### 庄内村役場事務報告

町村第八八条第二項ニ依リ明治三十二年度ニ於テ管掌セシ事務ノ大要ヲ提起シテ報告セントス

文物制度ノ煥発スルト共ニ町村役場ナル下級機関ニ一大激動ヲ与ヘ之ガ為メ年ヲ追ヒ月ヲ重ヌルニ従ヒ事務頻繁ヲ来スハ事理ノ当然ナリトス。此時ニ際シ能ク浩績ヲ挙ゲ公益ヲ増進セント欲セバ之ガ首脳タル所ノ吏員其ノ人ヲ得ルヨリ急務ナルハナシ而シテ吏員其人ヲ得ルト共ニ自ラ優待ノ道ヲ忘ルベカラザルナリ。

本年度ニ於テ諸官衙及ビ人民ヨリ收受セシ文書ハ三千五百四十五件ニシテ又諸官衙及ビ人民ヘ發送セシ文書ハ二千二百二十八件ナリトス。外ニ奥書証明ヲ与ヘ交附シタル件数二百五十三件ヲ加ウル時ハ惣計五千九百三十五件ノ多数ニ上レリ。

### 一、兵事

三十二年度徴兵適齡者ハ四十六人ニシテ身体検査ニ合格シ現役兵ニ編入セラレ熊本ヘ入營セシモノ十名今年中現役満期トナリ帰郷ヲ命ゼラレタルモノ八名、又今年演習召集ニ応ゼシモノ七人ナリ、海軍志願者ハ八名ニシテ身体検査ニ合格シ現役ニ採用セラレ、入團セシモノ二名ナリ。

徴兵及ビ海軍兵ニ入營ノ為メ出発ノ際ハ各戸一人ツツ必ズ村境マデ見送りヲナスノ慣例ハ実査ニ行ハレ新入兵ノ發登毎ニ絡繹トシテ行列最モ壯觀ヲ極ム。其他兵事ニ関スル事務多シト雖ドモ兵事ニ関スル事務ハ秘密ヲ格守スベキ事多ク且ツ軍機保護法發布後ハ其筋ヨリ屢々注意モ之有リ報告スル事ヲ得ズ。

### 二、戸籍

戸籍八百四十四戸ニシテ人口五千二百五十三名、出生者百七十七名、死亡者百五十名ナリ、又婚姻及離婚養子縁組等ノ惣計ハ三十五件ニシテ戸籍法改正実施以來戸籍ニ関スル事務ハ頓ニ

増加ヲ来タシ就中戸籍謄本ノ下附ヲ請フモノ陸續相踵テ来リ、之ガタメ一方ニハ下附請求ノ急需ニ応ジ一方ニハ整理上ノ違算ナキヲ期センガタメ最モ多忙ヲ極ム。即チ本年度ニ於テ戸籍ニ関スル官衙及ビ人民ヘ發送セシモノ百七十八件今上ニ対シ官衙人民ヨリ收受セシ文書七百五十二件今上ニ関スル奥書証明事件五十件、戸籍閲覧請求人六十八名、又戸籍謄本交附ノモノ百四十一名ニシテ其戸籍原本紙数ハ殆ンド四百三十枚ヲ以テ数ウルニ至レリ。

### 三、学事

尋常高等併置学校一、尋常小学校一、分校一ニシテ其生徒惣數ハ尋常科、男二百七十三、女百九十四名ニシテ之ヲ昨年ニ比シ何レモ八名宛ヲ減ジタリ。又高等科、男百三十八、女三十名ニシテ之ヲ昨年度ニ対照スルトキハ男二十四名ヲ減ジ、女六名ヲ増加シタリ。而シテ其増減ノ原因ハ専ラ出生者ノ多寡ニ起因スト雖ドモ高等科男ノ減ジタルハ主トシテ他村通学生入校謝絶ノ結果ニ過ギズ学齡兒童就学ノ歩合ハ本年ハ稍々満足ノ結果ヲ見タリ。即チ本村ハ郡内ニ於ケル第一位ヲ占ム今其割合ヲ示セバ男子ノ百比ハ九十三人余、女子五十七人余ナリトス。男子ノ就学ハ殆ンド極度ニ近ヅキタルノ觀アルモ女子ハ尚大イニ督促ヲ加フベキ余地アルヲ以テ、明治三十二

年十二月ヨリ生徒組合及ビ教育組合ヲ実施シタリ、即チ生徒組合へ一部落ヲ以テ組合区画ト定メ年長生ヲ組長ニ挙ゲ尚各組ニ監督教員一名ヲ置キ命令指揮ヲ掌リ一致協同シテ組合ノ風紀ヲ正シ、併セテ欠席者不就学者ナキヲ唯一ノ目的トセリ、而シテ翌月五日ニハ組合生徒ノ出席数ヲ調査比較シテ優等ノ組ニ一等賞旗ヲ與へ、順ヲ追ヒ十等ヲ以テ最劣等ト定ム。該組合実施以來組合相互ノ協同的競争ノ結果ハ著シク出席数ヲ増加シ、其成績最モ良シ、又教育組合ハ之ヲ十組ニ別カチ毎組ニ組長一名評議委員二名以上ヲ置ク。組長ハ区長ニ委託シ、評議委員ハ其組合員ノ互選トス。別ニ惣長一名ヲ置キ、村長ニ之ヲ囑託シ組合全体ノ事務ヲ惣理ス。而シテ規約ノ精神目的ハ教育ノ普及改良ト学校ト家庭トノ連絡ヲ綜合シ学事ノ隆盛進捗ヲ企圖スルニアリ。

右等方法順序ヲ一般ニ説示シ執行上ノ円満ヲ期センガ為メ十二月十八日ヨリ学務委員教員ハ各部落毎ニ談話会ヲ開クコト六回ニ及ビ毎回夜ヲ徹シテ熱心ニ奨励誘導ヲ加ヘタリ。

#### 四、勸業

養蚕製糸ノ二業ハ近来長足ノ進歩ヲナシ、今ヤ米穀ニ次グ重要物産ノ一二数フルノ盛運ニ至リシヲ以テ尚、斯業ノ改善発達ヲ企画センガ為メ、三十二年六月二日三日ノ両日庄内小学

校ニ繭品評会ヲ開キ、三日ニ褒賞授與式ヲ舉行シタリ。出品点数百点、一等賞一、二等賞三、三等賞十、一等賞ハ白崎任之氏ノ寄贈ニ係ハル八角時計ヲ授ク、此ノ名譽ニ預リシ者ハ馬籠善七ナリ、又三十二年八月廿六日五ヶ村聯合農談会ヲ本村ガ座主トナリ觀瀾舎ニテ開キ農業上ニ於ケル重要問題ヲ討論審議無事閉会ヲ告ゲタリ。出会者ハ志和池村四名、山田村四名、高崎村三名、西岳村五名、庄内村廿七名ナリシ、又三十二年十月六日ヨリ九日マデ稲田立毛品評会ヲ開キ審査委員六名ヲ挙ゲ審査ノ結果乙房区内ヲ最優等ト判定シ、東区之レニ次ギ、干草区ヲ最劣等ニ置キタリ。而シテ該品評会ニハ本郡ヨリ補助金拾六円六拾六錢六厘ヲ領受シ賞金ニ支出シタリ。又三十二年十二月一日ヨリ全四日マデ開会シタル郡内品評会ハ高崎村ニ之レヲ執行ス。本村ヨリ出品シタル者ハ米六十五点、繭式点、織物八点、生糸一点、其他裸麦実綿等惣計百三十四点ナリシ。而シテ本村内受賞者ハ六十七点ニシテ大豆及稻株二名一等賞ヲ受ケ、米及ビ大豆並ビニ実綿二名二等賞ヲ受ケ三等四等ノ受賞惣数六十点ナリ。

#### 五、衛生

流行病ノ發生ハ直接ニ貴重ナ人命ヲ損シ間接ニ国家ノ生産力ヲ害シ不幸慘胆極マリナキヲ以テ平素衛生組合同規約ノ勵行ヲ



カメ、清潔法種痘法等ハ時期ヲ誤ラズ之レヲ実施シタリト雖  
ドモ三十二年十一月七日今屋区ニ実布<sup>ジフチリヤ</sup>的里<sup>リヤ</sup>特発シ、尚、三  
十三年一月二十五日干草区ニ全病発生シ患者二名共ニ死亡シ  
タルヲ以テ何レモ火葬ニ附シタリ。右患者発生ニ付イテハ隔  
離法ト消毒法トヲ嚴重ニシタルノ結果、幸ニ傳播ノ難ヲ免レ、  
又本村ニ於ケル火葬ハ今回ヲ以テ初メナリシヲ以テ執行上言  
ウニ忍ビザル困難アリシモ私情ハ断ジテ之ヲ排斥スルノ模範  
ヲ一般ニ示シタリ。又死骸搬出ノ人夫ナキニハ大ニ困難ヲ感  
ジ遂ニ衛生委員ヲシテ其任務ニ當タラシムル止ムヲ得ザルノ  
挙ニ至レリ

## 六、土木

庄内ヨリ財部村ニ通ズル字母智丘谷ノ築立工事ハ地方税ノ補  
助ヲ請ケ、目下之レガ起工中ニ係レリ、又庄内ヨリ都城ニ通  
ズル郡道ハ其工事ヲ請負事業トナシ之レ又目下起工中ニ係レ  
リ、右ニ路線工事後落成後ニ於ケル運輸交通上ノ便益ハ今茲ニ  
喋々ノ弁ヲ要セザル所ナリトス。

右、報告ス

明治三十三年四月十二日提出

庄内村長 蒲生 才蔵

印

## 私と庄内農協の歩み

東区 黒木 正

終戦、外地からの引揚げ、当時十六才の小生には日本の敗戦  
という想像だにせぬ事態に只何をしてよいやら呆然自失の毎日  
だった。

両親と共に庄内の祖父母の許に引揚げたものの食料不足に悩  
まされ、政府から払下げを受けた山林開墾に明け暮れ食料を確  
保することが最大の必要事だった。

その頃敗戦国日本再建のため“青年よ立ち上がれ”と復員軍  
人達が中心となり庄内劇場（町下の現縄工場付近）に若者を集  
め決起集会在再三開かれたものである。その力は昭和二十二年  
男女平等の選挙権で戦後初めて行われた県会議員選挙で田崎藤  
雄氏（第六代庄内町長・故人）を県政壇上に送り込むという快  
挙をやったのけたものである。その頃の青年指導者の中に野村  
君雄（平田）宮島忠（宮島）の両氏と小生の兄黒木寛の三名が  
居て同時に県庁入りし庄内の三羽鳥といわれていたようだ。

これ等の先輩から人生の目標を失った俣だった小生は懇々と

説教を受け、農協講習所を受験する決心をした。この事が小生と農協を結ぶ直接の原因となったものである。

一年間の講習所生活を経て卒業と同時に宮崎県販売購買農業協同組合連合会（現在の経済農協連）に就職し二十七年には地元庄内農協に転職した。

ここで庄内農協の歴史を振り返ってみると、明治三十八年庄内信用組合設立、大正十四年庄内信用販賣購買利用組合となり以後昭和十年迄は信用事業中心に運営されていた。昭和十八年大東亜戦争遂行に関連し庄内町農業会設立、昭和二十三年農業会は解散し庄内町農業協同組合が発足した。

小生が庄内農協に就職した頃は打ち続く台風災害等により農協経営は火の車であり、多額の赤字を抱え遂に昭和三十二年には行政の援助を受ける再建整備法の適用を受けることになった。

当時の台風には女性の名前が付けられていて、当地方を襲った主な台風は昭和二十四年デラ、フェイ、ジュディス、昭和二十五年フロシー、グレイス、キジア、昭和二十六年ケイト、マジ、ルース、昭和二十七年ダイナ、等であったが、昭和二十八年からは台風第〇号と呼ばれるようになったものの毎年数個の台風が襲来し、農家経営に多大の損害をもたらし農協経営にも深刻な影響を与えていた。

再建整備に入ってから自己資本の充実を図る為、早朝全役職員タスキをかけ自転車集落を巡回したり座談会を開いたりして組合員の理解と協力を呼びかけたものだった。忘れもしない昭和三十五年には職員の人員整理が行われることになり、当時職員互助会役員であった小生等は相図って給料の十%返上を申し入れ人員整理を最少限にする様申し入れた。然し結果として職員三十八名を二十九名に、理事十名を七名に減員することになった。整理対象になった女子職員が金庫室の隅で抱き合っ

て泣いていたのを今でもはっきりと覚えている。その後役職員組合員一体となった頑張りで昭和三十八年再建整備は完了した。当時無報酬で就任して頂いた役員は組合長が西原功氏（平田）のほかはすべて故人となっているが、次の方達である。

理事横山新一（川崎）和田義平（西区）帖佐四郎（東区）蒲生利行（千草）万代辰実（宮島）馬込良幸（乙房）監事田川正江（関之尾）花盛林（今屋）吉川藤雄（乙房）

昭和三十年代後半に入ると豊作の年が続き、庄内農協も事業の伸びと財務の好転が著しく経営の改善は目を見張る程であった。施設も事業の拡大に伴い昭和四十年給油所、昭和四十三年農機具サービスセンター、昭和四十四年農産センター、昭和四十六年家畜審査場、昭和四十七年養豚共同飼育場等逐次整備さ

れ、昭和四十八年には事務所隣地にあった旧庄内町役場跡地を都城市より譲り受け現在の事務所を建設した。

一方国内では高度経済成長政策が高揚され経済は画期的な技術革新で飛躍的に発展を続けていた。反面農村労働力は大量に流出し農業生産は粗放化し生産の停滞ないし減退を招き兼業農家の増大という傾向を強めた。

このような農協の苦難期から安定成長期に入り、都城北諸地区にあっても組織整備協議会が発足し広域大型農協を目指す方向での研究討議がなされることになった。その後合併へのあゆみはなかなか軌道に乗らず「総論賛成、各論反対」の言葉が生まれ一時は協議会解散という最大破局を迎える寸前にまで追い込まれたが『豊かな農業と農協機能の強化をはかり新時代に対応する為には合併すべし』の声が強まり、昭和五十年二月「都城農協」という全国一を誇る大型農協が誕生し庄内農協もその一員として参加する為解散することになった。

振り返ってみると庄内農協は数多くの農協の中でも共存共栄の旗印の下団結力が強く、逆境の中にあってもそれぞれが自分の役割をしっかりと受け止め助け合って協同の力を発揮してきた団体であり、その中で自分の人生の大半を過ごせたことは最高の幸せだったと思っている。

最後に農協運動に奮闘され今は故人となられた数多くの諸先輩、並びに同輩諸氏の御冥福を心から願って筆を措くこととする。

#### 歴代組合長の推移

昭和二十三年	松元 和夫
” 二十四年”	横山 新一
” 三十一年”	今村 清二
” 三十四年”	西原 功
” 四十四年”	大神 勉



# 庄内町情報

## 宮崎「庄内会」から

庄内会会長（西区出身） 牧ノ瀬 正雄

「庄内の昔を語る会」の皆さんお変わりないことと存じます。平素から皆様方には私ども庄内会の運営に温かいご支援を賜り厚くお礼を申し上げます。

平成十三年度の総会も例年のおり三月に開催し、「庄内の昔を語る会」から役員の方のご出席を頂き会員の交流と親睦を深め有意義な総会であったことに感謝申し上げます。

さて、今回の総会におきまして、役員のご改選を行うとともにかねてから庄内会の運営に広告の提供など多大なご協力を頂いている「霧島酒造」ほか九名の方々に「感謝状」を贈りました。

私ども庄内会は、昭和五十一年四月、ときの宮崎警察署長であった村井孝さん他有志の方々呼びかけにより、宮崎在住の庄内出身者を会員として発足し現在に至っております。

現在会員は、百三十七人（男性八十六人、女性五十一人）で毎年の総会には、かなりの会員が出席されお互い馬齢を重ねた会員の多い今日：昔の庄内の思い出に話しがはずみ、時の経つのも忘れる程楽しいものがあります。



平成13年度 庄内総会記念写真（H13. 3. 10）

最後に「庄内の昔を語る会」の今後のご発展と皆様方のご健勝を祈念して庄内会総会のお知らせとします。

# 庄内地区公民館に勤務して

都北町 長 峯 泰太郎ヒロ

宮崎市を初め二市三町二村におよぶ県内の小・中学校勤務に  
終止符を打つ時が間近かに迫っていた。

第二の人生をどのように過ごしていったらよいかいろいろ  
思案していた時、都城市役所から仕事の勧誘があった。

勤務するか断わろうかいろいろと悩んだが、是非ということ  
で受諾することにした。

その時点では、どの地区の公民館に赴任するのか正確には判  
明していなかった。

平成十一年四月一日、都城市長から「非常勤嘱託に併任する」。  
市教育委員会から「庄内地区公民館指導員業務を嘱託する」。  
との辞令をいただいた。退職後の仕事として誠に光栄なことだ  
と思った。

その場で仕事の内容等について概略説明があったが、未知の  
職場なのでやや不安もあった。

三月三十一日までは、市役所職員が「主事」として勤務し地

域住民に係る業務に従事されていたとのことであった。

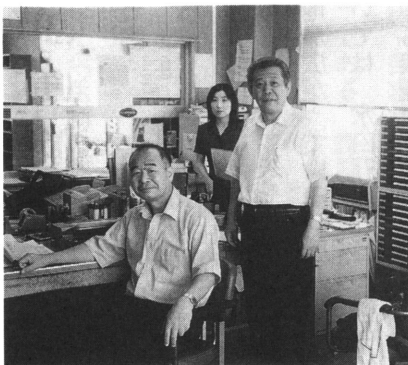
四月から庁内の組織編成替えて中郷・沖水・志和池・庄内・  
西岳の公民館が全て嘱託職員となった。

同時期に庄内に勤務した方が健康上の都合で一年後に退職さ  
れ、その後は私が副館長として現在に至っている。

仕事の内容を概略説明すると、地区公民館・地区体育館（含  
乙房小学校・菓子野小学校の体育館）・市民広場の貸し出し業  
務。

市民広場のナイター電気使用料（コイン渡し・鍵渡し）・地  
区体育館（乙房小・菓子野小）電気使用料・地区公民館使用料  
（有料・無料）および冷暖房使用料等の集金業務も取り扱って  
いる。

この集金業務が公用団体・準  
公用団体・減免団体と区分され  
やや複雑である。そのため、冷  
暖房・部屋代使用料・印刷代徴  
収等でご迷惑をおかけすること  
もある。徴収した金は即庄内J  
Aに納金するシステムになって  
いる。



また、公民館備品（グラウンドゴルフ用具・紅白幕・テント・提灯・机・椅子等）の貸し出し業務もある。

それと、地区の行事（ふるさと祭り・スポーツレクリエーション大会・庄内地区Y・O・U遊駅伝大会・高齢者の体育祭り等）に對して側面からの協力や来客の対応・公民館の管理・電話の取り継ぎ・連絡・文書の收受・作成・調整・調査・企画・提出・会議等への出席・市民広場へコイン取り・ワープロ打ちと複雑多岐におよぶ仕事である。

最近では、パソコンでの文書作成や電子メールの送受信等の技術も要求されており頭痛の種である。

私達の勤務態度が体制替えをして成功したと言われるようにならないので責任重大である。

平成十三年度からは都市市十一地区全ての地区公民館が新しい体制による嘱託職員となった。

その私の職務も既に三年を経過しようとしている。と同時に歳月の経過の速さをも痛感している今日この頃である。



## 庄内地域農業の現状と課題

平田 満 永 輝 実  
(JA都城庄内支所長)

庄内地区は、市の北西部に位置しており中央を庄内川が流れ、その両側に水田地帯、高台に畑地が広がっている。農家戸数は九八一戸があり、農地面積については、水田五九五ha・畑四八六haの耕地面積で、農家が販売する農畜産物のうち七割が畜産（和牛・酪農・豚・馬・肥育）・三割が農産、園芸（米・露地野菜・ハウス野菜）の耕種部門である。

庄内地区で販売額の大半を占める畜産のなかでも和牛生産が中心で繁殖牛一八一七頭が飼育され、年間一三七〇頭余りの子牛を出荷している。また全国的にも有名な宮崎県事業団所有の種雄牛『安平号』があり、全国各地より購買客が来県し堅調な価格で取引されている現状にあるが、近年高齢化が急速に進み現在二四〇戸の和牛生産農家のなかで七十才以上が七七戸と約三割を占め、後継者対応策が急務となっており、畜産全般を含めた環境対策と合わせて対応策を検討中である。一方耕種部門の農産では庄内地区の全水田において、平成元年から平成四年にかけてブロックローテーションが形成され、現在も継続して集団転作が実施されているが、畜産が減少する中で飼料作

物に変わる転作作物として里芋等が作付けされてきたが、生産調整の見直しにより非常に大きな転作面積が割り当てられ、近年輪作による生育障害が発生している。このため早急な新規転作作物の導入が望まれている。

全般的に近年の農業は、グローバル化（国際化）が進み、企業は国境を越えた競争をし、国内の農畜産物も外国の影響を大きく受けるようになって来ており、また食糧農業農村基本法や環境三法も施行され、農業に対する国民の価値観が多様化し農業を取り巻く環境も激しく変わりつつある。農家の高齢化や担い手の減少、さらには輸入農畜産物の増加に伴う価格低迷等に加え、米をはじめとする需給均衡を図るための諸施策の段階的な導入は、農業生産に対する農家の意欲を減退させ、農業の経営中止や不耕作地の増大を招く結果となっている。本地域農業の主軸である畜産の維持拡大を図りながら、土地利用型耕種農業の積極的な展開を行い、安心して生産できる契約的作物の導入を行い農地の有効利用に努め、畜産と調和のとれた地域農業生産構造を確立していく事が重要と思われる。また長期的な取り組みとして、将来農地に整備される畑地かんがい施設を利用し機械化体系による省力化を視野に入れ、安定した需要が見込まれる茶の産地育成を図っていく計画である。最後に環境にやさしい農業確立のため地域住民の皆様のご理解、ご協力を宜しくお願いたします。

## 学校便り

### 庄内小学校

教頭 後藤 良雄

総合的な学習の時間（特色ある教育活動）

学習の時間になると、「教頭先生、〇〇〇はどんなことですか。どこで調べたらよいですか。」と質問してくる。そこで、教頭としては、調べ方やヒントは教えるが、答えは絶対に教えない。逆に質問し、課題性をもたせるように気をつけている。

総合的な学習の時間のねらいは、「(1)自ら課題見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てる。(2)問題の解決や探求活動に主体的、創造的に取り組む態度を育成すること」である。課題を見付け、考え解決する力などの「生きる力」を育て、情報の集め方、調べ方、自分の考えや意見、分かったことのまとめ方等、児童が自己の生き方を考えられるように教頭として支援していきたい。

#### (1) 総合的な学習の時間の活動計画

・活動計画は、昨年度に作成した「活動の全体構想」と「年間計画」を参考にして、各担任が学級の実態を踏まえて改善

する。

(2) 各学年のテーマ等（名称「いちいタイム」

学年	テーマ	時数	ねらい
3	とびだそう！庄内の人と自然	45	地域の人たちの生活の様子や自然の変化に気付き自分たちの町を大切に する気持ちを育てる。
4	再発見 用水路への旅	54	前田用水路について体験活動を行う ことを通して地域への愛着と感謝の 気持ちを育てる。
5	なるほど ☆ザ☆米 作り	50	田植え、草取り、稲刈り、餅つき等 の活動を通して農業をする人々の苦 労や工夫を理解させる。
6	庄内歴史 への旅	50	歴史的建造物や史跡等を調査するこ とによって先人の偉業を知り、郷土 に誇りと愛着をもたせる。

## 庄内小まつり

学校創立百三十周年を記念して保護者や地域の方々との協力で庄内小まつりを二〇〇〇年から開始した。子供の豊かな人間性は、豊かな生活体験の中から育つものである。しかし、便利で物の豊かな環境の中で育った庄内小の児童は、苦勞して自分た

ちの手で作り出す喜びや作ったもので遊ぶ体験がなく、自然や人とのふれあい等も不足している。そこで、庄内小まつりでは手作りの物の製作や地域内の様々な人々や高齢者とのふれあいの場を設け、児童が体験活動を通して豊かな感性と自己を発揮できるように努力した。

(1) ねらい

親子のふれあいや地域の方々との交流を深め、児童が体験活動を通して豊かな感性を身に付け、地域に根ざし身近で開かれた学校をめざす。

(2) お仕事大好き

親が先生になった授業で、苦勞話、失敗談、うれしかったこと等、「親の生きる姿勢」を話してもらい、児童の質問・感想を入れて、各家庭の話題にしてもらう。

8:30	8:40	8:50	9:35	9:45	10:50	11:10	12:20	12:50	14:20	14:30	14:50
運動場	各教室	各教室	各教室	中庭	準備	準備	南庭・教室	運動場			
開会式	10分	ふれあい観 ・保護者 ・地区民	10分	お仕事大好き (ふれあい学習) → 65分 ←	かたづけ 準備 20分	模擬店 バザー → 70分 ←	準備 30分	やっちゃんな 庄内小/ (ふれあい学習) → 90分 ←	閉会式	片付け 帰りの会	



看護婦の仕事 ▶



◀ 大工の仕事

学年	学習内容	指導者	担当者
1	むかしの遊び	保護者	保護者 教職員
	おかし屋さん		
2	ゆうびん屋さん		
	農業		
3	和牛		
	市場		
4	消防		
	花づくり・土づくり		
5	きゅうり栽培		
	看護婦さん		
6	建設		
	大工～実技を含む		

## 菓子野小学校

教頭 別府 一男

### 学校の紹介

本校は、昭和二十五年四月に地域の方々のご尽力により、庄内小学校菓子野分校として開校し、翌二十六年四月、庄内町立菓子野小学校としてスタートしました。その後昭和四十年都市と庄内町の合併により都城市立菓子野小学校となり昨年創立五十周年を迎えました。

昨年は、年度初めに創立五十周年記念事業実行委員会を発足させ、PTA三役を中心にイベント部、資金調達部、資料作成部の三つの部を作り、準備を進めてきました。そうして十一月十二日(日)に記念式典と祝賀会を実施しました。この日は、岩橋都城市長、長友教育長等多くの来賓のご臨席のもとに多くのPTA会員、地区民の方、以前勤務された先生方とともに五十周年を祝いました。

現在、学級数七、児童数一四



三名、教員数十四名の組織で、教育目標に「豊かな心をもち、元氣よく意欲をもって、自ら学ぶ子どもの育成」を掲げ、日々子どもたちの教育に当たっています。

### 本校の特色ある教育活動

#### 「本校の環境教育」

現代の教育課題のひとつに環境教育が取り上げられています。が、本校では次のような活動を行っています。

#### ○菓子野クリーン大作戦（全校、十一月）

この活動は、土曜日の三時間の創意の時間を使って、児童がまず自分達の地区の公民館や公園等の清掃を行う。ごみ拾いや空缶拾いをして、自分達の地区をきれいにする活動です。

#### ○ホタルの飼育（六年）

本校区は、まだ川の水がきれいで、ホタルが生息している場所があります。本校では、もっと菓子野にホタルを増やそうとすること、ホタルを獲ってきて、学校で産卵・ふ化させて、また川に戻してやる活動を行っています。

#### 「総合的な学習の時間」の活動

平成十四年度より「総合的な学習の時間」が完全実施される

ことになっています。本校では現在、三つの領域「環境・人間・福祉」の学習を通して、子どもたちに生きる力を身に付けさせるよう教育活動をしています。

ここに、その実践のいくつかを紹介します。

#### ◎三年生「花が大すき虫が大すき」

この活動は、「生き物への関心を持ち、その命や周りの自然を大切にする。」「生き物を育てながら、生き物の育つ環境について考える。」という目標のもとに次の様な活動を行っている。

- ① 菓子野のいいところについて考える。
- ② 花や虫を育てる計画を立てる。
- ③ 生き物を育てる。公民館に育てた花を持っていく。
- ④ 生き物を育てた感想、地区のみなさんに楽しんでもらった感想を話し合う。

#### ◎四年生「クリーン大作戦」

この活動は、四年生が年間を通しての活動で、菓子野からごみをなくそうと言う目的で行っています。

この写真は、わたしたちの学校の周りのごみです。このごみの中で、一番多かったのは、もえないごみです。すごく多かったので、びっくりしました。資源ごみは一ふくろでした。

## ☆「ごみひろいの感想」

○もえるごみが少なかったのでびっくりしました。

○タバコのすいながら道路いっばいに落ちていました。

○あき缶がたくさん捨ててあって、たいへんでした。

○もえないごみは、もやせるごみの二倍位ありました。

○ナイフが捨ててあったので、びっくりしました。



## 乙房小学校

教頭 日高啓子

本校の特色ある教育活動

「総合的な学習の時間」の取り組み

学校は、平成十四年度より、完全学校週五日制の下、「ゆとり」の中で、創意工夫を生かし特色ある教育活動を展開しながら、豊かな心や自ら学び考える力などの「生きる力」を育成する新しい教育が実施されることになる。そのメインが「総合的な学習の時間」として特設され、本校では、福祉教育を中心テーマに掲げ、平成十二年度より様々な教育活動を行ってきた。ここに、各学年の実践を紹介します。

三年生くふれあおう乙房の町

単元名「わたしたちの花いっぱい

運動」

五月にマリーゴールドなど四種類の花の種をまき、芽が小鳥についばまれるというアクシデントに会いながら、順調に花として育てることができた。九月にプランターを学校前の沿道に設置し、鉢植



えは手紙交流しているお年寄りの家を訪問し、贈った。沿道のプランターの花に近所の人が水をやってくださったり、訪問したお年寄りからお礼のお手紙をいただいたりといういろいろ反響もあった。花を育てる技能を身につけるとともに、乙房の町の人たちに喜んでもらえる活動ができた。

#### 四年生く広げよう友だちの輪

単元名「いろいろな人がいることを知ろう」

長年、行ってきている都城養護学校の友達との学年交流をより深めていく活動から取り組んだ。お互いのことをよく知るため、ビデオレターや質問レターの交換をしたりして、交流会の活動の準備を行なった。交流会においては、グループごとに手作りゲームなどの遊びを通して、楽しくふれ合うことができた。さらに、交流を通して持った様々な障害についての疑問を、学習課題



にかえ、聴覚障害や視覚障害の方々からの話を通して直接学ぶ学習も行った。又、手話活動やアイマスク体験も取り入れ、障害者の立場を少しでも理解させることができ、意義ある学習であった。

#### 五年生く見つけようボランティアの心

単元名「ボランティアって何？」

福祉ボランティア活動について、新聞記事などから、情報を収集し、ボランティアについての理解を深める学習にまず取り組んだ。次に、「ボランティア教室」と名をつけて、介護・手話・バリアフリーについて、専門的に携わっておられる方を講師とする学習を行い、児童のボランティア活動に対する興味関心を高め、次への学習課題づくりへと発展させていった。児童それぞれにやりたいことを考えさせながら、車椅子介助体験・介護体験・手話体験、バリアフリー調査など、四つの課題別グループに分かれ、活動体験学習を進めていった。ふれる、気づき、考えるなかで、



五年生個々の児童なりの「ボランティアの心」を体得できる学習であった。

## 六年生く深めよう福祉の心

### 単元名「乙房苑との交流」

乙房苑の様子や乙房苑で生活している障害者のことを知るため、乙房苑へ見学に行った。乙房苑職員の方の話や施設見学を通して分かったことをまとめるなかで、交流を進めるための学習課題を作り、学習を進めていった。まず花をプレゼントしようということ、花の栽培活動に取り組んだ。花作りの手順や水やりの工夫など、調べ学習し実践していった。又、交流会の内容も、乙房苑の方々の状態や立場をよく考えながら、どんなことができるか考え、話し合いながら、準備活動していった。交流会は、三学期に実施した。合唱や踊りの発表、車椅子を押しての散歩など、卒業を前にしてのよい思い出となるものであった。



## 庄内中学校

校長 黒木敏行

はじめに

庄内中学校は、平成十三年度になって、新校舎の建築、野球部の九州大会優勝など大きなできごとがありました。そこで、庄内中学校の近況と、これから考えられることを述べてみたいと思います。

### 一 新しい校舎について

伝統のある庄内中学校に、新しい校舎が完成しました。この校舎は、多くの方々にご苦労いただいで、平成十二年度から着工されて、平成十三年八月に完成します。二十一世紀という新しい時代に適合した設計がなされております。

新しい校舎の主な特徴を述べてみます。

#### ○ 広さとゆとりがあること

玄関等の天井は吹き抜けとなっており、また、玄関や廊下や階段は広めにとられて空間的にゆとりがもたせてあります。

#### ○ 車椅子使用者への配慮がしてあること

車椅子使用者用のトイレ、エレベーターが設置してあります。また、すべての校舎が車椅子が通れるように、スロープのある渡り廊下でつながっており、いわゆるバリアフリーと

なっております。

○ 明るくて柔らかい建物

外観は、色彩は明るく、

形は曲線もつかわれております。

また、室内は、床が檜材、

壁が杉材が使われております。窓が広くとられて、明

るく光を入れるようになっております。

全体的に明るく柔らかい感

じの建物になっております。

○ 情報化時代に適応していること

コンピュータ室には、時代にに応じて新しいコンピュータが四十台設置されております。インターネットで情報はどこからでも入手できるようになります。

このように、時代とともに校舎も大きく変わってきました。

昔のなつかしい箱型の校舎から、丸くて柔らかい感じの現代の校舎、いわば「人に優しい校舎」となっております。



## 二 庄内中野球部、九州大会優勝、全国ではベスト8



庄内中学校野球部が中体連九州大会で優勝、全国ではベスト8に入りました。庄内中創立以来初めてのことで、このことの意味と要因について考えてみます。

簡単に経過を述べて

みますと、まず、都城

市大会で優勝、県大会

では、四校と試合しま

した。決勝では、宮崎

市立大塚中学校に勝っ

て宮崎県一となりました

た。九州大会では、各

県代表四校と試合しま

した。決勝では、大分

県代表の明豊中に勝っ

て、九州一となりました

た。全国岡山大会では、北信越代表富山中に勝ちベスト8に入りました。ここまで連戦連勝でしたが、関東代表松戸第六中に惜敗しました。

○ 庄内中学校のもつ伝統的な力

庄内中学校の野球部は、市大会、県大会、いろいろな大会でも何度か優勝しております。また、庄内中学校は、伝統的に、サッカー、バスケット、バレー、テニス、剣道、陸上、吹奏楽、美術、科学など、部活動がとて盛んであります。また、今回は、相撲でも全国大会に出場しました。生徒会活動も盛んであります。優勝の背景にはこうした伝統的な力も大きいと思います。

○ あいさつや人に奉仕する素直な生徒

庄内中の生徒は、謙虚で素直であると言われます。今回も、野球部が連戦連勝しても、奢り高ぶる姿は少しも見られず、いつも、指導者の指示に従って、地道にこつこつと練習してきました。中学生らしい謙虚で素直な心が優勝の源であると思います。

また、野球部が、毎朝、校門であいさつ運動をしたり、普段からあいさつがよいことは、みんなが認めています。優勝をもたらすチームは、あいさつがよいと言われます。また、

練習が終わるとグラウンドをきれいに整備したり、清掃したり、ゴミを拾ったりします。チームが強くなるためには、あいさつや人に奉仕する心が大切であるということを、今回の優勝は教えていると思います。

○ 保護者の熱心な協力

指導者は、精神面と技術面に一貫性をもって指導しております。それを、野球部の保護者が理解して、後援会としてお互いにまとまって、協力してきました。このような後援会の活動も大変よかったです。庄内は文教の街として保護者の協力も大変よいと思います。

おわりに

新しい校舎、野球部の優勝、これらのことを教育に活かすことが大切であると思います。今、学校で努力していること、これから努力しなければならないことを述べてみます。

(1) 心のプレゼントをたくさんしよう

「人に優しい校舎」には、それにふさわしい心の優しい人が求められていると思います。「こころ」という言葉のもつ柔らかな響きは、優しさや思いやりを意味していると思います。これを広げるために、学校では、「心のプレゼント」を呼びかけ

ております。プレゼントとは、人のために何かをすること、例えば、明るいあいさつをしたり、「ありがとう」と感謝したり、困ったを手伝ったり、優しい言葉をかけたり、人が喜ぶことをすることです。大人も子どもも一緒にあって、心のプレゼントを学校、家庭、地域へと広げていきたいと思えます。

世の中には、高齢者、幼児、障害のある人、様々な考えをもった人、本当にいろいろな人がいます。すべての人が生きる喜びを分かち合うような明るい世の中になるように、心の教育を一層大切にしたいと思います。

心のプレゼントをたくさんしましょう。

☆明るいあいさつ

☆「ありがとう」

☆人が喜ぶこと

## (2) チャレンジ精神をもとう

中学校野球部は、九州のたくさんの中学校の中で文字通りナンバーワンであります。庄内中学校の生徒は、「やれば力がつく」、そして「高いレベルを目指すことができる」ということを、野球部が実証してくれたのです。スポーツ、文化活動、学習活動、生徒会活動など、いろいろな面で質の高いものを目指

してほしい、いろいろなことにチャレンジしてほしいと思えます。これを機会に、更に、明るい希望をもって一步一步前進してほしいと思えます。





# 随想・追憶

## 庄内の人(3)

鷹尾町 得能哲夫

(一)

荒れた庭を、ぼんやり眺めていると、電話が来た。

「庄内の昔を語る会」の世話をしている、坂元徳郎氏であった。

坂元氏の電話は、普通は「語る会発行の『庄内』の原稿を、〇〇月〇〇日まで、忘れんゴツ。頼ンモシデナー」である。

受話器を取ると「元気ナー。チョッ、イッカセツ、クレンナー」(元気ですか。ちょっと、教えてくれませんか)

普通の電話と、違うのである。

坂元氏と私は、子供の頃、庄内町東区、なま梅井馬場で、グミ、モモ、梅、柿等を、親にかくれて食べ、怒られて育った仲間であ

る。

坂元氏が、教えてくれと言うのは、現在使用されている、庄内小学校の、運動場のことであった。

今の運動場は、その昔大きな池であった。私たちは「がっこういけ学校池」とくながどん「徳永殿の池」と呼んでいた。

学校の池に、城山のシラス(白砂、白色の火山灰や軽石)を、前田用水路の水を使って埋め、運動場を作ったのである。

その時の流し工事であるが、庄内町の忠霊塔の入口(旧、椎谷和夫宅)から、花房兼光氏宅前を流れ、学校の池までは、わかつていたのであるが、前田用水路から、城山をどの様にして貫流させたのか、わからないと、言うのである。

子供の頃のことであるが、何か聞いていないか、聞いていたら教えてくれ、と言うのである。

その頃の子供は、学校から帰ると、みんな道路に集まり、缶けり、陣とり、相撲等をして、夕方まで遊んでいた。

その遊び場が、流し工事のために、使えなくなったので、みんな残念がったのを、覚えている。

また、地区の人や、父母が「かき椎屋どんの所から、城山には、危ないので近づくな」と、厳しく注意されるので、なま梅井馬場の元気者の子供たちも、諦めていたと思う。

坂元氏が困っているのです、昔遊んだことのある友だちを思い出して、名前を知らせると、残念ながら、昔の友だちは大部分が、亡くなっていた。

坂元氏が、流し工事の資料集めにまわって聞いた話を教えてくれた。

当時の町長の清水清次氏が、庄内小学校の高等科（現在の中学校一、二年生）に、流し工事の奉仕作業を、お願いされたのである。

その奉仕作業に参加した高等科の生徒は、現在八十才になっておられる。私たちは、遊び場をとられて、困っていた。流し工事は、長くかかったと思っていたが、坂元氏の調査で、十日ぐらいで終わる、突貫作業であったそうである。

昭和三十一年頃の記録をめくっていると、PTAの研究会があり、他町の方々が「庄内の町、庄内の人」に対しての、感想を述べておられた。

(1) 庄内町は、石垣の多い所である。

(2) 大きなお寺（願心寺）お軍神様（庄内小学校の門の横）が、ある所である。

(3) 「おっとりとした人たち」のいる所である。

(4) 子供の教育に、熱心な所である。

昔の庄内の様子を、短い言葉でまとめた感想であると思った。庄内小学校の運動場の流し工事は、庄内町の町民の心をあらわしている工事ではないかと思った。

(二)

昭和三十一年頃であったと思う。庄内にカメラクラブが生まれた。名前を「アルファクラブ」と呼んでいた。

会長を願心寺の前住職、大河内浩爾氏、副会長に、旧庄内町立病院、副院長山元寅男氏にお願いした。

会員は、十三名ぐらいであったと思う。警察官を始め、いろいろな方が入会しておられた。お世話になった会員の方々も、現在は会長、副会長を始め、大部分の方が、天国に旅立ってしまった。

会員の中で、一番若かったのが、坂元守雄氏（現、宮崎市在住）で、会計であった。

月一回、願心寺の書院で、例会が開かれた。

会員が作品を出し、講師の方の助言を聞きながら、研究を深め、楽しんだ。

写真の次は、食べ方の話、宗教の話と続いた。

会員が、珍しい酒が手に入ると、持って来た。会計の守雄氏

が急いで「つまみ」を準備した。みんなで味わった。

酒が入ると、カメラの話から離れ、話は話と呼んで、夜中まで続いた。そのいろいろな話の中身を、今でも忘れることが出来ずに、私は、あたためているのである。

その頃の、庄内町の商店街は、個人経営から、近代的株式会社へと、かわりつつあった。話し合いの中で、誰かが株式会社にするには、資金と書類を、どの様にして作るのか、わからずに困っている。と、言われた。会計の坂元守雄氏は、宮崎銀行庄内出張所に勤務していた。

黙って話を聞いておられた、会長の大河内氏が、小さな声で「守雄さん」と言って、

「人間には、二つの眼、耳があります。そして、一つの頭、鼻口が有ります。幼稚園や小学校の子供に話す様な話ですが、よく聞いてください。

一つの眼、耳で、銀行から金を引き出す、庄内の人を見てください。もう一つの眼、耳では、金を貸す方の銀行員の眼で見てください。そうして、頭で鼻で口で考えてください。

銀行員としては、むずかしいことではありますが、庄内の人のため、銀行のために、勉強して、力を貸してください。」

と言われた。守雄氏は私たち会員から見ても、大変な仕事をしていると思っていた。カメラの会を開いていると、電話が来

る。「ちょっと」と言って、出て行った。書院の玄関に庄内の人々が待っておられた。

守雄氏が忙がしく、飛びまわる様子を見て大河内会長が「守雄さん、若い時は二度とないのです。みんな勉強です」と言われた。

聞いていた会員が、会長の言葉に、うなづきながら、守雄氏に盃を次々と出した。ところが、守雄氏はその頃、酒は乾杯程度しか飲めなかった。

守雄氏の横に座っていた薬剤師の塚野氏が、立ちあがって「残念ながら守雄氏は飲めないのです。私も飲みたくないのですが、友情として、私が守雄氏の盃を頂くことにします。御協力を御願います」と言って、盃をつぎつぎと受け取り始めた。聞いていた会員が「いいぞ、いいぞ」と拍手を送った。

会長の、守雄氏への励ましの言葉を、みんなが受けとめ「若い時は二度とない。勉強、勉強」を、会員たちは挨拶語にして、お互いに怠けようとする心を、励まし合っていたと思う。

昭和二十年八月十五日、太平洋戦争（大東亜戦争）の、終わりの日である。

カメラの会員は、年令からいって、それぞれの所で、それぞれに、かかっていた。

軍人として、戦場に行った人。日本国内で、軍人として務めた人、学徒動員令によって、学校の授業は中止となり、門司、名古屋、また、都城（川崎航空）等で、飛行機、潜水艦の部品作り、組立て等をして、みんな参加していた。

カメラの会では、どうしたことか、戦争中の苦しかったことは、あまり話さなかった。

ただ、空襲で親しかった戦友が、学友が死んでしまった。今思い出しても、残念でならないと、繰り返し返していた。

空襲の話で思い出すのは、副会長の山元寅男氏の話である。

山元氏は、一語一語言葉をかみしめながら、ゆっくりと話された。

戦場で、多くの戦友が負傷した。軍医である私の眼から見て、医療器具、薬品が無いので、A氏もB氏も、駄目だと思った。

A氏は「痛い、痛い、どうかしてくれ」と、言い続けて死んでいった。

B氏は「私の家には、眼の不自由な妻と、小さな子供が三人いるのです。私は、ここで死ぬわけにはいかないのです。軍医さん、妻のため、子供ののために、私を助けてください。お願いします。」

と、言い続けて頑張った。ところが、不思議です。B氏は助かったのです。今考えても、不思議ではありません。と言われて、

山元氏は言葉を続けられた。

「私は、助かったB氏を見て、人間の命は、ある点からは、医学の力では、説明出来ないものがあるのではないか、と思っ

た。人間の命は、自分のためでなく、妻のため、子供のため、人のために、生き続けることが大切である。と、つくづく思いました。」

と言われた。

大事な話をしてくださったのに、私たちは若かったので、山元氏の話「戦争中の負傷兵の話」として、聞いていた。もっといけないことをした。もっと詳しく聞いておけばよかったのに、と思ひ、今残念でならない。

会長、副会長を中心に、全会員でカメラの会を楽しんでいた。記録をめくると「申し合わせ」をして、いろいろ努力している様である。

#### ※例会、申し合わせ事項

- (1) 会員は、風景写真はよく写すが、家族の写真を写さない。フィルム一本の中に、家族の写真を、一枚以上写すこと。
- (2) 「庄内川の橋」木造の橋が、今のセメントの橋に変わると

きである。橋が二つ並んでかかっている。朝か、夕方か、昼か、太陽の光りを計算して、今写すこと。

(3) 体育会、運動会、地区の文化祭、行事（熊襲踊、馬頭観音、イボの神様……）等、間をつくって写すこと。

(4) 写真は、お金がかかる。(A)：煙草、焼酎を勇氣をもって、我慢をし、フィルムを買い写すこと。(B)：一か月に一回は、土曜日か、日曜日（午前か午後）自分から進んで「奥さん孝行」をすること。（くどくどが少なくなる。）

(5) 来月の食べ方について……

「シチュー」希望者多く決定する。「シチューで何ですか」「ベボン、ベロをー」（牛の舌の料理ですよ）「エー、ベボン、ベロ」みんな元気づき、会員が街や学校で会々と「ベボン、ベロを食うどー」と挨拶をかわして、楽しみに待っていた。カメラの会（アルファクラブ）が発足して長い年月が流れた。発足当時から会員で、現在も、末原照臣氏、田中昭彦氏、坂元守雄氏等は、続けておられる。ただただ、頭がさがるのみである。

人の世の年を重ねて、気づいたのであるが、庄内の亡き先輩の方々が、さりげなく話してくださった、いろいろな話の中に、あたたかい「庄内の人」の心が、ただよい、流れている。と、私は思うのである。

## 水あび

鷹尾町 菓子野 康 子

小学生時代、夏休みの楽しみの一つに水浴びがありました。日が高くなると誰言うもなく「みっあぶいけいっが」と声を掛け合い、オミケンの新田溝に行きました。

オミケンとは昔この付近に妙見神社があってその妙見が訛ってオミケンと言うのだそうです。このオミケンには関の尾の滝から谷頭に通ずる前田用水路が流れていて城山の下を潜って来たトンネルの吐き口に当たり、子供達の格好の水浴び場になっていました。川に着くと、そこは既に芋の子を洗うような混み様で大きな歓声が上がっていました。

上級生の男の子達はトンネルの石積みのでっぺん等を飛び込み台として、深みを目掛けて飛び込んだり抜き手を切って泳いだりしていました。私達はその勇姿に思わず見とれたものでした。

この付近は一部樹木に覆われて薄暗く水深もかなりあり、下手に近づくとおぼれる人もいました。

年少の女の子達は下の方の浅い所でパンツ一枚になって泳ぎました。その頃流行のキャラコのパンツは、上は勿論下の部分

## 戦時中を過ごした小学生の頃

東区帖佐ミヤ

もゴムで締っていましたので、私達はこれにフーフー息を吹き入れて膨らませ浮き袋風にして犬かきで泳いだものでした。体の浮き具合や背中伝いに感じるパンツの膨れ具合を確かめ、大きく膨らんだ時は嬉しかったものでした。

たまには上流から草や藁と一緒に馬糞が流れて来ることがありました。そんな時は大騒ぎしながら通路を空けてやり、流れ切るまで泳ぎは一時中止です。

体が冷え切って唇が紫色になりガタガタ震えだすとようやく帰り支度です。女の子達は土手の木陰で上手に着替え、その辺りの木の枝で作った特性ハンガーに濡れたパンツを提灯のようにぶら下げます。又、髪の毛は手頃な柴を手折って「はよこらげ」「はよこらげ」と軽く頭を叩きながら帰ったものでした。

途中の畑に桑の実が熟れていると所有者などお構いなしにほお張り、口を真っ赤にしたものでした。

幼い私達が大河の様に感じていたあのオミケンの流れ、先輩の泳ぎを見様見真似で習い覚え夢中で遊び過ぎた夏休みの一齣です。

あの新田溝は、現在立派な三方張りに改良され「危険、立ち入り禁止」の看板が立てられ今はもう子供達の歓声も聞かれません。

お墓参りの橋の上に佇んで昭和二十四・五年のあの頃の一齣を懐かしく思い起こした事でした。

昭和九年、私は庄内諏訪の地に生を受けた。

三姉妹の一番下とあって相当な甘えん坊であったし、わがままでもあった。父母共に働きの者で私の記憶ではただ田畑、養蚕、羊毛紡ぎの仕事等々の働いている姿しか思い出せない。

母がたった一枚しか持っている姿であったであろうあの大島紬の着物を着替えはじめたらきつとどこかに出かける時であった。

もうその時は、母の回りにまつわりついて離れなかった。そんなわけで親類の家々に連れられて行った楽しい思い出がたくさんある。

昭和十五年四月小学校入学であった。

当時校門をはいると、東西にのびた木造校舎、丁度その真中辺りに土間があり、その西側に校長室、職員室、東側に一年生の教室があった。教室のすぐ南側には、爛漫と咲きほこった桜が新しい一年生を迎えてくれていた。

受け持ちの先生は西原先生。いつも母の後をついて回ってい

たせいだろう。一人で学校に行けなかった。教室まで母が送り届け、姿が見えなくなると泣き叫び、後を追いかけて母をさがしていた。木のかげや校舎のかげにかくれて見ていた母の切ない気持ちがある。昭和十六年十二月太平洋戦争に突入。小学二年生の時であった。しばらくは戦時中といえどもまあ平穏な日々であったようだ。三・四年生の頃までは、隣りの同級生のアヤちゃんたちと青年学校（今の庄内中学校）の運動場を夕暮れまでかけ回って遊んだものだ。その頃、今でも忘れられない光景がある。それは、箱入りの荷物を山ほど積んだ荷馬車が何台も何台も運び込まれたことだ。めずらしさに、友達みんなと箱を覗くと「かん詰」がいっぱい。汽車で谷頭駅に下ろされ、それを荷馬車に積んでここまで運んできたのだという。後から聞いた話であるが、他に「羊かん」「乾パン」とか軍の食糧だったとのこと、敵が攻めてきた時の食糧で「城山ん、かくせちよとじゃげな」という話を聞いたものだった。この噂は事実だったようで庄内には後に糧秣廠が置かれ、たくさんのお資が城山方面に隠されていた。

小学校高学年になると学校生活も一変していった。次第に戦況も激化し若者は駆り出され、働く者がいなくなった。私たち

高学年は学校の授業はとり止め、農家の仕事に雇われて行った。朝、集合する場所は青年学校。集まっていると、農家の方がみえた。私たちは四、五人のグループに分かれて農家の人に連れられて仕事に出かけた。一番多かった仕事は、麦刈りと田植えだった。

初めは賃金はなかったが、後からはお金を戴いていた。ある日、町下の田んぼに田植えに行った。お日様がかんかん照り仕事途中で体の具合が悪くなった。暇をもらって帰りがたかったがどうもそれが言えず最後までがんばった記憶がある。それも心の底には、お金をいただいているという気持ちがある。そんなときだ。生まれて初めて働いて、いただいたお金の小さいサイフに何がしかのお金を大事にしていたことは忘れられない。

他に桑の木の皮むきもした。私の家は養蚕をしていたので大きな桑小屋があった。ここで何人か集まって皮むきをさせられた。むいたこの皮を乾燥させ、供出するのだ。なんでも落下傘や軍服の原料になるということだった。戦時下、それも全て物不足の時、一億総動員、勉強どころじゃなかった。毎日が動員であった。「お国のため、働かなくては……。」と口ぐせのように言っていた父は、少しでも皮むきの能率が上がるように、二本の棒を立てて即製桑の皮むき器を作って仕事をしやすいように

してくれるのだった。

昭和二十年四月、小学六年生となった。もうこの頃は一段と戦争は激しく、空襲警報の毎日だ。とても学校など行ける状態ではなかった。庄内小学校の校舎は兵隊さんに明け渡され、私たちは地区ごとに分散して授業を受けることになった。

東区の生徒は諏訪神社の奥の園田さんの家を借りての授業だった。それぞれの学年ごとの分散授業だったので他の学年については知らない。

ここでも、そう安心したものでもなく、空襲警報のサイレンがなったらすぐ裏山へ駆け込み、身をひそめて敵機が去るのをじっと待ったものだ。こんな日々が続く中、昭和二十年八月六日庄内空襲、そして八月十五日終戦。「アメリカン敗けたっじゃげな」「どげんしたもんじゃろかい」隣近所みんな集まって、あれこれアメリカ兵がやって来た時のことを心配して話し合われていた。その頃、子供だった私にとっては、あの恐ろしい空襲がないのだというだけでホッとしていたように思う。

さて、終戦後学校に帰った私たちは、焼け残った校舎にはいり、久し振りにクラスの人々と顔を合わせ、授業が始まった。担任は青木キク先生。

初めにさせられたことは、教科書のあちこちを墨で消してい

くことだった。今ならいろいろ考えたろうに当時はただ指示されるままどんどんぬりつぶしていった。きっと軍国日本を称えた部分や神国日本を記した部分だったのだろう。確かに終戦を迎えてからの学校生活は全て不足するものばかりであったが、空襲の恐怖からは解放され、約半年間小学校最後の生活を味わった。

翌二十一年三月卒業し、四月に都城の女学校に入学した。旧制最後の女学校入学であった。

戦後五十六年の年月を数え、記憶も薄れかけているものの当時の空襲の恐さや戦時体制の世の中のように等忘れられない。こんな片田舎に住んでいた子供達さえ食糧生産に軍需物資の生産に従事し、精出していたことなど、語り継がねばならないと思う。

すでに何人かの方々が太平洋戦争末期の庄内のことは記されているが、当時の子供達のようにすについてはまだ記述されていなかった。なので私の体験したことを思い出すまま筆を執ってみた。



# あの頃の貧しさが 私の心を豊かにした

さいたま市（東区出身） 馬籠 京子

私は戦後の昭和二十年十一月朝鮮から引き揚げ、鹿児島、京都と移り住み、庄内に落ち着いたのは小学校三年生からである。

引き揚げ家族のせいもあって、貧しかったが、まわりもみな似たような状態であったので、ちよっぴりうらやましいと思っただことはあったけど、つらいと思っただことはなかった。馴れない農作業をするようになった父母を見ると、長女の私が手伝うのは当然と自覚していたのである。イヤだったという記憶はない。

一番好きな手伝いは料理づくりであった。

母のつくる料理をそばで見て、手伝いながらおぼえていった。夕方、勤めから帰って来た父が母と二人で田んぼに出かけた日の夕食づくりは、三年生の頃から私の役目となった。二人の妹は幼なすぎて当てにならなかったのである。

そのうちに貴重な材料を生かして工夫することをおぼえていっ

た。その一つに鯖料理がある。今、こちらの店で一尾のまま鯖を買って「三枚におろして下さい」と頼むと、二枚にした切身だけ渡され、頭と骨は渡されない。私も要求しない。子どもの頃は、魚屋で「三枚におろして下さい」と頼むと、二枚の切身と適当に切った頭と骨も渡された。三枚の切身はその時の献立に生かし、頭は豚のエサのダシに、骨には塩をふり、溶いた小麦粉をつけて天ぷらにした。火が通ると骨からきれいに身がはなれ、衣には鯖の味がしみてとてもおいしかった。溶いた衣がまだ残っているといりこ（煮干）を入れて天ぷらにする。これもいりこのうま味が衣につき堅かったいりこが適当な柔らかさになってくれる。どちらも栄養抜群である。この頃の魚といえは、鯛、鰻、鰯、鯖が主であった。

畑でとれた菜たねを庄内中学校のそばにある製油所に持って行き、黄金色の油にしてもらっていたので油料理はよくしたものであった。

工夫してた好きな料理に、カレー粉を使わないカレーに似た料理がある。じゃが芋、玉ねぎ、人参をカレーをつくる時のように煮て、その中に天ぷらにした鯖を手でちぎって入れ、しょう油で味つけする。小麦粉を水で溶いてとろみをつけると、鯖と衣の味が全体にしみておいしい。それを皿に盛ったごはん

かけるのである。これは簡単でおいしいので、私の得意料理の一つとなった。

本当のカレーライスは馬肉でつくった。カレールーのない時代なので、煮えた具に塩味つけてカレー粉を入れ、水で溶いた小麦粉を流し入れてとろみをつける。コッをしらないうちは均等に小麦粉がとけず、ところどころに小さい粒ができてしまった。この頃は、馬肉しか買わなかったように思う。きつとどの肉よりも安かったであろう。馬肉の感触、味はおぼえていないけど、カレーというと馬肉であった。勿論馬刺など食べたことはない。

現在の私の友だちの何人かは、

「ボーナスが出たので久し振りに馬刺食べに行ってきた。」

「おいしい馬刺食べさせてくれる店を見つけた。」

「あの感触が忘れられない。」等と言って、わざわざ電車や自家用車で食べに出かけている。

私がこの地に引越してきた二十五年位前は、まだ近所の肉屋にも「馬刺あります」という札が、ケースの前にかけられていたが、今は全然見られなくなった。昔、あんなに豊富だった馬肉が、今はさがさないと手に入らないということは……と素人考えをしてみた。きつと昔は農耕馬として働いた馬が、役目を

果たしてから肉になったのではないか、農作業が機械化されると馬が少なくなり、そのためか……等と、自分勝手に納得しているが、本当はどうなのであろう。そして馬刺として食べられる部分の肉以外のところはどうなっているのだろうか……等と考えが続く。今は簡単に手に入らない馬肉であるが、それを昔は食べて知っているということが、また得しているような気分にしてくれる。

料理以外の大きな手伝いとして、豚に関する手伝いがある。

その頃は豚を二〜三頭飼っていた。手伝いの一つに、西区の澱粉工場に母とリヤカーを引いて豚のエサになる澱粉カスを買に行く仕事があった。今のように工場の人が計って渡してくれるのではなく、工場の裏にあるプールみたいなどころに行き、そこにたっぷり入っている澱粉カスを自分たちでシャベルですくってリヤカーにのせるのである。リヤカーを引いて帰ると家の裏につくってあるサイロに移し、そこから毎日必要な量だけ豚に与える。最初の頃は気にならないが、日がたつにつれてだんだん変な匂いがして、家にお客がある時等は、落ち着かなかった。大きい鍋でエサを煮るが、そのダシは町区の商店街の魚屋さんからもらってくる魚のアラ、骨、血でそまった汁が主であった。家からバケツを持って魚屋に行き、バケツいっぱいに入れても

らう。重たくなったバケツを持って中身がとび出さないようにゆっくり歩き、手が痛くなると持ちかえた。坂道の途中でいろんな人に会うがこっちは必死で、恥しいと思ったことは一度もなかった。魚の他にダシとして使っていたのに乾燥したサナギがある。町区のパス停の隣りに友だちのフミ子さんがいて、その家に時々サナギ買いに行った。お店はかまえてなく、奥の方からおばさんが持ってきて下さった。時々ムシロの上でかわかしている場面を見ることがあったが、何のサナギだったのだろう、結構大きかった。

豚の世話という大げさなことではないが、少しは豚のために手伝っていたので、子豚が生まれた時のうれしさはそれはそれは大きなものであった。冬生まれると、寒さから子豚を守るため、ポロ布を敷いた箱に湯たんぼを入れ、そこに親から離して入れる。授乳の時は、親の乳首に一頭ずつつけてやっていた。自分の乳首が決り、上の乳首をとった子豚ほどよくふとることを知った。

子豚が成長すると市場に出される。売れたお金で初めて万年筆を買ってもらった時のうれしさと興奮は、今も忘れることはできない。勿論、私をもっと大きくなってからのことである。

それまでは豚を売ったお金は豚の飼料代や生活費として使われ

ていたようだ。その頃家計は苦しく、母は時々自分の着物を持って質屋に通っていた。質屋は役場のそばにあると聞いてはいたが、見たことはない。この時代は、農家以外の家庭では多かれ少なかれこうするより他に生き延びる方法はなかったのではと思う。

料理つくりと豚に関する手伝いの他に、余り好きではない仕事に草取りがあった。ある時、イヤイヤした態度で草取りしていたら、疲れている母から「イヤイヤ手伝ってもらってもうれしくないからもうやめなさい。」と言われ、初めて自分の態度を反省した。トイレの近くの草を取っていた時で、くちなしの花が咲いていた。いい教訓として今の私に生かされている。そしてくちなしの花を見るとその時の光景がよみ返ってくる。

手伝いもしたけど、貧しい時代の楽しいこともいっぱいあった。その一つに、夏休みに入るとアイスクャンデー売りが来ていた。自転車の荷台の箱にアイスクャンデーを入れ、大体決った時刻にチリンチリンとかねをならして売りに来る。家から少し離れた城山の入口にしばらく止ってならしてくる。その時刻が近づくと聞きもらさないようにとお金を握って耳をすますのである。きれいなピンクかブルーのアイスクャンデーを買い、チビリチビリとなめて楽しむの時間を長びかせていた。

めったにない楽しみと言えば、台風がきて停電になったあとである。台風が去るとすぐお金を握って子どもたちは「下ん街の角の本<sup>もと</sup>どん」と言っていたアイスキャンデー屋に向う。アイスがどんどんとけてしまうので、いつもよりうんと安く買えるのである。そしてこの時は店の中まで入ることを許されアイスの詰っている機械を見せてもらった。いつもは買えないアズキ入りのシャーベットを買う。とけかかっているので急いで帰りみんな食べて。

こわい台風ももう一つ楽しみをくれた。台風が去ったあと柿の木の下によその子も集まる。落ちた青い実を拾っては一口かじる。渋いと捨て、甘いと食べる。柿のたねは青く、その皮をむくと中は乳白色のたねである。やわらかくておいしかった。

我が家の二本の柿の木は大きくて「ケドイン」、「チャイゴネ」と私は言っていたが、どういう字を書くのであろう。

遊びが好きで、勉強は宿題が出た時と、家庭訪問の前日位しかしなかったと思う。夕食が済んだあと、食卓でしていた。

本を読むのは好きであった。貧しかったけど小学館の月刊誌は毎月買ってもらっていた。町区の本屋の「まりちゃん」という色白のお姉さんが毎月届けて下さっていた。この本屋では文房具も売っていたので買いに行っては、一回五円でよく貸し本

を借りて帰った。この頃庄内小には図書室はなかったと思う。

この本屋は図書館のようにどんな本でもあるわけではなく、本棚の中にある本の中から選ぶのである。ページをめくって私でも読める、漢字の少ないものから借りていった気がする。小学生の頃、夢中で読んで好きだった本に、「小公子」、「小公女」、「秘密の花園」、「トムソーヤの冒険」、「ロビンフッドの冒険」、「岩窟王」そして伝記物の「野口英世」、「エジソン」、「ヘレンケラー」、「ワシントン」、「リンカーン」等がある。

お使いが苦にならずに好きだったのは、本のせいかもしれない。本のあらすじを自分で変えてみたり、もし私が主人公だったら……等と空想するのが好きだったから、一人でいる時間も退屈しなかった。

たまにもらえる少ないおこづかいでは、「海ほうずき」、「チューインガム」、「から芋飴」を良く買っていた。今考えてみると、どれも楽しみが持続できるものを選んでたような気がする。中でも「から芋飴」はおいしい上に数が多くくるので好きだった。朝倉医院の坂の上に長屋があって、子ども向けの店があり、飴、安いせんべい、メンコ、おはじき、くじ引き、ぬり絵等安いものがいっぱいあった。「から芋飴下さい。」と言うと、店のおばさんがアメの入った広口ビンの中に手を入れて「ひとつ〜」

「ふたつく」「みつつく」と数えながら白い袋に入れてくれた。口の中を黒くしながらおいしく食べた。

勿論外でも友だちと遊んだ。すぐ手に入る道具を使っての遊びである。おはじき、ビー玉とり、じゅず玉のお手玉あそび、なわとび、ゴム段とび、あやとり、缶けり、陣とり等である。

又、友だちと包丁とザルを持って田んぼに行き、畦道のセリをつんだり、田にしゃぐびなどという貝をみつけて持ち帰っていた。

あちこちの家に明かりがとると、それが合図で家に帰った。夕食は父が「飲み会」の時以外は六人全員そろった。テーブルに並べられた六つのおかずの皿を見て「あっちの方が大きい、取り替えたいな」と思ったこともある。ラジオを聞きながら大体七時三十分頃から食事は始まった。曜日毎に変わるラジオ番組もちゃんと知っていてどの番組も楽しんだし、その日の出来事を話す場でもあった。何げない父の言葉、話しの内容、少ない食材を生かしたおいしい母の料理、私のおしゃべり、弟妹のはなし等、その場から得てきたものは大きい。貧しかったからみんなが集まるこの時間を幸せに感じ、小さい喜びも大きく受取ることができるようになったのだと思う。

物は貧しくともいろんな経験が、私の心を豊かにしてくれた。「若い時の苦労は買うてもせよ」ということわざが大好きな私は、これからも経験を生かし、前向きに進んでいけると思う。

## 大正生まれ

宮崎市 松岡 優

(元庄内小学校教諭)

畏友松岡優さんは昭和二十三年、苛酷なシベリヤの捕虜生活から漸く帰国、第二の人生の出発は庄内小学校に勤務、居心地よく生涯の伴侶も庄内から選ばれる。

あと三、四年も経ぬ中に大正生まれは全員傘寿を超え希少価値の時代がくる。苦労のみ多く報いられることの少なかつた大正生まれ、今ふり返って感無量、今ではそこに郷愁に似たものさえ感ずる。余りにもいやなことの多い世相の時代、だからこそ大正生まれの意地を、気概を示すため頑張りたいたいものである。先日大正生まれの男女に贈る歌詞が送られて来た。

大正生まれのみんなに紹介したくて、敢えて投稿した次第である。  
(西区 野海 正治)

雑誌を読んでいたら、大正時代に生まれた人々によって作られた「大正会」という親睦団体がある。帯谷瑛之介が著した『大正会夜話』によると、大正生まれは明治生まれからは青二才に扱われて、そのまま戦争に駆り立てられ、ようやく戦争が終わって、いよいよ我らの時代が来たと思ったら、昭和生まれに時代遅れだと言われる、という宿命を負わされた世代であった。

た。この明治、昭和の板ばさみをはね返そうとして生まれたのが大正会である。

『大正会夜話』は次のように記している。

「思えば、ぼくら大正生まれは損な時代に生きてきた。へス  
ペイン風邪にまずやられ、それから関東大震災、満州事変や支  
那事変、最後は太平洋戦争」ふと思いつくままに書きとめた  
『大正会』の歌の歌い出しだが、考えてみると、よく生き残っ  
たものである」と。

私の亡き父母は明治生まれ、亡姉は一九一八年（大正七）生  
まれ、米騒動がおこる。私一九二二年（大正十一）生まれ、日  
本共産党の結成。社会主義運動の高まり。一九二三年（大正十  
二）関東大震災である。大正生まれ満八十九歳より満七十五歳  
か。大正も遠くなりつつある。

第二次大戦を始めたのは、明治生まれの指導者たちだったが、  
実際に銃や剣を手にして前線の弾雨に身をさらしたのは、大正  
生まれの世代が中心だった。そして多くの前途有望の若者が異  
郷の地に散ったが、辛うじて生き残った者も、俘虜の屈辱によ  
く耐えて、やっと母国の土を踏んで復員しても、すぐその日か  
ら荒れ果てた祖国の復興に、しゃにむに働き通さなければなら  
なかつた。これが経済大国の基となった。

大正生まれが経験した昭和の義務教育、「教育勅語」で天皇  
を中心とした忠君愛国の教育、軍国少年で育った。わが青春も  
旧満州四年、シベリヤ三年の、七年の明け暮れに終わった。小  
学以来の学友も戦死戦病死六十二名の御霊に心からご冥福を祈  
る。同じ窓に机を並べともに泣きともに喜び合った友よ、深い  
感慨を覚える。古希を過ぎた友よ、人生八十年時代を迎え、余  
生を有意義に送るため健康に注意し、ご健勝をお祈りする。終  
わりに大正生まれの歌男女を記し、大正生まれを偲んでみたい。

#### 大正生まれ

（小林朗作詞・大野正雄作曲）

一、大正生まれの俺たちは 明治の親父に育てられ 忠君愛  
国そのままに お国のために働いて みんなのために 死  
んでゆきや 日本男児の本懐と 覚悟を決めていた なあ  
お前

二、大正生まれの俺たちは すべて戦争の青春だ 恋も自由  
もないままに 生死をかけて生きぬいた 終戦むかえたそ  
の日から 西に東に駆けまわり 苦しかったぜ なあお前  
三、大正生まれの俺たちは 再建日本の大仕事 世界の国と  
かたならべ ただがむしゃらに三十年 泣きも笑いも出つ  
くして やっと振りむきや 乱れ足 まだまだやらなきや

なあお前

四、大正生まれの俺たちは 五十、六十のよい男 子供もいまでは パパになり 可愛い孫も笑ってる それでも俺たちはまだ若い やらねばならぬことがある 休んじやならぬぞ なあお前 しっかりやろうぜ なあお前

### 大正生まれの私達

福島市松浪町寿会 愛唱歌 原曲「幼なじみ」

一、大正生まれの私達 明治の親に躰けられ 清く優しく美しく 大和撫子そのままに

二、大正生まれの私達 お国のためにと働いて 親の言葉にさからわず 何が何でも親孝行

三、大正生まれの私達 青春時代は戦中で きれいな着物も服もなく 防空壕で夜を明かす

四、大正生まれの私達 娘盛りを重労働 恋しい人とも生き別れ モンペ姿で涙ぐむ

五、大正生まれの私達 終戦迎えたその時は 青春時代も終わる頃 何もないとき嫁となる

六、大正生まれの私達 関白亭主に悩まされ 配給米でやりくりし 可愛い子供を育ててた

七、大正生まれの私達 高度成長に手をかして 家庭と共立

共稼ぎ 仕事仕事と頑張った

八、大正生まれの私達 やれやれホッとした時は 六十前後の年となり 世の中すっかり変った

九、大正生まれの私達 ここまで生きてきたからにゃ 何が何でも長生きし 日の目見なけりゃ死なれない

十、大正生まれの私達 月の世界に行かずとも 広い世界に眼を開き 明るく生きよう 元気でね

大正生まれの男女の歴史の歩みのことがよく分かるように作られた歌である。この「大正生まれ」は、五十九年大晦日のTBS放送での評価はパーソナリティ賞（岡雅子賞）。「軍歌っぽい歌の雰囲気がよく出ていて、古いレコードを聞いているようだ」とのことで、還暦古希すぎの大正生まれに贈られたプレゼントである。

大正生まれの心意気として、男の修行、山本五十六元帥海軍大将ブーゲンビルに散る 苦しいこともあるだろう 言い度いこともあるだろう 不満なこともあるだろう 腹の立つこともあるだろう 泣きたいこともあるだろう これをじっとこらえてゆくの男の修行である。余生を男の修行で終わりたい。

# 忘れがたい少年時代

蕨原町（町区出身） 又 木 政 栄

私の少年時代は昭和二十年代です。まだ、荷馬車が道路の主役でした。牛馬が重要な労働の位置を占めていました。太平洋戦争終了後までもない頃で物不足の時代でした。いろいろな物が配給でした。食料も不足がちで夕食は代用食をとる家庭も多かったのではないのでしょうか。でも、子供たちはみんな元気いっぱい遊んでいました。朝の登校もたくさんの子供たちが連れだつて学校に行っていました。

春先は学校から帰ると鎌とかごを持ってレンゲソウ刈りに行っていました。ニワトリやウサギの餌にするのです。ウサギの子が産まれると本当にかわいがつたものです。ニワトリもよくきれいな卵を産んでいました。時々、新鮮な卵を味噌おつゆの中に入れて食べましたが、たいへんおいしかったです。また、ひよこをかえさせるのも楽しみでした。学校から帰ると三、四人連れだつて山に竹の子とりにもよく行ったものです。

土曜日や日曜日にはよく「ざる」を持って小さな川に魚すく

いに行っていました。ほとんどは、メダカやおたまじゃくしでしたが、たまにはふなやこいの子が「ざる」の中に入ると大喜びでした。昔の小川は童謡にある「春の小川」そのものでした。岸辺のレンゲソウ、紫のスミレの花、流れに向かって泳ぐメダカの姿が目につかぶようです。

夏は庄内川でよく泳いでいました。川の水もきれいに澄んでいました。魚も大きいのがいたようです。川の岸には竹やぶがたくさんあり魚のかくれ家も多かったようです。川崎橋の下ではたくさんの子供たちがにぎやかに泳いでいました。泳ぎにつかれると陸（おか）に上がって「こうら干し」をしました。橋脚の所は少し深かったので元気のある男の子は橋の真ん中あたりから飛び込んでいました。夏休みともなるとそそくさと「夏休みの友」を終えて川へ急ぎました。真夏の太陽を浴びながらたくさんの子供たちが泳いだり潜ったりしていました。あの清流と豊富な水量を庄内川によみがえらせたものです。そうすれば大きなこい、ふな、うなぎ、いだ等の泳ぐ姿を再び見ることができるとしよう。

秋には栗拾い、からいも拾い、落穂（稲）拾い等をしました。畑や田んぼがあるところは家の手伝いもよくしました。家の手伝いの為に田植え時には田植え休み、秋には稲刈り休み（学校



# 小学校時代の思い出

鷹尾町 福村 静 徳

休業)もありました。稲の収穫時には足踏み脱穀機の音がにぎやかに聞こえてきました。休憩時には自家製のだんご、にしめなどが出ました。収穫の喜びでみんな笑顔で一杯だったようです。

冬には学校でみんな(男子)で少し荒っぽい遊びをしました。服もよくやぶけていました。生傷も絶えなかったようです。みんな元気一杯遊び、気分がすっきりしていたのではないでしょうか。雨降りには廊下で馬乗りをして遊んでいました。(今の子供たちも体育の時などさせると喜んでします。)けんかもあったけどあんまり険悪なけんかはなかったようです。学校から帰ると隣近所で、ビー玉(目だま)、めんこ(かった)、かくれんぼをしていました。

今、当手を振り返ると、春先は田んぼで遊び、夏は川で真っ黒になるまで泳ぎ、秋は収穫の手伝いをして、冬は遊びに夢中になる良き時代でした。時間がゆっくり流れていたようです。困ったときは隣近所助けあって生活していたようです。今、はやりのおふれあいの多い心豊かな時代であったようです。時代の流れはいかんともしがたいのですが、その心だけは大事にしたと思います。

私は大正七年三月、旧庄内村下川崎で生れ同十三年四月から昭和七年三月まで、庄内尋常高等小学校に通った。当時の小学校には、尋常科六年と高等科二年があり、尋常科は国民の義務教育だった。

庄内小学校は、私に多くのことを教え、体験させてくれた。入学当初のなんにも分からなかった幼児から、やがて人間や人生について考えるようになっていく課程を、庄内小はやさしく見守ってくれた。お世話して下さった先生方、仲のよかつた友、喧嘩した友みんな今はただ懐かしいだけ。そんな思い出のなかのいくつかをまとめてみた。

もちろん、七十年以上も昔の話。記憶違いや間違いがあるかもしれない。もしあったときにはお許し下さるようお願いしておく。

## (一) 電話の話

私が低学年の頃は、電話はまだ普及しておらず、もの珍しい

時代だった。ある日先生が、電話の見学に連れて行くと言われたとき、みんなは、わぁーっと手を叩いて喜んだ。

当時電話は官営で、その施設は郵便局内にあった。庄内郵便局は、町方面から天神馬場に通ずる道路が、ゆるい勾配にさしかかり左にカーブが始まるあたり、お寺の正門と道路越しの高台にあった。(この地形は現在も変わっていない)

何段かの石段を登りきると局の狭い待合室。先生に引率された生徒達は、ここから部屋に上がった。ところが私を含めた何名かは上がるのを止められた。みんな裸足だった。局内を汚すというのが理由だったのだろう。

「お前らはここで待つておれ」

先生の言葉は、電話という未知の世界に、小さな胸をときめかせていた私をがっかりさせた。入れてもらえない私たちは、局舎の窓枠にしがみつき、精一ぱい背伸びしながら、なかのよすを見ようとけん命だった。その目には、紫紺の袴を胸高につけた、美しい姉さんの姿が、ちらっとかすめただけだった。

その頃、私の部落下川崎で、電話があったのは木之下家一軒だけだった。壁に固定された箱型の機械には両脇にまあるい大きなベルが二個ついていた。電話がかかってくるこのベルが、リリーンと甲高い音を響かせた。

木之下家の庭は広くて、子供たちのよい遊び場だった。また同家には同年輩の男の子が二人いたので、学校から帰ると附近の子供たちが自然に集まり、遊びに夢中になっていた。

電話のベルが、リリーンと鳴る。子供達がきき耳をたてる。つぎの瞬間、子供達の一団は、約三十メートルもあった同家の木戸口を外に向かって走りだす。出きったところに、電話線の電柱が立っていた。子供達はこの電柱に抱きつき、耳をぴたりとくっつけて息を殺す。「あっ聞こえる、何か話している」

誰かが叫ぶ。私には、なんにも聞こえない気がしたが、せっかくみんなが聞こえるというのだから、それに合わせて聞こえる、聞こえるといっはしゃいだ。誰の頬にも、電柱の防腐剤のコールタールが、まだらにくっつき、おどけた顔になっているのだが、そんなことを気にする子は一人もいなかった。

遠い、とおーい日の思い出である。

## (二) ある水死事件

当時、私どもの部落を流れる庄内川の堤防は、ちょっとした大雨でもよく決壊した。水の引いた決壊跡には深いよどみがあった。その淵に立つと身ぶるいするような恐怖と、ざぶんと飛び込んで泳いでみたいような相反する思いが、子供心のどこかにあった。

その日、私たちは上級生を中心にしたグループ七、八名で、この決壊跡に水浴びに行った。上級生は低学年の私達三名に「危いから絶対に水に入るな、ここで待っている」。強い調子で言った。三名は田んぼ畦下の溝で、めだかやどじょう取りに夢中になって遊んだ。

上級生たちが上がってきた。

「○○は…」聞かれるまで私ともう一人は、彼が居ないことに気付いていなかった。口をぽかあーんと開けてなんにも答えられない。上級生たちは何かひそひそ話し合いを始めた。やがて、さあ帰ろうと促がした。帰りの道すがら、上級生たちは、このことは絶対誰にも話すな、何を聞かれても知らんと言え、と何回も念を押した。

その夜、遊び疲れた私はぐっすり眠っていた。母にゆり起こされる。寝呆けまなこに、部落の青年が二人土間に立っているのが、ぼんやり見えた。「上の原の○○がまだ戻らんそうだが、お前は知らんか」と聞く。はっとして○○は…と言いかけると、すぐそばで同じように母に起されていた兄が、「言うな」ときびしい目で合図した。この兄は私より二つ年上で、今日一緒に水浴びに行った仲間だった。さがしにきた青年二人は帰った。

兄と私は、再びぐっすり眠った。

翌朝目をさますと、部落全体がなにかただならぬ空気につつまれていた。「○○の水死体が上がった」大人たちの声。仲間の誰かが白状したのだろう。昨日一緒だった仲間の名前は、みんな分かってしまっていた。葬儀についての記憶は全然ない。

その後、子供達の間で恐ろしい噂がささやかれるようになった。……あの日水浴びに一緒に行った者は、十五歳になったらみんな監獄に入れられるそうだ……。監獄とは母に聞くと、牢屋のことで、金鎖りのついたうす暗い部屋に、手足を縛って入れられ、梅干し入りの握り飯を一日一個食べさせられるだけだという。子供心はがたがたふるえた。十五歳にはなりたくないなあ、真剣に思った。

今、おぼろな記憶をたどり、前後をつなぎ合わせて考えてみると、私が小学二年、死んだ○○は一年だったように思う。とすれば大正十四年の事件だ。白髪瘦軀、八十三歳の私は、複雑な思いで当時を振り返っている。

(三) みかんもれ(貫い)

お正月が明けると三学期だ。その最初の登校日が、「みかんもれ」の日だった。

いつもの朝礼の校庭に、全校生徒凡そ一三〇〇名?が整列した。壇上の校長先生が、新年のあいさつ、新学期の心得などを

話した。終わると、みかんの一ぱいつまった吠かますが各クラスの前に運ばれた。生徒たちは順々に先生の前に進み、霜にかじかんだ両の掌に、盃より少し大きいぐらいの島みかんを、三個か四個ぐらいずつのせてもらった。全員に配り終わると、吠の底には必ずいくつか残った。先生は、それを勢いよく生徒たちに向かってばらまいた。わぁっ、生徒は喚声をあげて群がった。やがてすべてが終わり元の静けさにもどる。二個も三個も拾い懐をふくらませている子もいれば、先生からもらった分だけの子もいた。

この行事が、いつ頃から始まり、いつ頃まで続いたのか、その目的も含めて私は知らないが、子供たちにとって、楽しい行事であったことには間違いない。

その素朴でほほえましい光景は、爽やかな風物詩となって、私の心に焼きついている。

#### (四) マラソン大会

昭和六年秋、庄内小学校高等科男子生徒全員(約二〇〇名)によるマラソン大会があった。コースは学校のグラウンド(現在JA敷地)をスタート、県道三二号線を都城へ向って走り、牧之原の坂を登り切り左折、今房の中間附近で左折、平田を突っ切り今屋にでる。ここで左折庄内へ、東区の豊幡神社前で左折、

直進してスタートしたグラウンドにゴールインする、というものだった。最大の難所は牧之原の登り坂、ここまでの大きな集団はくずれ、登り切ったときには、僅か四、五名になっていた。

女子生徒たちは、思い思いの場所に屯ろして、黄色い声援を送った。特に牧之原を登りきった所には高二(高等科二年)の女生徒が多く、彼女らの名差しの声援に、気恥かしいような誇らしいような気持で、黙々と歯をくいしばったことを覚えてい

る。  
牧之原の坂上で四、五名の先頭グループにいた私は、いつの間にか二位をキープ、ひたすら頑張り続けた。ゴール直前(現在のスーパー大浦の前附近)で、一年下の前畑秀男君に抜かれて三位、私にとっては思ってもいなかった成績だった。(一位は襲山満男君)

翌年春の卒業式では、マラソン大会の入賞者を代表して、私が賞状を受領した。

庄内小学校での八年間、スポーツと名のつく催しで賞をもらったのは、これが初めてであり最後である。

あれから七十年、遙かな歳月の彼方に、浮かんてくるあの光景、あのドラマ、年老いた胸はかすかにときめき、懐かしさがこみげてくる。

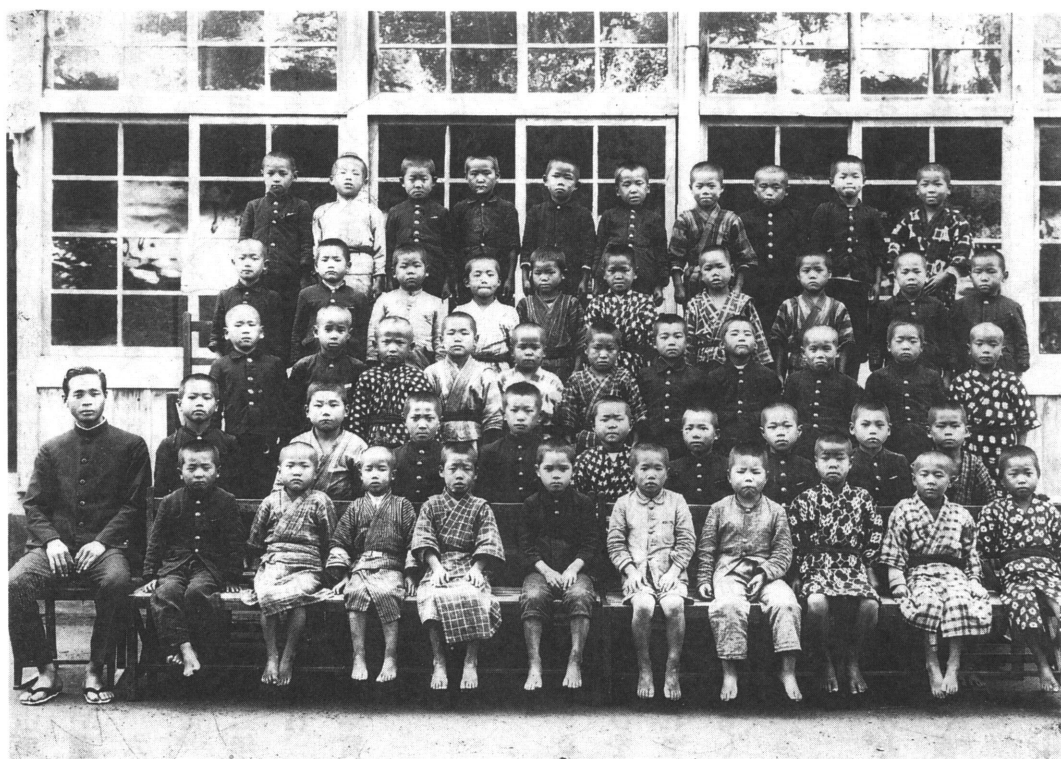
# 小学校時代

大王町 吉川 一郎

私が庄内尋常高等小学校に入学したのは、昭和五年四月でした。四学級で、一・二組は男子、三・四組は女子で、私は一組でした。

当時は、一年の時の学級がそのまま六年を卒業するまで、かわりませんでした。担任は池上先生、太った先生で、朝、顔を洗ってきたか検査があり、洗ってきていない者は、中庭にあったポンプで水を汲み、顔を洗いました。二年の時、担任の田村先生が結婚され、一組は、二、三、四組に分かれて、私は三組の女子級に入りました。新しく福留先生になりましたが、息子の信男君がいましたので、二組に行くことになり、従兄弟の私もいっしょについていけということで、二組に入りました。

担任は宮島先生で、厳しい先生でした。どういわけか、その頃では珍しい学級写真が残っていますが、着物姿が多いです。三年は永吉先生で、優しい先生でしたが、厳しいところもあり、冬、裸足で校舎の回りを走り、足洗い鉢の水を割って足を洗い



ました。昼食は、弁当でしたが、冬、弁当を温める施設ができ、温かい弁当が食べられました。四年は、新穂先生で、新しく理科とソロバンの勉強が加わりました。その時、ソロバンを習ったのですが、今でも役立っています。学期末になると、自習が命ぜられ、私は、先生のわきで全員の点数を計算し、平均点を出しました。秩父宮夫妻が、関之尾の滝に來られ、道路を清掃しました。五年になると、歴史と地理の勉強が加わりました。

担任は加藤先生で、クラリネットを吹いておられました。校旗が新しく作られることになり、岩佐フヂ先生が、刺繍され、学級の代表が一針ずつ縫い、すばらしい校旗が完成しました。私は、日曜日ほとんど、甲斐先生、田川先生と絵を画いて過ごしました。和田原に飛行場ができて、開場式に飛行機が飛ぶのを、田圃から眺めていました。六年は富満先生で、若い絵の上手な先生でした。今も、小林市に住んでおられます。湯谷の工事現場で事故があり死者も出ました。秋には、陸軍特別大演習があり、飛行場で観兵式があり、歩いて見学に出かけました。天皇陛下が、白い馬に乗って目の前を通られました。六年生は、卒業後のことを決めなければなりません。私は高等科に進むことにしました。卒業して仕事についた人もいます。五年の時、役場が新しく運動場に建築されることになり、学校の北

側に谷があり、徳永さんの池がありました。その池を城山の奥の用水路の水で城山のシラスを流して埋め立てて、新しい運動場が完成しました。校舎も、講堂といっしょに建築され、六年の時から、新しい教室で勉強しました。高一は久永先生で、私達を担任されただけで、明道小に行かれました。平成十二年十月亡くなられました。先生が授業中に坐りこんでしまわれ、煙草をやめたいと思っていたが、もうだめだと言われ、煙草買いに走ったことがありました。

#### ◎記憶に残る思い出

##### ○遊び

メンコ、ねん打ち、コマ回し、たこあげ、ハマうち、メジロ取り、いろいろありましたが、遊び場は道路で、ボール遊びをしていると、荷車を引いたおじさんが、ちょっと通してくれやと言われ、遊びを中止して通してやりました。カルタ取りもしました。

##### ○テニス

夏休みになると、先生方が、山田村（現在は町）の先生方と交換試合をされていました。それを見に行きました。東区の長倉製糸工場が火事になり消火にかけつけたこともありました。

##### ○バレーボール

都高女生が練習試合にやってきました。相手は、ユニホーム、ブルマー姿、先生方は和服で、袴の脇をたくし上げて、炎天下の校庭で試合をされていました。

#### ○式

紀元節、天長節、明治節とありましたが、校長先生が教育勅語を読まれ、訓辞がありました。三学期の始業式には、ミカンがわたり、私達は「ミカンもれ」と言っていました。

#### ○陸上競技

秋に都城北諸の対抗大会があり、大王小と庄内小が優勝を争っていました。夏休みには大王小が練習試合に来ていました。鉢巻きの色も、大王小は紫、庄内小は黒と決まっていました。

#### ○運動会の弁当

運動会も楽しみでしたが、弁当が楽しみで、前の晩は、どこの家でもガネあげがあり、道路に匂いがこもっていました。カマボコ、チクワが食べられるのも運動会の時だけでした。

私は、高等科一年から、都城中学校・師範学校と進み、卒業と同時に、庄内小に赴任しました。校舎は空襲で焼け、運動場にバラック建ての教室があり、そこで授業しました。いろんな思い出がありますが、次の機会に譲りたいと思います。



# 俳句

もぎたてのトマト不揃掌に温し

螳螂や衣更してうごく影

風鈴の音色よしあし風しだい

東区 内野かね

喝采の米寿の席へ赤き薔薇

芒野や一本減りしバス路線

午後二時の静まり返る炎天下

町区 山元 マス子

鷹尾町 菓子野 康子

握力をためすが如く紫蘇しぼる

幹線を避けし近道白木槿

盆地わが故郷へちま花盛り

菓子野 長岡 昭光

祝吉町(東区出身) 宮田 安子

初蝶の少しよごれてゐたりけり

赤き壺青きガラスや沖縄忌

悪相は似て鮫鱈とブルドッグ

西区 蒲生 敏子

よちよちの児が見ついたり露の臺

糠添えて土つき筍貫いけり

風止んで向う三軒落葉焚く

欲しき水我慢の月日夏来る

宿命と受け止め花の透析日

更衣ナースの腕や目に眩し



# 子や孫に語り伝える話

## 安永の坂道物語 (三)

妻ヶ丘町 瀬戸山 計佐儀

### 17、マルヤマ坂

関之尾町の川崎を真直ぐ東へ行く坂道を東坂といい、途中から右へ折れて右へ登る坂は西坂といって丸山の下に通ずるのだが、昔はこの山中には斃死した家畜を埋葬していた。又、ここには庄内中学校の畑があり、丸山は終戦直後の食糧難時代は引揚者等が開拓して、甘藷その他の食糧生産で飢えを凌いだ。

川崎とは旧庄内町の中心から見て庄内川の先方にあるのでカワサキ（川先）と言ったのを川崎と書くようになったと言う。

丸山は全山が丸いからで、佐土平の地名はサドガラ（虎杖の方言）に由来し、関之尾は数十万年前に霧島山が大噴火した際の溶岩がドロドロとここまで流れて止り、その上を流れる川もこ

こで関かれて滝となったので関之尾といい、尾は丘（おかの古語）の当字である。

### 18、シロヤマン坂

庄内の城の名は安永城とも言えは鶴翼城とも言う。

庄内小学校の北西角の変形十字路を更に北西に谷間を進むと緩やかな登り坂となり、両側は樹木に覆われていて勢田ヶ迫という。ここを更に二百メートル程進むと三差路があつて、急に南（左）に折れる道は三十度ほどの急坂で、百メートル程を自動車もやっと登れる程である。上は平たい大地になっていて、公園化されている。ここが前述の安永城である。

秀吉に阿諛して鹿屋の外に都城をも併せ持った島津家の支族伊集院忠棟が、後には宗家鹿兒島藩の篡奪を陰謀して慶長四年に京都伏見の茶亭で島津忠恒（後の十九代家久）に誅殺され、その子忠眞は都之城を本拠に十二の城砦に楯籠って庄内の乱（都城の乱）を惹起したが、山田・志和池・野々美谷及び安永の諸城の攻防戦が最も激烈を極め、謀略に富む軍師・白石永仙の秘策に島津・北郷（都城）の両軍は散々な目に会った。

城頭で火を焚いて落城に見せかけ、伏兵を置いて、枳ヶ谷や風呂之谷、山之谷などを通って攻め寄せる島津軍に、横から後

から襲いかかって多くの戦死傷者を出して大打撃を与えた。大乱の風雲が収ってからは、ここ風呂之谷の湯治場は、創痍兵士の湯治客が殺到したという。

なお、城山の東麓で庄内小学校の北西角に当る所は、明治の初頭の三島地頭役所跡であり、二年後に地頭が去ってからは観瀾舎となり、明治の三十年中程、農商務省次官を辞して全国や庄内地方の開発を行なった前田正名（鹿兒島県出身）の事務所兼住宅のあった所で、正名の子息の未亡人華子が当地方の財産管理を兼てここに永らく独居生活をしていたが、やがて高齢となり昭和五十年ごろ東京の息子に引取られて行った。

## 19、テランヤシツの坂

庄内中学校の西隣の市道を一直線に南に進むと庄内川に架る橋に達し、更に進むと左側（東側）は農協の集荷場、右側は田園であるが、橋から三百メートル程先の十字路は県道三股・庄内・財部線と市道の交差で、更に真直ぐ南に三百メートル先は左右に人家や田畑もなく山林に覆われた岡に突き当り、道は左右に岐れる。この三差路の右手前の広場は今平田念佛洞の公園となっているが、藩政時代は人家が二、三軒あり、家の陰で見えない所に隠れ念佛洞があって市の文化財に指定されている。

裏に念佛洞のあった農家は寺ん屋敷と呼ばれていたが、日陰だったからか理由は分明でないけれども、終戦後どこかへ引越して跡には澱粉工場が稼働していたが、昭和四十年頃には養豚場となり、同六十年ごろにはそれもなくなって、市が土地を買収して公園化したのである。

先述の南隣り三差路を右折すると三十度近い急坂で、人家はなく牧之原の台地となり、県道都城・霧島公園線に交る。左折すると百メートル余の道路は山林に覆われて二十五度近い急坂で、台地に登り詰めてからは右に直角に右折すると左右は百軒位の人家が密集して、上平田の公民館もここにある。

室町時代の文明年間の頃、浄土真宗の八代法主蓮如は門信徒を爆発的に増して発展させ、釈迦や親鸞の人間平等の教えに従って、領主と領民に上下の差別はない筈との思想下に、真宗領国が全国的に弥漫して行ったので、真宗信者のバックを極度に怖れて一向宗（眞宗）を禁制した領主が多く、最も弾圧の激烈であったのは我が島津の薩摩藩であったが、信者は地下に潜み役人の目を逃れて称名念仏して本尊の阿弥陀如来を合掌礼拝し、密僧の法話を聴聞していた。信者の中には武士もいたという。

都城地方でも隠れ念佛洞は殆んどの集落にあったが、ここ平田でも住宅の裏側の岡に洞窟を掘り、定例的にこの中に集まっ

て念佛を唱え正信偈しんしやうげを誦唱じゆしやうしていたが、洞の入口は数枚の筵で覆ってローソクの光と読経の声の洩れるのを防いでおり、尚、念のため不寝番を道路脇に潜ませて挙動不審の者〓役人等が来た時はこっそり通報して、洞内の火を消し声も出さないようにしていたという。

明治政府も四年頃は信仰の自由は許ゆるしていたが、旧薩摩藩内の鹿児島・宮崎両県が許可したのは同九年九月五日であり、特に旧薩摩藩内は凡ての宗派の仏寺は廃佛毀釈で破却されていたが、許可後最初に抬頭して寺院を建立したのは眞宗であった。

念佛洞内で勉強すれば成績が上るそうだといわれて、遠く財部町から来る児童もいたそうである。(以上、庄内の部。以下、西岳の部)

## 20、バトカンの坂

県道都城・霧島公園線の西岳大倉田から北の台地の郷ごうヶ原がぼるに登る坂道をバトカンの坂と言う。

馬頭観音堂はこの坂道を登り詰めた所の五本松にあって、御神体は眞中の松の所にあったが、松は昭和四十五年頃、松食い虫で枯れた。祭日は毎年三月十八日か二十日であるが、年に一、二回、馬場中総出で坂道や御堂のコシタエカタ(補修の意の方

言。拵こしらえ方)をすると言う。

## 21、ミケシの坂

県道の南側にある西岳の中学校と小学校の前を通り過ぎて西へ行く坂道をミケシの坂と言い、跨道水路こたうの辺りが峠となり、それを更に西へ行くと降り坂となって、旧西岳村の中心街の高野に達する。

都城の島津の殿様が西岳のウゴツお(小河内)の仮屋(豪農の坂元宅)に泊りがけて狩に行ったり、牛之脛すねでの弓の大会に臨んでの帰りには、必ずミケシの峠で腰をおろして西方の霧島山を見返えされるのが習慣だったので、見返しの坂といい、土地の領民たちはミケシの坂と訛かたって言ったのである。

西岳ではアイカヨ柿と称する小練こねり柿があって、サキサキと歯切れの良い美味の柿であるが、その柿を或る時この峠で殿様に差し上げたところ余りにうまいので「まだアイカヨ(あるかい)」と請求された。それで西岳の人達はこの小練り柿をアイカヨ柿と言うようになったそうである。

## 22、ツラツツ坂

西岳夏尾町の牛之脛すね(地名)から東へ二百メートル位行った

所の右への岐れ道は登り坂になっていて、ここをツラツツ坂といい、登り詰めた所の道路脇に生えた大木の許には、金属性の朱塗りの小さな鳥居等が供えてあるのは、真言修験者の所為であらうか。

神代の大昔、神武天皇（当時の名は峽野の命）がこの急な坂で足を滑らして倒れ、額や頬に擦り傷を負われたので面突坂と言うようになった。

牛之脛（地名）はY字形をした大きな三差路であるが、当時の三角形の土地は沼ぬまだったので、神武天皇が牛に跨ってそこを通行の折、牛がこの沼にめり込んで這い出るのに難渋されたため、牛之脛の地名が起ったと言う。

牛之脛には馬頭観音が祭っており、山下どんが代々神主として毎年六月十八日に祭典が執行されて、部落民全員が参列すると言う。

牛之脛から北へ数百メートル先には天ヶ屋敷あまという地名があったて、天皇家の祖先の屋敷跡と言ひ伝えられ、昭和四十八年の圃場整備事業施工の際、摺り石などの石器や土器が出土して、市立郷土館に収納された。

旧西岳村の最も西、現都市吉之元町の、鹿児島県霧島町に近い所は登り坂で、荒襲の坂と言う。そして鹿児島、都市市夏尾町の境界地が最も高く峠をなしている。

古語では背をソと言ひ、四足哺乳動物の背は脊梁せきりょうをなして最も高い所の意味である。つまり荒襲は山岳地帯の高地を指す言葉であって、この地方を古代は襲うの国といったが、三十一代用明天皇の勅令によって地名を二字に改めることになり、「ソ」の延引「ソオ」（曾於）と称して郡名となって現存している。つまり荒襲は荒背あらしの意である。

荒襲の西端に近く、県道都城・霧島公園線と国道二二三号線（小林・隼人間）の三差路の近くには、藩政時代には関所があったて、日向国と大隅国の間の荷駄は凡て、ここの役人が精査して積み替えさせていたと言う。関所の役人だった今里家の末孫今里善二翁（昭和五十五年、七十歳）は、もと西岳村の議員をしていたし、関所役人の大きな住宅は今も今里良昭の家族が現在居住している。今里姓の家は今も五軒ある。

荒襲のウンボガ谷という所は、小河内の飯屋よりもずっと奥の、鹿児島県境に近い谷だが、昔は高齢で生計の邪魔にしかないウンボ（老婆・嫗母）を捨てていた所で、西南の役の時、荒襲の人達はこの谷に隠れていたと言う。

荒襲は吉之元町内であるが、この町内には千数十年前に性空上人建立の霧島六社権現の一つ明観寺跡と荒嶽神社がある。

## 24、クルシの坂

夏尾町内の中学校と小学校の間の市道を南に登って行き、しばらくして東南の道をクルシの坂と言う。

この道は昭和三十五年頃に拡幅改良されて道路の面は今はずらに近いが、施工以前は凹凸が激しく急傾斜の道で、人も荷を積載した牛馬も大変通行に難渋苦悩したので、苦しみの坂と言うのを訛ってクルシの坂と言うようになったらしいと、土地の人は言っている。

この坂は、牛之脛の南約一キロ半の所にある坂道である。

## 25、オミケン坂

旧西岳村の最北東の端は現代都城市の御池町で西諸県郡の高原町に接し、そこにある火口湖が即ち御池で両町に跨っているが、数十万年前の霧島の大噴火の際に出来た火口に永年の雨水が溜ってできた湖と言われており、周囲が四キロメートル、水深が八十メートルで、渚には王子や柳・小松原・護摩壇など七つの港がある。

この御池に行くには県道の都城・御池線を北上して、二級国道の二二三号線（小林・隼人）との交差点で下車し、徒歩で小道を北に降って御池神社を経て、葦や柳の生えた柳の港に出る道もあるが、普通には先述の三差路を右折して二二三号線を五、六百メートル北上した所にある左側の広い駐車場に駐下車して、徒歩で降り坂を御池の皇子港に達したらよい。車のまゝ坂を降りて御池の皇子港にも行けるが、傾斜は急で三十度以上ある。

皇子の港には二、三軒の食堂や売店があり、貸ボートもあって、昭和八年ごろ北諸県郡内の小学校長の会議後宴会をして、酔った押川校長がボートに乗って転覆し、二、三ヶ月死骸が見付からなかった事件があった。

先述の御池神社は土地の人々はオミケンサンと称しているが、「御御池様」の訛りであろう。御池を神格化して祭るのであるが、牛馬を祭る馬頭観音でもあるのか、大正年間までは夏祭りの六月灯が盛大に行なわれ、馬寄には数十頭集って露店も多く並んでいたと古老の口碑に残っている。

また、この神社の近くでは冷泉が沸き、キンミヨシの湯といって一升瓶に詰めて帰り、胃腸の薬だといって飲んだり牛馬に飲ませたり、風呂に入れて薬風呂を沸したりしていたと言う。キンミヨシとは錦明寺という寺でもあって、神社との権現寺院で

もあつたのであろう。

## 26、シャクジョインの坂

御池の駐車場から二百メートル程北上すると左に入る道があり、それを西に曲折して行くこと一キロメートル余にして霧島東神社に達し、この山道は登り坂で途中左側は野鳥の森である。(この項目は、実は西諸県郡高原町に属するが、ここは旧西岳村、都城市の現御池町と相接し、火口湖の御池も双方に跨るのでここに誌すものである。)

登り坂道は霧島東神社の参道であるのだが、高千穂峰への登り道でもあり、昭和十年頃の中学生時代、筆者もここから登った事がある。

社務所には「錫杖院跡」の標柱が建っているが、実は千数十年前前に書写山の上人性空が来て御池の西の岸にある護摩壇で法華経を読誦修行し、霧島に六社の権現を建立して、その一つがここ霧島山華林寺錫杖院であったが、明治の廃佛で寺院は全部破却されて神社のみが残っている。

神社殿は社務所の背後の岡の上であり、その構造に佛寺の跡を遺しており、鬼界ヶ島に流刑された際ここに立寄った僧俊寛手植の梅は、周りに植樹した杉苗が成長して日蔭となり、昭和

六十三年ごろ枯死して空しく根株だけが残っている。

六社権現開山の性空上人のことは兼好の「徒然草」にも誌されており、天台宗の僧で母と日向国に赴き、三十六歳の時出家して霧島山や福岡県の背振山などを巡歴修行、康保四年(西暦九六七)に兵庫県の書写山に留って円教寺を開山し、種々の靈異を行って花山上皇の御幸を二回も受ける程尊信され、書写の上人といわれ、歌人でもあつたと言ふ。

なお、錫杖院跡の東百メートルの路側の墓地の中には、高齢で生き乍ら墓穴に入り、鉦を鳴らしながら経文を唱え、その鉦の音と経文の声絶えたら土で埋葬するよう遺言して逝った老住職の墓もある。生き乍らの火葬は火定と言ふが、いわば生き乍らの土葬は何と言ふのか、失念して記憶に甦えらない。

(平成十一年二月二十六日)



# 庄内小学校運動場の造成工事

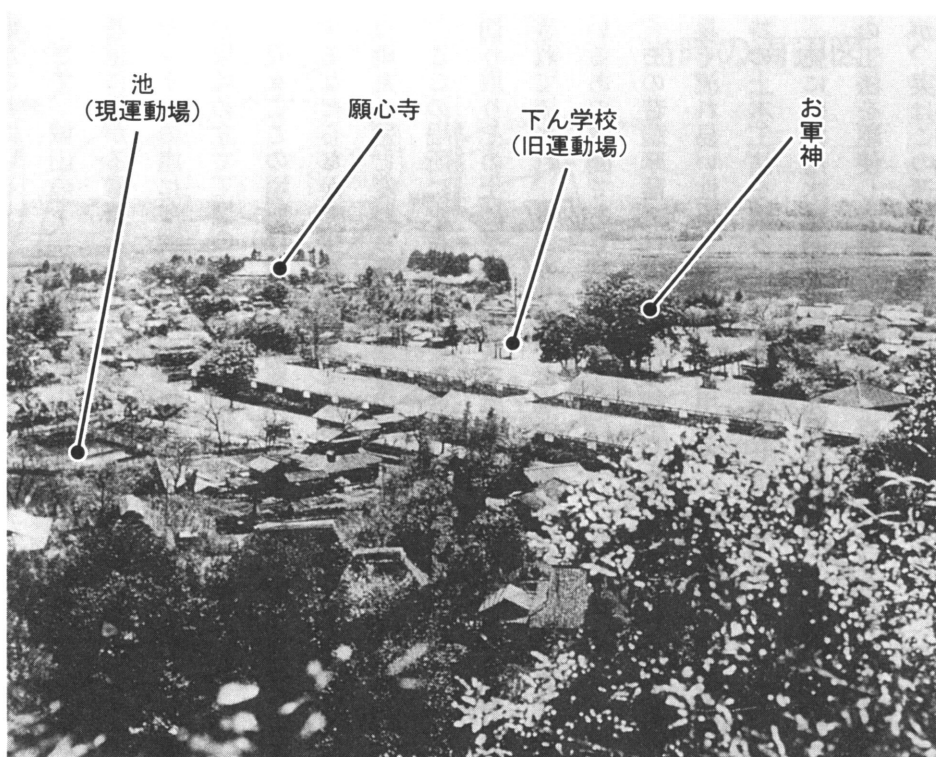
東区 坂元徳郎

先ず始めにここに揚げた写真を見てみよう。

これは昭和十年三月、この場所を庄内小学校運動場として造成する直前の写真であるが、撮影位置は坂元徳郎屋敷上の山あたりと思われる。中央に校舎四棟とお軍神のいちいの木、そしてその左に広場が見える。この広場が従来の小学校運動場、現在のJAの所である。そして校舎の左、校庭より数メートル低い所に池が見える。この池は通称ガッコン池で町区の徳永幸男さんの祖父長太郎さんが鯉を養っていた池でトツナガどんの池とも呼ばれた。周囲には櫻が植えてある。

昭和十年四月私は小学校に入学した。そして入学式は新築されたばかりの講堂で（郡内一を誇ったこの講堂は昭和二十年八月六日の庄内空襲で焼失した）、また秋の運動会は造成されたばかりの新運動場で行なわれた。

講堂も運動場も私たち昭和十年入学組が使い初めの幸運に恵まれた訳である。



庄内小学校とその周辺（昭和十年）：当時の庄内小学校運動場は現在の農協の場所。校舎の北側には鯉の養殖用の池がある。この池は昭和十年に埋め立てられて現在の運動場になった。周辺の人家はほとんどが茅葺き屋根である。

そこで、今回はこの運動場造成について検証する事にした。

私が小学校に上がる前、ガッコン池あたりに大勢の人が、ほんとに溢れんばかりの大勢の人（と子供の私には写った）が仕事をしていたのを記憶しているが、多分あれは埋め立て工事に先立って行なわれた暗渠敷設工事だったに違いない。

小学校に保存されている学校日誌の昭和十年三月三十日の欄に「暗渠工事夜業ヲナス」とあるのは正にこの時のことであろう。

運動場の下には大きな暗渠が北から南に通っているが、これはオミケン坂の下から湧き出る湧水の導水路として又周辺地域の集排水溝として現在でも機能している。

暗渠の入り口は運動場の北端黒木光男氏宅前、吐き口は大浦スーパ―南縁の石垣下、延長二五〇メートル位はあるだろうか。当時、運動場のほぼ真中辺りに直径一メートル位のマンホールがあり小さな丸い穴のあいた鉄板の蓋が被せてあった。冬になるとここから白い湯気が立ち昇り、はだしで通学する私たちは、競ってこの湯気の出る蓋の上に陣取ってしばしの暖を摂ったものだ。

この暗渠はその後の大雨でマンホールの周りが二回ほど決壊陥没した。そしてその復旧工事の都度路線の変更があった様で、

現在は運動場の東端に沿って走っている。

吐き口から先は開渠で南崎製茶工場脇を通り町下の田んぼに導水されている。

さて、城山の下、仮屋跡と城山住宅の間を西に向かって広域農道に繋がる鬱蒼とした道、いわゆる城山道の両脇は切り立ったシラスの崖になっているがお気付きだろうか。これこそが運動場埋め立て工場の歴史を物語る唯一の遺跡である。

元々この場所はお城（鶴翼城）の本丸と二の丸の間に位置するのならなかで少々低い所ではあったが、それでもその高さには両丸と殆ど変わらない一連の山であった。勿論道は無かった。この場所に水を導き、いわゆる「流し工事」によって山を切り取りその土砂を運動場まで流したのである。この時切り崩されて流され、ボッカリ空いた場所が現在の城山道路になっているあの空間である。

その昔薩摩藩では火山灰の堆積土であるシラスの「水に溶け易く流れ易い性質」をうまく利用した「流し工事」と称する独特の土木工法を編み出し、今に伝承している。

先に前田用水路開鑿の折、坂元源兵衛翁がこの「流し工事」の工法を駆使して難工事を見事に克服した事は有名な話であるが、実はこの運動場造成工事も全くこの工法を用いたものであ



た。

現在の城山道が西の広域農道に突き当たって五十メートル位右上方に前田用水路が通っている。

工事は、この前田用水路の水を分水路によって導き、城山で切り崩した土砂を水の力を借りて埋立地まで運ぶと言っている。「流し工事」によって施行された。

城山で切り崩された土砂は水に溶けて城山出口の椎屋どんの所から左折してカクン馬場の通りを流下、亀沢どんと得能どん久玉どんの角を右折、秋永どん竹下どんの間を通り野間どんの前で低地に流れ込む様になっていた。当時のカクン馬場の道は現在の路面より相当低く道そのものが水路の様なものではあったが、それでも道の中央部には又一段と低い溝があった。

※人為的に造られた溝か工事中に自然に出来たのか記憶に無いが当時小学校四年生の私は学校の行き帰りに溝を飛び越えるのに苦労した。(得能哲夫氏七十五歳談)

ところで前田用水路の高さより相当高かった城山にどんな方法で水を貫流させたか？ 私の疑問の最たる所であったが、訪ね歩いた末ようやく確証を得た。

※トンネルが掘られた事を記憶している。その時私は小学校四年生であったがトンネル掘りの現場に行ったし中に入っても

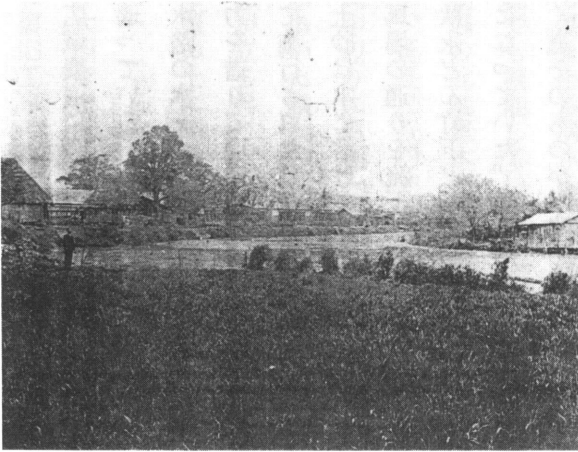
### 当時の周辺図



見た。その大きさははっきり記憶に無いが、最初トンネルを貫通させてそれに水を流した事をはっきり記憶している。元々この場所は株を保有した農家の人達が馬小屋や牛小屋に敷くシラスの採取場で椎屋どんの方から西に向かって深く抉り取られていた。だからトンネルを掘るには一番適した所だったのでなからうか。(東区森文夫氏七十五歳談) これで納得である。それにしても現在の地形から推測してトンネルの延長は一〇〇メートルは下るまい。

そしてトンネルが貫通し水が流れると、トンネルの出口で大勢の人がトンネルの天井に当たる部分の土砂をキッツやスコップで切り崩しては水に流して全線に亘って天井部分の土砂を取り除いた。

そして遂にこのトンネルは切り立ったシラスの壁に挟まれた深い水路と化した。



水流し工事で埋め立てられている様子 (昭和10年3月写す)

ここまで来れば後は簡単である。両側の切り立ったシラスを切り崩しては水に流すいわゆる「流し工事」が本領を發揮して短期間で埋め立てを完成させた、と推測できるのである。

それにしても当初このトンネルを掘る時の落盤事故や通水した時の崩落による埋塞事故等は起こらなかったものか? いずれにしても凄い事をやったものと感服せざるをえない。

「流し工事」が始まったのが昭和十年四月の中頃である。

時の町長さんは西区の清水清次氏、工事は町直営で行なったのか請け負いで施工したのか今のところ記録が見当たらない。

学校日誌四月十八日欄に「体育部会ニテ運動場ノ設計ニツイテ協議」とある。これから察すると着工日は四月十八日以降と解釈したい。

※流し工事が始ると子ども達は椎屋どんの所から奥に入ることは禁じられていたので切り崩し現場の様子は一切分からないが時折どどんとジダを揺るがすような大きな音がして流れが止まった。暫くすると溝が溢れて道路一杯にシラス水が流れてきた。あの音は激しい水流により山脚を抉られたシラスの崖が水路に自然崩落した時の音だったのでろう。(得能哲夫氏 75歳談)

※その頃何か大きな仕事があると消防団や青年団が駆り出さ

れるものだった。その時も私は消防団の一員とし工事に駆り出され前田用水路からの分水路造りに従事した。深い溝を掘って水を流したがうまく水が流れるようにジョレンやスコップの手を休める事が出来なかった。大変な仕事だった。(大川原利美氏八十三歳談)

※あの工事には私たち高等科二年生も参加した。三クラスの生徒が交替で参加したが、生徒はカクン馬場の道に適当な間隔で並び流れてくるシラスやガイシ(軽石)が留まらない様にジョレンや三つ鍬で流す仕事だった。手を休める事が出来なかったのできつかった。

四月二十三日は母智丘の祭りの日で工事も休みだった。非常に嬉しかった。(池元一重氏八十歳談)

※オミケンからの出水は黒木ドンの所から池の東脇を流れていたが荒



埋め立てられて運動場になった徳永池(昭和10年3月写す)

殿ドンの所には洗濯場があった。そしてこの水は家庭用水としても利用されていた。埋め立て工事に先立って野間克巳さん宅他四、五軒が立ち退いた。南崎製茶工場はその頃紡績工場だった。学校からの帰り道、地盤がまだ良く固まっていなかった有田どんの前辺りで私達三人はブクブク、臍の辺りまで沈んで助けを求めた事があった。(森文夫氏談)

※時たま亀沢どんの処から真っ直ぐ流れて福留どんの角から右折して坂を下り黒木どん溝の方に流れる事もあった。(山元哲朗氏七十二歳談)

学校日誌四月三十日欄に「運動場ノ地均シヲ児童ニセシメラレタシト清水町長ヨリ交渉アリ」とあるからこの時既に埋め立て工事は終了したものと思われる。前記四月十八日の運動場設計協議以降の着工とすればこの埋め立て工事は僅か十日間位で終わった事になる。(勿論事前の工事、暗渠敷設やトンネル工事その他の準備工事は別にして)

いずれにしても近代工法を凌ぐ誠に素晴らしい「流し工事」と言わざるを得ない。

工事が終わり水の流れなくなったカクン馬場の通りや運動場は一面にガイシがごろごろしていて、はだして歩くのに難儀した記憶が蘇る。

唯一?の記録である学校日誌の関係欄を抜粋すると次の通りである。

三月三十日「暗渠工事夜業ヲナス」(再掲)

四月十八日「体育部会ニテ運動場ノ設計ニツイテ協議」(再掲)

四月三十日「運動場ノ地均シヲ児童にセシメラレタシト清水町

長ヨリ交渉アリ」(再掲)

五月三日「本日ヨリ運動場地均シ作業ヲ行ナウ」

六月五日「地均シ作業続ク」

七月六日「大体ノ地ナラシ終ワル」

七月十二日「明日ノ新運動場ニオケル運動開始祭りニ関スル行

事ノ予行演習ヲ行ナウ」

七月十三日「新運動場開キ」

上記記録から察するに流し工事で造成された運動場が五月から七月まで児童による整地作業が続きようやく使えるようになった事になる。

かくして昭和十年十月十五日、快晴に恵まれたこの日 真新しい運動場では、私たち一年生をはじめ一八〇〇人を擁する庄内尋常高等小学校の大運動会が挙行されたのである。

あとがき

一通り運動場が出来るまでを皆さんの記憶に頼りながら稿を

進めたが、今回ほど

「記録」して置く事

の重要性を痛感させ

られた事は無かった。

薄れゆく記憶の中で、

今回は幸いにして戦

災を免れた小学校の

学校日誌から一部で

はあったが確証を得

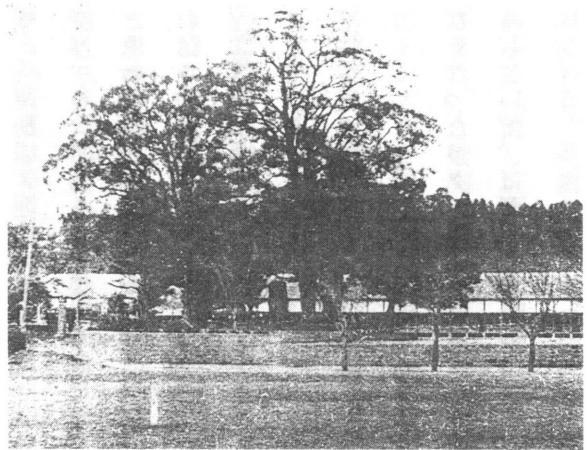
た事は何物にも代え

難い喜びであった。

なおこの新運動場完成直後、使わなくなった旧運動場跡には、現在の小学校体育館場所付近にあった庄内町役場の新築工事が始った事もこの学校日誌に明らかである。

ともあれ終戦時の書類焼却或いは都城市との合併時における書類の散逸等で庄内の昔を探る事は安易な事ではない。

しかし今からでも決して遅くは無い。記憶を記録として綴り置く事が私ども「庄内の昔を語る会」に課せられた責務であることを再認識しながら筆を擱く。(平成十三年盛夏)



下ノ学校(運動場)からお軍神、校舎を見る(昭和10年3月写す)

# 宮島の新しい伝統行事

宮島 今村 勇

宮島地区の伝統行事には、安政四年（一八五七年）に始まり現在も続いている地区百三十戸の氏神中央権現社（地眼様）のお祭り、明治四十三年（一九一〇年）に始まり連綿として引継がれ、今年で九十回を数える宮島敬老会がある。このことは本誌第二号および第三号に詳述したが、今回は、新しく復活した行事と、これから宮島の新たな伝統行事として盛り立てていこうという行事について記してみたい。

## 一、おねっこ（鬼火講）祭り復活

戦後四十年程途絶えていた伝統行事おねっこ祭りを復活させ、後世に引継ごうと壮年の有志達の語り合いに依り初回のお祭りが一九八八年一月七日実施された。

庄内川堤防脇の空地に孟宗竹等で高さ二十米程の大きなやぐらを組立て、地区の老若男女が多く集り、住民の無病息災、五穀豊穣を願って地眼神社（中央権現）で聖火を取り会場まで小学生のリレーで運ばれる。現場ではナナトコ、還暦、厄



年の方々や役職の方々皆聖火の分け火をいたゞき、やぐらの周りに並び一斉に点火する。

燃え盛るやぐらの周りではシシ汁やぜんざいのご馳走を食べる人、餅を竹竿の先に突きさして焼いて楽しく食べる子供達。

焼酎は竹で作ったカップで取交され古代の祭りをほうふつとさせる。最後はきれいな打上花火で終りを告げる。

今年（平成十三年）は十四回目であり、宮島の伝統行事として永久に伝承される事を念願する。

## 二、宮島夏祭りはじまる

宮島は、地眼神社のお祭りと、敬老会は賑やかに四月八日に実施するが他地区のように夏祭りがなく、地区民の中には長年の間、夏祭の要望もあったが実施に至らなかった。今回青壮年有志の熱望に依り『宮島ん音頭』も出来て壮年会が主催して第一回が実施された。

大きな舞台が出来て、庭には観覧席もあり、婦人部の踊り、高齢者クラブの『宮島ん音頭踊り』、宮島子供太鼓、よこずきクラブのバンド演奏等賑やかに披露された。

飛入りのカラオケ、やき鳥、氷、魚釣りなど大変な賑いで、最後は宮島ん音頭で広場いっぱい輪になり踊り盛り上った。そしてきれいな打上花火で終わった。

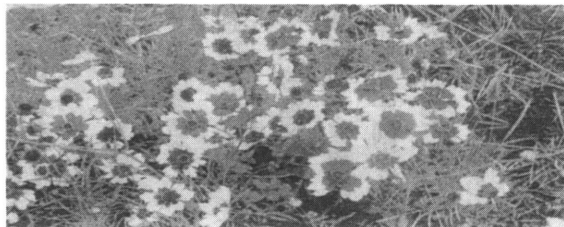
この夏祭りを永久に続けるために実行委員会（委員長 今村康彦）も出来た。

永久に伝統行事として続く事を祈るものである。

みやしま おんど

# 宮島ん音頭

2001

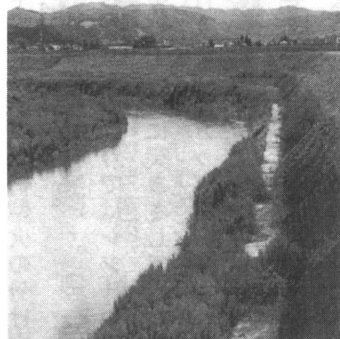


歌：芝 節子  
曲詩：今村 康彦  
振り付け：長沼 秀治

- 1 咲いた桜の木の下で おどる娘の黒髪に  
人恋しやと舞いおりる 淡いピンクの花びらよ  
4月8日のお祭に 笑顔あふれ出る  
おどれおどれよ みやしまん音頭で  
じいちゃんのおん気に おどれおどれ



- 2 せつない恋の行く先は 庄内川へ流しましょう  
そうよ人生一度きり うまくいかないこともある  
泣いて笑ってそれでいい いつでも心意気  
おどれおどれよ みやしまん音頭で  
おまいもきばれよ おどれおどれ



- 3 春にまいた種もみを 夏の太陽育てます  
青いお空の秋の日に 家族総出で稲かり  
祝いの酒を飲みましょう さあさ集まって  
おどれおどれよ みやしまん音頭で  
とうちゃんほろ酔いで おどれおどれ

- 4 ふえやタイコがはじまれば すぐに手足も動き出す  
あんたも根っから祭り好き いつしかみんな集まって  
あつい音頭のうずの中 花火もおどる  
※ おどれおどれよ みやしまん音頭で  
さあさ輪になって おどれおどれ

※ くりかえし



# 昔の天神馬場

## ―大正の終りから昭和の初め頃―

東 区 野 崎 兼 次

私は大正八年三月生まれで現在八十二才です。生まれたのは隣り町の末吉ですが二才の頃、現在の天神馬場の天神様の近くに移ってきました。

途中、小倉工廠や兵役に服した約十年間を除き、かれこれ七十年間をこの天神通りをわが家の庭のように過してきました。

大正、昭和、平成と世の中が移り変わるにつれて、この通りの町並みもうそのような変わりようです。

私の家は父の時代から蚕のタネ屋をしていました。まゆをさなぎからチョウにして、そのチョウを「わく」に入れて卵を生みつけさせます。これを庄内近辺の人々が大勢買いにみえていたのをよく覚えています。当時は別図の通り天神通りにはいろいろな店が軒を連ねていたのですが、タネ買いの帰りには店に寄って買物をされていたようです。また、肉や魚のかたげ売りもよくみえていました。

当時、天神通りには四軒の製糸工場がありました。中でも永

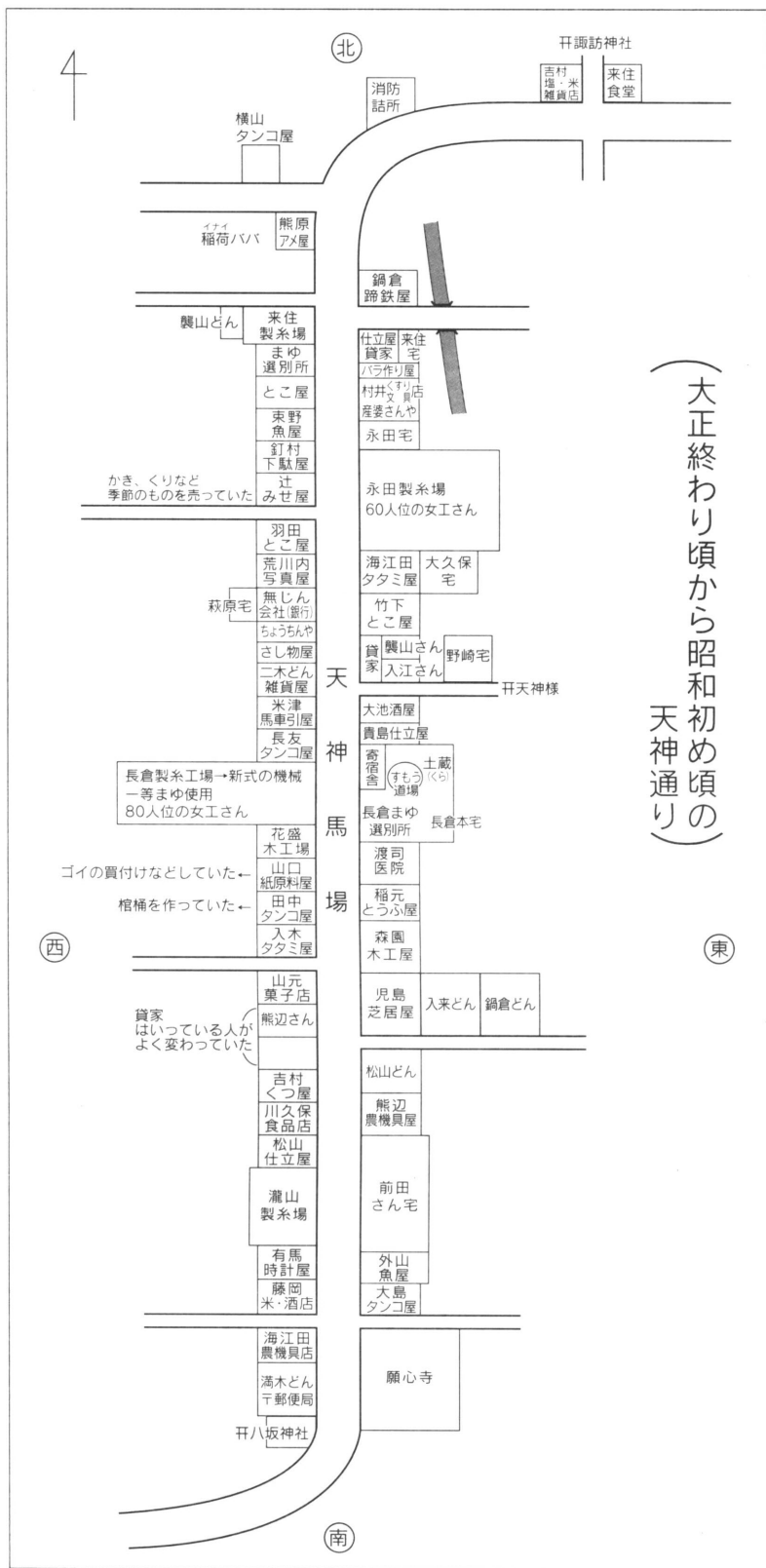
田製糸工場にはよく遊びに行ったものでした。釜の火たきの義盛じいさんがいて、石炭を入れてはひと休みして、子供の私たちに昔話をしてくれていました。その昔話を聞くのが楽しみでよく出かけたものでした。楽しみのもう一つに、天神通りの真中ほどに児島どんという所があり、ここに時々、芝居屋が来て、その芝居を見に行くのも楽しみの一つでした。

小学四年生の頃には新聞配りをしたり、少し大きくなって、無盡会社の利息請求に行ったりして働いていました。今に思えば、こんなことをしたので、当時の町並みをよく覚えたのだろうと思うことです。

庄内は養蚕が盛んであちこちに製糸工場が建っていたようです。天神通りには四軒もあったので、集中していた所だったようです。長倉製糸工場と永田製糸工場は新し機械を導入し、近郊から女工さんたちが集まってにぎやかなものでした。朝夕は特に行き来が多くにぎやかだったことをよく覚えています。女工さんの泊る寄宿舎もあり、また、長倉製糸工場の二男さんが東京相撲の力士（しこ名が霧の里）になり、帰郷してここにすもう道場を作ってこの辺りの人に相撲を教えておられました。こんなわけで、若い女工さん目当てや相撲目当てに近辺のニセどんたちがよく集ってくるものでした。

私が小学校六年生の頃（昭和六年）、天神通りに大火があり、この長倉製糸工場が焼けてしまいました。この事件を機に製糸工場は移転し、また一部の人は都城の町へ移って行かれたようです。昭和十二年の頃までは、この天神通りは次に示した図のようであったようです。

（大正終わり頃から昭和初め頃の天神通り）



その後、私が兵隊から復員した昭和二十年には、すっかり町並みも変わっていました。当時、四十四、五軒あった店や工場も現在はその面影すらみえず、わずか十軒の店があるのみ。「天神馬場、夢よもう一度」と思うこの頃です。



# 下川崎の田のかんさあ

川崎 福村 修

梅雨明けを思わせる六月も終わりに近い暑い日の事です。この日は下川崎の一班と二班の集会があった日でした。下川崎地区は、うしとんむら(後の村) まえんむら(前の村) うえんはい(上の原)の三部落(約一〇〇戸数)で形成される集落ですが、現在は一班、二班、三班と班と呼んでいます。

集会も終わり帰ろうとしていると、二班の役員の方から、午後から二班(まえんむら)で飲み会をするから出てこいとの誘いをうけ軽い気持ちで出掛けました。挨拶もそこに宴の輪の中に入り飲みながら今日は何の飲み会ですかと聞いてみました。二班では毎年六月下旬頃「田のかんさあ(田の神)」祀りを行なっているとの事でした。昔は朝のうちに雨が降り仕事が出来ないとわかると、長老組が「よし、きゅ(今日)は田のかんさあをすっど」、その一声で女性は赤飯を炊きみんなで祀ったそうですが、今はみんなが参加出来るように日曜日か休日に行なっているとのことでした。

驚いた事にいつもは、屋外の台座の上で目の前に広がる田圃

を見守っておられるはずの「田のかんさあ」が、今日は室内の一段高い所に鎮座されまわりには穀物や花が飾られその前に老若男女が集い、後ろから来た人はまず田のかんさあに手を合わせ今年の五穀豊穡を祈願され、それから宴の輪にはいられる姿を見て、昔からいかにこの地区が農業と深く関わってきたか、改めて確認させられた事でした。それにひきかえ何の飲み会かも解さないまま、座についてしまった自分の軽率さを反省すると同時に、どうしてもこの祀りだけは、後世に残してほしいと願うことでした。と言うのも我が下川崎にはこれとも言える仏閣も、伝統行事もないものと諦めていました。この祀りを復活されたメンバーの一人、竹中洋夫氏の話によると、復活は戦後間もない昭和二十七年十一月二日との事、復活当初はメンバーも五、六人だったとか、それが今は班員全員が集うようになったとのことです。いつ頃からあった行事なのか起源は定かではないが、自分の親たちがやっていた事を復活しただけの事と淡々と話しておられました。昔の田のかんさあは地主の家を周期的に持ち回りで祀ったとも聞きました。



## 忘れられない野山の幸

川崎 前畑 文利

復活してからでも約半世紀、飲みながら穏やかな田のかんさあ  
の表情を見ているうちに、昔を語る会の「庄内」誌で紹介され  
ていた話を思い出しました。昔の田のかんさあは本人さまの意  
志にかんけいなく、かつてにつれてこられたり、つれていかれ  
たり送迎？が盛んだったようです。そこで、ご先祖様や班員の  
みなさんには悪いと思いつながら、田のかんさあの遠い昔に思い  
を馳せてみました。「田のかんさあ貴方はもともと下川崎でお  
生れになったのですか、それとも他でお生れになって、なが  
い旅の果てにこの地を安住の地に選ばれたのですか」そう思っ  
て見ていたら、なにか田のかんさあがいとおしく思えてきまし  
た。

歴史、伝統に対する認識も興味本位でしかみられない昨今、  
ましてや農家も後継者不足に悩むなかで、ややもすると忘れら  
れがちな田のかんさあを、賑かさもなく、派手でもなく、また  
誰に言うでもなく誰にみせるわけでもない、ただご先祖が守り  
築いた伝統を黙々と継承しておられる班の皆さんの姿をみて伝  
統の神髄をみせられた思いでした。祀りは小さいけれど大きな  
伝統です。この小さな祀りで大きな感動に浸る事が出来ました。  
自分が生まれ育った地区に今なおこの様な地味だけれども素晴  
らしい伝統が残っていた事を誇りに思うと同時に、この心がど  
うにかして子々孫々に継承されることを願ったひとときでした。

いまは豊かな「食」の時代です。スーパーマーケットに行け  
ば季節を問わず色とりどりの野菜や果物がならんでいます。外  
国からの輸入ものも多く出廻っており、なかにはネギのように  
輸入量が多く国内産のものを圧迫しているものすらあります。  
だが、一寸待って欲しいと思います。わが日本にも昔から、  
豊かな野山の幸があるではないか。それらを分類、列挙してみ  
ると次のとおりです。

五木果 柿 栗 桃 梨 梅

七木果 (右の五種に加え) 蜜柑 葡萄

五花菜 落のとう 菜の花 茗荷の花 菊の花 菜種の蕾

五山菜 蕨 薇 ぜん芽 榎の芽 臭木の芽

七山菜 (右の五種に加え) 竹の子 独活

五山菜 通草 萱 笹栗 山桃 山葡萄

五茸 椎茸 松茸 榎木茸 なめこ茸 鼠茸

色々記しましたが昔から有る食物ですからなつかしく思われ

る方もおられると考えます。

戦前、戦中そして戦後何も無かった時代は、何を食べても美味しく、いつも腹をへらしていた時代が、昨日の事の様に思い出されます。

年に一回でも結構。その時代を思い出して、かぼちゃやからいも、野菜を一杯入れた雑炊や、昔言っていた代用食なる物を子や孫にも味わせて見ては如何なものでしょうか？

其の事によって社会勉強に成れば有難い事です。五果菜の中にトマト、ピーマン、キャベツなどは入れていませんが、昔から有る物のみを記しました。

少しでも思い出してくだされば幸せに存じます。

今後の庄内の農菜を考えながら。



## きつね

宮崎市(西区出身) 牧ノ瀬 正雄

今ごろ「きつね」に騙されたという話は聞かない。私達が子どもの頃は庄内の「観音ばる」と「かしたん谷」の奥にきつねが住んでおり、よく人を騙すと聞いていた。

この付近の畑や山に行くと、母が日の暮れる前に家に帰らんと「きつね」が出てきて騙すから…と急がせたものである。

親が信じているから子どもも信じないわけにはいかない。

子どもの頃、西岳の入口に大倉田という集落があり道路脇に「三次郎」さんという人がおられ、毎週定期便のように庄内の町に買い物その他の用事で来られ、よく私の家に立ち寄っておられた。

姓は覚えていないが、かなりの高齢者で別に親戚でもないのに親しく母たちと付き合いをされ、私たち子どもに「きつね」や「河童」の話をしてくれる好々爺であった。

★ 西岳に「与助」という「三次郎」さんの友達がおり「きつね」に騙されたというのである。

年末に庄内の町に薪や木炭を売りに行くため馬に積んで、町に出てきて売りさばき正月前でもあったので、徳永商店や宮竹商店・吉田精肉店などで焼酎・肉その他正月用品などを買い、買い物ですんで、好きな焼酎を飲み品物は風呂敷に包んで馬の鞍に確かりしぼり付けて帰ることとした。

帰りは国道を通らずに「墓地」から観音ばるに上がり、一本松のところで小休止をすることとし一服していると、見知らぬおばさんが通りかかり：いま戻りかたな：と声をかけたような気がすると間もなく姿が消えたといふのである。

しばらく休憩して、陽も落ちかかってきたし酔いも少々覚めてきたので、帰ることとし馬をひいて坂を下り大倉田に着いた。

町に行くとき三次郎さんから肉などの買い物頼まれていたので馬の鞍から風呂敷包みをおろそうとしたところ、肉や魚を包んだ風呂敷がない！焼酎や醤油を入れた風呂敷はそのままだって残っていた。

それからが大変：確か一本松で腰を下ろして馬の鞍を見たときには風呂敷包みが二つあった。一本松までは一軒もないので二人で探しに行くこととし、「ことばし」を下げ

て山あいの道を探しに行ったが、なかなか見当たらなかった。

付近を探しながら「与助」さんが：ここで休憩しているとき見知らぬ「おばさん」が通りかかり、なんとかモノをいってすぐ居なくなった：と、三次郎さんに話した。

三次郎さんがそりや「きつね」にやられたことに間違いない：この前も西区の「おばさん」がこの付近で騙されたそうだと二人は話しをしながら諦めて：家に帰ったということであった。

この話は小学三年の頃聞いた話で近所の卓ちゃんや母たちも聞いていた。戦後しばらく「一本松」は残っていたが今はなくなっている。「きつね」は犬以上に鼻が良く効き、一里四方の「かしわ」や「油揚げ」の臭いがわかるそうで、こんな物を持って野道を通るときは気をつけんといかんかと、母や近所のおばさん達は時々茶飲み話しの話題にしていた。

半世紀を過ぎた今、庄内にそんな話しがまだあるでしょうか？古きよき時代の懐かしい子どもの頃の思い出であります。



# 宮崎県ラグビー界の 発展に尽した池田政秀

西区 松吉秀隆

都城は庄内西区に池田政秀という男がいた。存命ならば八十歳であろうか。父（秀夫）が歯科医を開業していた関係で十代までは博多育ちである。

福岡中学（現在は福岡高校）からラグビーを始め、明治大学予科では北島監督の指導を受け、福岡にもどってからは当時九州最強の門司鉄道局ラグビー部に迎え入れられた。小柄ながらも持ち前の闘志と俊足、判断力のよさで九州代表として、オール関西、オール関東との対抗戦で活躍している。

ここではまず、宮崎県で初めて本格的なラグビーの試合が紹介された話から始めてみたい。

池田は昭和十二年を回顧して、「門鉄時代、鹿児島には何回か遠征し、鴨池で試合をした。しかし残念ながら、故郷の宮崎にはチームさえない。何とかして宮崎にもラグビーを育てたい」と三宅良吉監督（甲南高、明大OB）に頼んで、新設間もない

宮崎市の県営総合グラウンドで、本県で初めてのラグビー試合を披露した。もちろん、地元の遠藤体協副会長、宮崎駅の竹上助役には格別の御尽力をいたゞいた。しかも主催が野球協会とというのも面白い。その後も何回か宮崎に来て、講習会のようなものを開いたが七月に戦争が起こり、翌十三年には私も戦争にかり出されて、宮崎県にはラグビーは育たなかった。昭和十五年に紀元二千六百年記念行事として、再び門鉄紅白戦が行われたと聞く。」と語っている。

ラグビーは当時の県民にとっては新奇な競技であったので、同じく主催者の宮崎新聞は試合の一週間前から宣伝・広報につとめている。二月十六日からは本司貞介氏（元、満鉄専門校選手、宮崎工業学校教諭）によるラグビー競技規則、方法、用語の解説を連載している。

二月二十一日（日）いよいよ試合当日、インタビューを受けた主将池田は「当地のみなさまの烈々たる熱望に叶ふべく、われ等は渾身の勇をふるって試合にのぞみます」。とこれまた熱い思いを朗らかに述べている。

会場の様子を記事から抜き出すと

○ 天気、雨

○ 観衆、二千余名、師範、女子師範、中等、商業、工業、農

業の各生徒、高等農林学校、一般。

○ 入場料 大人三十銭、中等学生十銭、小学生五銭

○ 競技説明 パンフレット配布

○ 解説放送 本司貞介氏（前掲）

○ 試合結果 縞軍三十点・紅軍六點

こうもり傘を片手に、あいにくの雨中戦、両軍泥まみれの試合を珍奇のまなざしで見入っている。

試合終了後、プール横の風呂場で両軍仲よく、お互いの泥と汗を流し合い、健闘を讃え合った。

かくて尊い日向ラグビー史の一ページをかざった。とある。感激なき人生は空虚なり、といわれるがここに至るまでの池田の胸中は察して余りある。

戦後は庄内に帰り、町役場、町立病院、市役所に勤めるかわら戦前まいたラグビーの種を県内一円に拡げ、育てていくことになる。

終戦の翌年、池田は県ラグビー協会副会長に就任するが、池田の本領はむしろ、コーチとして後進の指導に情熱を燃やしたところにある。

昭和二十二年の夏、池田は都城中学校（現泉ヶ丘高校）に初めて出来たラグビー部の少年たち（当時十六才位）と、庄内小

### 待望のラグビー

## 総合グラウンドで

# 雨中の泥濘戦

### 門鐵の紅白軍をむかへて

### 昨日壮烈に行はる

宮崎県総合グラウンドで、昨日（二十一日）午後二時から、門鐵の紅白軍と、本県ラグビー部との試合が行われ、雨中の泥濘戦が行われた。試合は、門鐵の紅白軍が優勢で、最終的に三十一対六のスコアで勝利した。試合は、雨中で行われ、泥濘の中での激戦となった。門鐵の紅白軍は、前半から優勢で、後半にはさらにペースを握り、最終的に三十一対六のスコアで勝利した。本県ラグビー部は、前半は苦戦したが、後半には奮起し、最終的に六点を挙げた。試合は、雨中で行われ、泥濘の中での激戦となった。

## 宮崎は處女地

### 将来の普及を願つてやまない

### 兩代表交々挨拶

宮崎県総合グラウンドで、昨日（二十一日）午後二時から、門鐵の紅白軍と、本県ラグビー部との試合が行われ、雨中の泥濘戦が行われた。試合は、門鐵の紅白軍が優勢で、最終的に三十一対六のスコアで勝利した。試合は、雨中で行われ、泥濘の中での激戦となった。

### 熱戦ぜん

### 池田主将語る

### スタンド埋む

### 雨傘の観衆

### 貴い一頁をかざる

宮崎県総合グラウンドで、昨日（二十一日）午後二時から、門鐵の紅白軍と、本県ラグビー部との試合が行われ、雨中の泥濘戦が行われた。試合は、門鐵の紅白軍が優勢で、最終的に三十一対六のスコアで勝利した。試合は、雨中で行われ、泥濘の中での激戦となった。門鐵の紅白軍は、前半から優勢で、後半にはさらにペースを握り、最終的に三十一対六のスコアで勝利した。本県ラグビー部は、前半は苦戦したが、後半には奮起し、最終的に六点を挙げた。試合は、雨中で行われ、泥濘の中での激戦となった。

学校において二週間の合宿訓練を行っている。いま都城地区では都城高専はじめ各高校のラグビーの水準は高いが、その萌芽は庄内のここにあったとも言えなくはない。

その生涯は後に記した略歴にみられる如く、宮崎県ラグビーの歴史を切り拓いていったともいうべく、その功績は大きい。ラグビー一途な一方で多彩な能力を發揮し、ユネスコ協会、文化協会、ガールスカウト活動など、関係団体の設立準備の段階から重要な役割を果たし、文武両道・文武不岐の人物でもあった。今もその教えや人柄を懐かしむ人は多い。

#### 池田政秀氏の略歴



〔大正5年3月31日生〕  
〔昭和60年8月15日没〕  
享年69歳

○昭和6年〜12年

福岡中学校（現福岡高校）ラグビー部入部

明治大学予科入学、ラグビー部入部、卒業後、門

司鉄道局ラグビー部入部、ウイング、フルバック

として活躍

○昭和21年 宮崎県ラグビー協会副会長

○昭和21年〜43年

宮崎大学ラグビー部監督。全国大会に四回出場。

県内初のコーチ団主任として泉ヶ丘高校はじめ各

高校チームを巡回指導。

○昭和51年 都城市教委保健体育課退職

国立都城高専ラグビー部コーチ（全国大会優勝に

尽力）

○昭和54年 宮崎県で開催された国民体育大会ラグビー専門委

員長として、総合優勝に貢献（少年優勝、成年準

優勝）

◎晩年の役職

○宮崎県ラグビーフットボール協会会長○都城ラグビースクー

ル校長○都城ユネスコ協会副会長○都城文化協会初代事務局

長○都城ガールスカウト顧問

◎主な受賞

○昭和54年 文部大臣賞（体育功労）○昭和54年 都城市社

会教育功労賞

# 警防団と庄内空襲の日

平塚町 山 元 正三郎

昭和十九年三月、高等科を卒業して青年学校に通いながら家の手伝いをしていた。

十月頃町区の警防団長の平田常盛さんと宇野勝美さんが来られ、私に警防団に入ってくれないかと言われた。父が「まだ十五才ですよ」と言ったら、団長さんが「今、二十才〜四十才代の男性は兵隊や軍属に取られ団員が少なくなり、年寄りだけが残って冬場の夜警が出来なくなっている。」と言われた。是非入団してほしいとの事で、同級生の浜畑秀美君と二人入団し、団員はやっと二十名になった。その頃の団員は天神馬場から有馬美好さん、平田常盛さん、石黒勝次さん、持永篤次さん、待木実男さん、宇野勝美さん、岡田さん、畑中栄さん、今村良美さん、山口郁美さん、丸野兼則さん、巻木清さん、重久進さんなど今覚えているのはそのくらいで、ほとんど年寄りの人たちばかりだった。

四名一組、五組編成で五日に一回の割合で夜警がまわってきた。その頃は十一月十五日より翌年の二月十五日まで三ヶ月間

の夜警で、私は今村良美、丸野兼則、重久進さんの組だった。勤務は夜の七時から翌朝の六時まで、詰所は福崎写真館の西の道路の所にあった。消防車の車庫は野口さんと有馬さんの家の間で、ミツワさんの倉庫の所だった。

年に二回かまどの検査や煙突の検査などがあり、当時はまだかまどでたきぎなどを燃やしていたので入念に検査していた。

夜警は十二時と午前二時の二回、回っていた。まず二人で天神馬場にあがり、途中で引き返して田中医院の前を通り、小学校の小使さんと役場の小使さんを起こしていた。今の支所の中に道路があり、山下医院の角をまわってウシトン馬場を通り、前田カジヤの角に出て西区の詰所に立ち寄り、本通りを通り、庄内劇場の前まで行き、詰所までの道のりを拍子木をたたきながらおじさんの後を小走りについていった。

着る物も少なく手袋とて満足にないその頃、夜中の二時頃まわる時の寒さは言葉では言い表わせないほどであった。

私の家は商売をやめて農業をしていたので荷馬車があった。当時軍の糧秣運搬に駆り出され、谷頭駅から湯谷や城山の洞窟まで一日二回運んでいた。毛布を箱詰したのだったり食糧だったり、一台の荷馬車に二十五個とか三十個とか決まった品物を運ぶのだ。父は体が悪かったのでたまに私が替って行った。毛布が二十枚ほど入った木箱はとても重く、一人ではかつげず、



背中に背負って荷車の上まで持って行き、やっとの思いで積んで庄内に来て又洞窟の中まで背負って行く。私が一回目を終えて谷頭駅についた時はもう大人の人たちは荷積みを終え、庄内に向けて出発したあとだった。私が荷積を終え帰る頃はもう隣りの巻木さんなどは夕ごはんを食べていた。

そんなある日の夜警の夜、詰所に行ってこたつに入り、すぐ眠ったのだろう、目が覚めると、もう外は明るくなっていた。

「あっ」と言っているとび起きると今村良美さんが「サブちゃんがあまりにも良く眠っていたので、昼間の仕事で疲れていて起こすのがかわいそうで、よう、起こさなかった。」と言われた時は涙が出てきた事を今でも覚えている。

正月の出初式も大人の中に子供が二人チョココンと並んでいた。その頃はどこの部落でもそんな感じだったのだろう。団服は渡っていたのかどうか記憶にない。たぶん私服だったのだろう。消防車の運転は山口郁美さんがしておられた。

昭和二十年八月六日、その頃家には兵隊さん(工兵隊)が二十名位泊っていた。昼からの仕事の都合で父と二人、早めの昼めしを食べていると、都城の方で空襲が始まり、私は前の庄内木材の屋根に登って都城の方を眺めていた。父がそのうちにこっちに来るぞと言った時、どこから来たのかバリバリ、ピュンピュンとグラマンが機銃掃射を始めた。驚いて屋根から飛び下りて

家の畑の柿ノ木の下に夏布団を頭からかぶりしゃがみこんだ。グラマンのエンジンの音、バリバリと機銃掃射の音、裏の田んぼにピュンピュンと落ちる音が不気味だった。今度は自分の背中に当たるのではないかとナムアミダブツを唱えながら身動きすらできなかった。(後で田んぼに行ってみたら機銃の葉莖が落ちていた。)

エンジンの音が消えて立ち上がってみたら、もう三ヶ所位真黒な煙が立ち昇り何軒も燃えていた。風が東から吹いて私の家の方に平木が燃えながら飛んで来た。父と水をかけて消し、家にわずかに残してあった荷物を製材所の所に持ち出してから、消防詰所に走った。木原さんの前(宮銀前)まで行ったら両側が燃えていて熱くて通れず引き返して天理教の前を走り、待木さんの前を抜けて詰所に行った。詰所には山口郁美さんが来られていたので二人で出口の清水さん宅の大きな椎の木の下に車を隠して、飛行機から赤い消防車が見つけられないように竹を切って消防車を覆った。水源もなくホースもとどかず、放水も出来ないまま団員だけが一人二人と増えてきた。その時はもう大方の家は燃え落ちて、後は道路に落ちている危険物を取り除いたり、焼けあとの見廻りをしてまわるだけだった。

大石さんと今林さんの所の馬が二頭焼け死んでいて、夕方馬の始末をするための穴を堀らされた。やがては軍馬になるはず

の二才馬だった。私が山口さんと消防車の後始末に行つて、延ばしてあつたホースをたたみ車に積んで詰所に行つた時はもうみんな帰つてきていた。

土間の所にブリキのバケツ四・五杯に馬の肉が入れてあつた。囲炉裏では炭火で肉が焼けていていい匂いがたちこめていた。私は東区の詰所に、秀美君は西区の詰所に一杯づつ持つて行かされた。東区の団員の方たちも大喜ばれた。その頃は食糧も不足しがちで牛肉は食べていたけれど、馬肉は食べた事がなかった。塩味のついた手の平ぐらいの肉を三片程食べた時はホッペタが落ちるくらいおいしかった。大事な馬を死なせた馬主さんには申し訳なかつたが本当においしかった。いったい誰がいつ肉をそぎ落としたのか、私は穴を掘つて消防車の所へ行つたのでわからない。たぶん年寄りの人たちが穴に埋める前にやわらかそうな所の肉だけ切り取つたのだろう。

長く暑い一日は終わり、やがて終戦を迎えた。復員軍人が帰つてきて年寄りの団員と入れ替り、私は兄が帰つてきたので兄と入れ替りに退団する事となった。

その当時の年寄りの団員はもうすでに亡くなり私も七十二才となつた。五十六年前の事も夢のような遠い日の出来事である。しかし、今思うと当時の私はまだ子供だったのだろう。あの肉、馬肉をひと切れでも父に持つて帰つて食べさせよう、と言う氣持がわいてこなかつたのかなあ。

## 庄内ことば雑感（続）

町区山元昭平

十一号では朝の会話から入り、ごく簡単に一日の出来ごとを中心を書いてきて家庭のなかの一寸した四季の変化について筆を運びましたが、今度は字の変化によって内容が變つてくることの面白さなどを表現してみたいと思います。

言葉について深く追求していくと文法的になり過ぎ興味をそぐ面もありますので、そういう面は専門家にお委せして、なるだけ日常茶飯にいつも使われている言葉をとりあげて、われわれ庶民が納得して行動する言葉の意味や語源にとどめました。

前回は、大酒呑みを「うぐれ」というところで終わりました。

(イ) そこで、まず「大」を「う」と訛るものを挙げてみますと、

大雨	大風	大川	大病	大銭	大火事	大皿	大騒動	大損	大作家	大声	大世間	大法螺	大寝児	大太鼓	大根
----	----	----	----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	-----	-----	-----	----

ついでに、「大」「代」を「で」と訛るものを挙げてみますと、

大根	大明神	大名竹	大五郎	一代物	大事な	大概
----	-----	-----	-----	-----	-----	----

(ロ) 「り」が「い」に変わるものには、

襟元 折詰 稲刈 夕去もと 二人 播鉢 — など、また、

(ハ) 「い」又は「らい」が「れ」に変わるものでは、

暗い 偉い 辛い つらい 高麗菓子 大喰い などが挙げ

られます。

(ニ) 「もの」は「むん」又は「もん」と訛り、

着物 金物 漬物 薪 買物 小さい物 — と

なります。

(ホ) また、「はい」は「へ」と短縮するので、うるさい「蠅」

も「へ」が止まった、となりますし、木や木炭の燃えたあとの

「灰」も、ゆるい(囲炉裏)の「へ」のようにいいます。

(ヘ) 「よい」「よく」の意の言葉を「ゆ」と訛って短縮して

「よくなる」は「ゆなる」となるので、病気がなおるとい

は「ゆないもした」ということになります。

「ゆねかった」「ごっすらゆねかった」は、とうとう治療の

甲斐なく亡くなったの意になり、「ゆせんか」はよくしないか

という意味です。また、「い」が「ゆ」になるとゆごっせんか

言う通りにしないか。ゆくさしようこそ、となり、ゆきる

切る、断言する。ゆちらかす || 言い散らす、となります。

(ト) 次に、接頭語に類する「け」のつくものとして、

けすんだ || 済んでしまった、けすぎる || けなす、けしぬ || 死ぬ、  
けしんめ || 死ぬ様な目に逢う、けもどる || 帰る

(チ) 語尾が「ね」で終るもの

「ね」はたいていの場合「ない」という共通語に対応します  
が、そうでない時もあります。例えば げんね 恥ずかしいは、

げんなかとはいっても、げんないでは共通語にはならないよう

です。又「あっね」は名詞で「商」ですが、形容詞では「危い」

になります。

例 じもね || 儲けがない じゃね || そうじゃない ずっね と

ほんね つがらんね からんね ふけんね あべてんね

みとんね とんじゃがね ぼんのがね きっさね どっね

こたね

(リ) 語尾が「し」で終るもの

あつたらし || 惜しい。これは、古語の「あたらし」の転訛ら

しく、まこちあつたらしい人でぐわした、のように言います。

いやし いっでし うでらし おせろし かばし がならし

しおらし くせらし てがまし やせろし ぼやし ぐらし

(ヌ) 語尾が「な」で終るもの

いかげんな じょじよな いっだんな じゃげな ぶちよほ  
な せわな てげな ぼっけな やっけな むでな てせな

(ル) 語尾が「る」で終るもの

あせくる 〓 かきまわす あえる 〓 落ちる いける 〓 埋める  
いだる 〓 煮える いみる 〓 物が増える いっかせる 〓 教える  
いっける 〓 結わえる かぶしる うっせる きばる 〓 くれる 〓  
崩れる くじる くっされる こしたえる けすぎる こば  
める つわすれる けんどる すこする  
などなど、この地方の方言は尽きる事なく活用されて探してみ  
ればいくらでも浮かんでくるものです。

(\*) 形容詞、副詞に関する言葉をさらに拾ってみますと

多い、たくさんの意の同義語

あばてんね そがらし どっさい うごっ べったい ずばっ  
べらっ ふてこつ (広辞苑に不敵なこと不満に思っ言う事  
をきかない不逞な物言不満ごと) とあります。

「全部」、「みんな」という意のことばでは、  
すっぺ すっかい ずるっ ねっかい べらっがあります。  
その他の形容詞に類することばを思いつくまゝに

あくわさっ 〓 呆然と気抜けした、ぼんやりとしているさま  
いでがい 〓 何となく痛くて痒ゆい。こんにやくを手にしたと

き等の感じ

きっさね 〓 汚れてきたない せわな 〓 心配な、不安な

(ワ) 副詞形に類することば

おろい 〓 まづい、つまらない ちんがらっ 〓 こっばみじん  
あつねこっ 〓 あわや危ない事 うせしけ 〓 大あわて  
あらかした 〓 あらかた大体 えしれん 〓 つまらない  
おさふて 〓 身分不相応 いかげん 〓 中途半端いゝ加減  
おてつき 〓 充分たくさん いけんしてん 〓 どうしても  
かたいごっ さしかぶり さしつけ むくろいき よろっで  
同音を重ねて作る副詞形のことば

ひよっかひよっか ちんちん そろいそろい てげてげ さっ  
さっ だんだん

似た音の語を重複して強調形を作ることば

いっぺこっぺ あっちゃこっちゃ としてんこしてん  
ひっちょかっちょ よんごひんご どっちんかっちん  
どじゃしこじゃし とったいくんだい ねんじゅさんじゅ  
どこんこっとん いっちんさっちん ふんだいけったい

(カ) 代名詞の方言

そき あっき こき どき 〓 場所を示す、そこにあそこにと  
この意

そなた あんた こんた 〓 それは、あれは、これはの意

そげな あげな こげな どげな 〓 その様な、あの様な、こ

の様

(三) 動詞形のことば

あんどした<sup>ハ</sup>あきあきした うだす<sup>ハ</sup>追い出す、こさ<sup>ハ</sup>だす  
いっきよう<sup>ハ</sup>行き逢う、面会に行く、いっきよけ行く うつ  
くずれる<sup>ハ</sup>うちこわれる うつとおす<sup>ハ</sup>追い越す。打ち通す  
うつおとす<sup>ハ</sup>撃ちおとす おなぐ<sup>ハ</sup>上をむく、仰ぐ「おねっ  
みよ」もっと上を向いて見よ おやす<sup>ハ</sup>養育する、子おやし  
せしこた<sup>ハ</sup>がる<sup>ハ</sup>叱る かんつく<sup>ハ</sup>咬みつく くらめ<sup>ハ</sup>消え  
うせる

早くしないかというとき

早よせんか たったきせんか たつつきせんか いっきせん  
か、というように何かを急がせる時に良く使います。「いっき」  
「はよ」に似たのが「せしこっせんか」、「さっさっせんか」「つ  
うつうせんか」で、忙しい時とか命令する時によく使います。  
又類義語に「忙しく」の形容詞で「今日<sup>きゆう</sup>はすつかり忙<sup>せしこた</sup>しかった。  
又はうぜしけた<sup>ハ</sup>（大変忙しかった）もあります。その反対  
語は「みやえ」です。案外たやすかった。楽<sup>あんやちや</sup>だった。あの人は  
怠<sup>よだ</sup>け者だから、日陰<sup>ひんね</sup>で昼寝<sup>ひんね</sup>をしていたがね

よだき のさん こえ きち さぼる<sup>ハ</sup>仕事で大儀な事の意

(ク) 名詞形のことば

あや あやがね あやんね<sup>ハ</sup>意欲がない、精根がつき果てる  
の意 あば<sup>ハ</sup>新しい事 あばおろし<sup>ハ</sup>新しいものを初めて使  
うこと いたぐら いづらめ<sup>ハ</sup>居づまい座り方の行儀 おだ  
め<sup>ハ</sup>楽器の調子 きも<sup>ハ</sup>国語辞典には胆略とある。いろいろ  
な意味に使われる きもがふて<sup>ハ</sup>胆が太い、胸が大きい き  
も入り<sup>ハ</sup>世話をする きもいれ<sup>ハ</sup>早くせよ、急げの命令形  
きもがいる<sup>ハ</sup>胸やけがする

馬鹿の意を表わすことばについては、広辞苑に

梵語 慕何 摩訶羅 無知の意とある、おろかなこと 愚人  
あほう つまらぬこと 無益なこと

都城地域では 人をのゝしる時とか目下の人を叱る時「こん  
馬鹿が」とか、「馬鹿たれが」とか下品で荒っぽい方言で、馬  
鹿んつける薬はない、馬鹿ん一つ覚えとか言っけなす言葉に  
よく使われます。聞いていて余りよい気持はしないものです。

同義語に どんた どんつ ぬけさし ぐわんたれ等

その反対に、たましきつ<sup>ハ</sup>利口者があります。

(レ) 他人の悪口をいう時

じょじよな奴<sup>わら</sup><sup>ハ</sup>強情で芯の強い者 おどむん<sup>ハ</sup>横着者  
えじ奴<sup>ハ</sup>ずるい悪がしこい やぜろし<sup>ハ</sup>うるさい  
ぐわんたれ<sup>ハ</sup>粗悪な あざて<sup>ハ</sup>粗雑な浅はかな

うてな奴うてな || ぼんやりした、疎人うと いみし奴 || 意地の悪い人  
(ツ) 悪口の次は人の愛称です

嫁じよ 後家じよ おごじよ 殿じよ 息子じよ 弟じよ  
姉じよ 妹じよ 娘じよ 孫じよ

これらは敬意を表して呼ぶ用例です。「じよ」は上という字でもあてるのでしょうか。年とった男の人につける「あんじよ」という言葉もあります。「じよ」と似たものに「じゅ」があります。きかんじゅ || 言うことをきかない人に対する蔑称侮蔑の言葉、又爺と婆があります。昔は中年以上の男には「じ」女には「ば」を名前のあとにつけていました。女の人には名前の上に「お」をつけて呼んでいました。おつやば (ツヤ婆さん)、おつねば (ツネ婆さん)、おけさば (ケサ婆さん) 男には「じ」だけつけました。武義じ 清吉じ 兼利じ  
(ツ) 衣食住など日常生活のことばに移ってみましょう。まず食の言葉です。

しよい || 醤油 しゅい || 汁、みそんしゅい  
すいもん || 吸物 しゃしん || 刺身 でこんば || 大根葉  
そばきい || そば がらんちゅ || 乾燥魚、唐人干とじんぼしともいう。  
おかべ || 豆腐 ぶえん || 新鮮な魚 よながい || 夜食  
はだぐい || 間食、おやつ これがし || 高麗菓子

いこもち || 澱粉餅 もしこ || 落雁 ねまる || 食物が腐る  
あれやしめ || 台所の片付け べぶまき || あくまき  
ぼったげ || 牡丹餅 きらす || おから

食器及諸道具のこと

めしげ || しゃもじ けじゃくし || 具杓子けじゃくし ほちよ || 包丁  
ちよか || 土瓶、かなじよか || 鉄瓶 たんご || 木製の水桶  
きびちよ、きびしよ || 急須 たれ || たらい  
かなだれ || 金だらい、びんだれ

しよけ || ざる、竹ひごで編んだ細長いみそこし形が多い  
ぶいじよけ || 農作業用の入れもの てご || 手籠

てもと || 箸 せんなもん || 穀類の実とからを振り分けるもの  
火よこし || 火吹竹 ぜんふぞ || 財布 ちきい || 竿秤り  
はんず || 水がめ きいばん || まな板

めご || 茶碗食器などの入れもの

着物のこと

あげ || 着物の長いのを短くする かたぎん || 袖なし  
いしよ || 衣装きもん きいもん くやどん || 染屋  
いっちらびら || 一枚きりの着物 けしんめ || 裏返し  
てぬぎ || タオル ねばし || 真綿 はもん || 腰巻  
めだれ || 前だれ

農具類のこと

むしとむしろ 筵 かまげかまげ 吠 じよいじよい 草履せうり

かざいかざい 堆肥やいもを入れる袋 あしなかあしなか ぞうりの前半分  
わらつごころわらつごころ 藁をしいて叩く木槌 どんじどんじ 杭打ち

そらそら いたわし へわへわ せいろうの下に敷く藁製の輪

はなぐいはなぐい 牛の鼻輪

田植も機械化され、昔の農具も忘れ去られていきます。田植が終ると「さのぼり」とよばれる田植えの作業の苦労や疲れを忘れるための慰労の宴が行われ賑やかなものでしたが、もう遠い昔語りになりました。

(ネ) 植物 作物について

からいもからいも 甘藷さつまいも たっわけたっわけ なた豆

でこんでこん 大根 いたういいたうい へちま にじんにじん 人参

ねっねっ ねぎ ときっときっ 砂糖きび こしゅこしゅ こしょう

うんめうんめ 梅 けしんけしん 肉桂 すんけすんけ いすの木

うんべうんべ 郁子むべ いんのこぶしいんのこぶし 猫やなぎ とんぼとんぼ あけび

動物について

べぶべぶ 牛 こちこち 雄牛 おなめおなめ 牝牛 んまんま 馬

こまこま 雄馬 だんまだんま 牝馬 ゆたゆた いたち もまもま むさむさ ぶ

がらがら っぱ、がぐれがぐれ 河童かわづむら ちよかんちよかん さいさい とかげ

びつきよびつきよ 蛙 ししゃむしししゃむし いもり ばぶたばぶた とんぼ

ぶとぶと ぶよ、ちよちよめろちよちよめろ 蝶 あまめあまめ ごきぶり

いいやいいいやい 蟻、家蟻 つぐらめつぐらめ かたつむり

むかぜむかぜ むかで くだまきくだまき かつわむし ほじよほじよ 毒毛虫

(ナ) 病気などに関する方言

いしゃいしゃ どんどん 医者殿である。人体を保護していただく医者は、昔から敬称を使って呼ばれていました。

あんべあんべ がわりがわり 体の調子がよくない、病気になる、按配が悪い。

だれるだれる 疲労が重なる、疲れる。

おてけるおてける 更に悪くなる ゆなるゆなる なる

はやいかぜはやいかぜ 流行性感冒 さばけるさばける 良くなる

やんめやんめ ごろごろ いつも病気持ちの人

さかしさかし よとしよとし なえる 息いき ひく びんたびんた がいて いつでし

ひえひえ がある きもきも がある へへ がまわる ねね っと

うう だばれ さかむさかむ け つぐろつぐろ じん ぜろぜろ もち はさんはさん ばこ

(ラ) このほか、面白いと思われる表現を挙げてみます。

いくいく ひくひく 咳が出る いくいく するする 息をすう

いていて ・あちあち 熱い 風かぜ がくれくれ ちたちた 風邪感冒に罹る

ごんごん もさんさん も、誰もだれ 彼もかれ 大概たいがい の人が 皆みな なが

戸をたてる 戸を閉める。戸じまりをする。戸は初めから立っている 煙草を吹く 煙草を吸う といかけめかけ 寄って たかって はよおす 漢字では早く遅く 遅速反対の語 はやばよとの意 例 物ごつは はよおす決むんきな

はらかく 腹をたてる 風呂を立てる  
しかし、腹をかく とは面白い表現ですね。

うんにか 間違を否定する。いや とか いや失礼しましたの意の時に使う。

ふてをひく 風袋を引く 話が真実と違う  
けったくる けりまわす

はらがなげる 投げるでなく、凧ぐる和らぐ平静をとり戻す。  
いっだまし 魂の入りすぎた えしれん つまらない  
いやしんごろ 食いしんぼ おなかしん 仰向け

あとぜき 終ってから危険を感じる ぐいがえし となぼが  
えり あてこすい 皮肉耳ざわりな言 ごそまくい あわて  
て起きる あとくけ 後悔 ねっくれ へそ曲り

すんくじら 隅っこ あんどほろ 飽きあきする やいそこ  
ね 失敗する とばごつ 冗談 よかまね 見栄を張る。

(4) 余り耳にしなくなった言葉

うせかける 牛馬に荷を負わせる おさふて 大胆な

かたいごし 交互に かなぐる 荒々しくむしる

こさつあつめ かきあつめる くるんづく うつむく

あんべらしゆう あたりさわりなく、ほどよく

雪隠 便所トイレ ちきい 計量はかり ギュッタ ゴム

びんずい 肩車 ぼっけもん 無謀な奴

めもれ ものもらい

(5) 最後に当地域で言いならわされている諺を二つ三つ挙げてみます。

遠い親類より近所の他人 といざという時にはやはり隣り近所

である。

大取りよつか小取り 高のぞみをするな。

夏の夕焼舟つなげ秋の夕やけ鎌をとげ 夏の台風と秋の取入れ。

痛快な警句

ポッケモン娑婆じゃ止まらじ地獄づい

走しいながい片手で閻魔どんぬ呼び寄せ (携帯電話)

結びに

いろいろと私なりに列記してみましたが、この地方の方言の語彙の多さ、表現の多様さに驚いています。薩摩の土地に生き

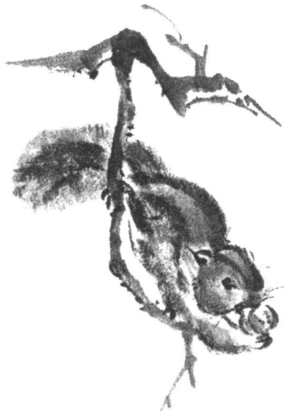


づいた特異な言葉が、徳川幕府の隠密が探索や暗躍したにも拘わらず遂に帰る事もなく、彼等をして「薩摩飛脚」の名で恐れられた事もうなずけます。

紙面の都合もあり説明不足になった面もありますが許容して戴きたいと思えます。

今こゝに改めて先人達が辿って来られた今昔を懐かしく思いながら後世に語りつがんとするものです。稿を終るにあたり各古老、先賢諸氏のアドバイス等、また今はなき市園先生の方言集など参考にさせていただいた事に深く感謝致すものです。

筆者山元昭平氏は本会の創立メンバーの一人で、本誌の編集委員としても活躍されましたが、病魔に冒され本年二月不帰の人となられました。本稿は氏の絶筆となりました。ここに謹んで御冥福をお祈りします。(編集部)



## 森づくりの光と影

宮崎市 坂元守雄

やまに木を植えた日

雲が乱れながら東の方へ流れ、時々肌寒い風がやまの斜面を吹き過ぎていきます。整地された斜面には、色とりどりの服装の人たちが、木を植えるのに余念がありません。そして、その中から子供のかん高い声や大人の笑い声が聞こえてきます。夫婦で黙々と木を植えている人がいます。カラフルな服装が目立つ中年女性の一団もいます。小学生を中心にしたにぎやかな家族総出のグループもいます。山楾を軽々と使いながら手慣れた要領で植えている元気なご老体の姿もあります。下は四、五歳から上は八〇歳を越える人まで、百二十人ほどの人たちが、一ヘクタールのやまの斜面に、カシ



1997年3月

やタブ、クスなどの広葉樹二千本を植樹した時の風景です。

四年前の一九九七年三月初めのことでした。場所は国道一〇号線の高岡町山下から林道を境川に沿って約七キロ入った、高岡町と山之口町の町境にある国有林です。そこは、周囲の杉林道を伐採したときの集材所が在ったところで、車なら三〇台ぐらいが駐車できる広場があります。広場から東が斜面になっていて、私たちが植樹した一ヘクタールの土地があります。さらに下の方は深い照葉樹の森になっていて、境川の谷に達します。つまり、この広場から東の方を眺めると、深い照葉樹林帯に覆われた境川の谷を挟んで、田野町の野崎の集落が遠く望まれ、その背後に高房台のなだらかな高地が南の方から北の方に連なっている眺望に恵まれた場所なのです。植樹地を探るとき、営林署（現森林管理署）の人の案内で三カ所の伐採地を見ましたが、この場所の景色の良いことと広場があることから、仲間たちはみんな一致してこの地を希望したのでした。そして、国有林一ヘクタールを期間八〇年間、七対三の分収契約を熊本営林局（現九州森林管理局）とグループで結びました。

何年も前から準備計画はしてきたものの、所詮は素人集団の森づくりです。土地の確保で計画は一步前に進められましたが、

木を誰が植えるのか全く見当つきません。グループの会員だけでは頼りになりません。一般に広く呼びかけて、ボランティア活動として実施するほかはないのです。しかし、ボランティア活動であるからこそ参加人数を予測することは難しく、当日にならないと参加する人数が掴めないなかで計画を進めなければならぬのです。時々心配性が頭をもちあげ、その日の朝になってみたら顔を見せたのはグループの役員数人だけということになるかもしれない、と思うこともありました。

当日にならないとどうなるか分からない当日がやってきて、植樹は予想以上の人数で計画どおりの行事を進めることができました。うれしかったのは、百二十人も人が自ら参加して下さったことですが、なかでも、宮崎営林署（現宮崎森林管理署）の署長さん初め職員の方々が予告なしに総出で参加して下さいたことです。そのうえ、植樹についての注意点をみんなに教えて下さったことです。植樹の専門家が総出なのですから心強いことこのうえなしです。土地の大部分にイチイガシ、タブ、クスの照葉樹を植え、広場に近い土地の周りにヤマザクラとヤマモミジを少し植えました。二千本の植樹が終わり、私たちの森づくり計画はようやく幕を開けることになったのです。

## 水は森からという発想

私たちは、十年ほど前から宮崎市の飲み水とその原水である大淀川の水について、勉強や浄化への活動を続けています。活動の主体になっているのはグループの役員十数人ですが、その活動を現在約二百人ほどの会員が支えています。

宮崎市の飲み水は、その九五％を大淀川の表流水を原水としていますので、飲み水の水質は大淀川の水質に大きく左右されます。とくに大淀川は宮崎市から見た場合、上流には人口四万人の小林市、十三万人の都城市をはじめ、合わせて約三十万人の人々が住んでいます。それに西諸、北諸は全国有数の畜産振興地域です。およそ十五万頭の牛、四十二万頭の豚、一千万羽の鶏が飼育されています。これら流域の人や家畜による生活排水や畜産排水は必然的に大淀川の水質を悪化させています。川の汚濁原因は、他にもいろいろあります。工場からの排水やごみの最終処分場からの排水なども考えられます。それらが宮崎市の飲み水の原水ですが、それを飲み水にするために、浄水場で現在許容される高度な技術を駆使して浄化に努めても、原水の水質の影響を受けざるをえないのが現状です。

私たちはこれまで、宮崎市の飲み水の安全性の確保と大淀川

の水質向上についてさまざまな活動を続けてきました。結果的に見れば、評価できる点もあり、無力な活動もありました。これからも現状が好転しない限り現在の活動を続けていかざるを得ないものと思っています。

私たちの活動計画の中に、森づくりへのアプローチが組み込まれたのは、植樹を実現した四年も前のことでした。グループで自主映画「あらかわ」を上映したのがきっかけでした。その映画は、東京都の水道原水のひとつである荒川の水質が、上流の森を伐採したことが原因で悪くなったという経緯をドキュメンタリー映画としてまとめたものでした。

私たちは、大淀川はどうかという疑問をもちました。それまで飲み水や川へ注いできた目を広げ山や森も見つめてみようということになりました。営林署にお願ひして、国有林の現状について二回話を聞きました。大淀川流域の国有林も案内してもらい現状をよく知ることができました。県庁にも行って、県内民有林の現状や課題を教えてください、貰った資料でみんな勉強したりしました。水と森の勉強をしながら現地観察を三年ばかり続けました。そして、大淀川の水質の悪化は、荒川と全く同様に、流域の森が荒廃していることが大きく影響し

ていることを確認しました。とくにスギの人工林では、植えたままその後全く手入れをしていない森林が多いこと、それらの森林は林内が暗く、非常に乾燥していることを知りました。森のはたらしは私たちが計り知れないほど多様性に富み、私たち人間の生活にとってかけがえのないものですが、荒れたままのスギやヒノキの人工林は私たちにとって森林としての大事なはたらしをしていないのではないか、いやしていない、ということとをみんなで話して、疑問をもったり結論づけたりしました。

私たちは、流域の森をいきいきとしたものに回復させない限り、大淀川の水質は良くならないと考えるようになりました。

いきいきした森への回復活動は、非力な素人集団である私たちにとって、途方もなく遠大なものですが、みんな明るい気持ちで行動しました。熊本営林局へ陳情に行ったときは、局長とも話したいというと、担当課長はいやがりましたが、局長の意思で面会が実現し、人工林の荒廃を解消することや自然林を伐採しないことなどを親しく話す得難い機会をもつことができました。宮崎市では市議会に、上流域の森づくりのために市の資金を投入するよう求める請願書を提出しました。一方では、自分たちでも手を汚し、汗を流して森づくりをすべきだということ

になり、森づくり構想を具体化するようになったのです。

#### 宮崎県の森林実態

ここでひと通り、宮崎県における森林の実情について見ておきたいと思います。数字が並び混乱しそうですが、おおまかにも理解しておくことが大事なことと思われまます。

宮崎県の総面積は七十七万ヘクタールです。そのうち森林面積は五十九万ヘクタールで、森林の割合は七十六パーセントです。宮崎県の土地の四分の三が森林だということにあらためて驚かされます。そして、宮崎県が森林県といわれる理由も理解されます。

五十九万ヘクタールの森林のうち、自然林が二十三万ヘクタール、人工林が三十六万ヘクタールです。人工林率は六十一パーセントになります。自然林はこの土地の自然植生が発達したもので、シイ、カシなどの照葉樹林、高地のモミ、ツガ林、ブナ、ミズナラ林などが自然林の大部分を占めています。人工林は、スギ、ヒノキ、クヌギなどですが、とくに宮崎県ではスギの割合が高く、スギの生産県と言われるほどです。

森林の四割弱を占める自然林は、近年、人の環境に与える影

響が重視されるようになり、見直しの機運が高まりつつありますが、宮崎県の場合、そのほとんどは虫食い状態で伐採されており、四割近く残されているとはいっても、まとまって残っているところは綾や境川流域、白岩山など数カ所に過ぎません。

三十六万ヘクタールのスギ、ヒノキ林は、私たちの調査で、その半数にあたるおよそ十五万ヘクタールが、植えてから手入れが行き届いていない、いわゆる荒廃林になっていることがわかりました。つまり宮崎県の森林のうちの十五万ヘクタールが、経済林としても環境保全林としても、その機能を果たしていないということなのです。

大淀川流域の森林を見ますと、森林面積十六万ヘクタールのうち、自然林五万ヘクタール、人工林十一万ヘクタールで、人工林率は七十パーセントです。人工林十一万ヘクタールのうち、およそ五万ヘクタールのスギ林、ヒノキ林が植えたまま放置された状態になっています。大淀川流域の人工林率が高いため、荒廃林の割合も高く、宮崎県全体の三分の一を占めます。

私たちは、宮崎県内の十五万ヘクタール、大淀川流域の五万ヘクタールの荒れたままの森林は、なんとしてもいきいきとした森林に回復させねばならないものと考えています。それは地

域の荒廃であり、木の文化の衰退であり、地球環境にまで影響を及ぼす環境の悪化であるからです。人心の荒廃や自然との共生観の喪失にもつながると考えています。

### 森づくりの障害

宮崎県の森林だけでなく日本の森林が全体的に荒廃し、林業が衰退した最も大きな原因のひとつは、木材の販売価格と生産費用とのバランス、つまり採算がとれなくなったことがあげられます。山の労働力が都市型産業へ移動したことや地方と都市の所得格差が大きくなったこともあります。そのため山で働いたり、林業に携わる人が少なくなったことです。それらはほかのいろいろな要因と関連しながら悪循環し、森の再生や林業の振興を阻害しています。政策的にも将来への展望や抜本的対策が示されないことも森林の再生が実現しない要因と考えられます。

ここでは一般的問題は別にして、私たちが進めた一ヘクタールの森づくりでの課題を述べ、森の再生の問題を考えてみたいと思います。

私たちが森づくりを計画したときの第一の課題は、森づくり

の費用はいくらいるのかということでした。森林組合に何回か出向きいろいろ教えてもらいました。伐採地に植樹して木を育てる場合の主な費用は、まず地ごしらえ、これは専門家でないとできません。植樹するときの苗代、植樹後の五年間ばかり続けなければならぬ下草刈りの費用、木が生長してからの間伐や除伐の費用などです。細かな計算をして結果的に、植樹や草刈りはできるだけ自分たちで実施して費用を抑えても、一ヘクタール当たり三百万円が必要とわかりました。この金額を知って仲間たちはみんな驚き、そして愕然としました。その費用をどのようにして調達できるのかという心配をしたからに違いないのです。その後、森づくりの作業には申請すれば国から補助金が支出されることもわかり、結局一ヘクタールの森を作り育てる最低必要費は二百万円であることがわかりました。そうすると次の難題は二百万円の調達です。自主的に勝手な活動をしているグループに資金の余裕などありません。金を持っていないからボランティア活動をしているのです。まとまった資金調達は募金に頼るほかないのです。

私たちは、二百万円の募金計画をたて、個人や団体をお願いすることにしました。宮崎市の繁華街の通りに立ち何回か募金

の呼びかけもしました。昼間だったり夜だったりする団体の集會に出向き、森づくりの計画を説明し募金を依頼しました。植樹をした前年の七月から十二月までの多忙な五ヵ月間でした。そして千人以上の個人と五十を越す団体の協力で、目標の二百万円の募金を達成することができました。

私たちが募金活動をする中で、深刻な問題として話題にしたことがあります。それは、森づくりが一ヘクタール当たり二百万円必要だとすれば、私たちが最も心配している荒廃林の再生にはいくら必要かということでした。私たちの試算では、宮崎県全体で十五万ヘクタールと見ていますから、単純計算で三千億円です。大淀川流域では五万ヘクタールと見ていますから一千億円です。言い方を変えれば、これ程の森林価値が無駄に放置されているとも言えます。

#### 五万分の一の森

私たちが一ヘクタールのやまに木を植えてから四年が過ぎました。植樹したとき、私たちはその土地を「わくわくの森」と名付けました。安全な飲み水がわく森、清浄な川の水がわく森、気持ちがあがる森という意味付けです。

木を植えてからまもなく、数十本の苗木が計ったような高さで切断されるというトラブルがありました。森林組合の人に見てもらったところ、野うさぎのしわざだといわれました。イチイガシは苗木の全てが葉を落としてしまい全滅かと思ったりしましたが、これも森林組合の人からイチイガシの習性だということを知り、新たな芽吹きを待つことにしました。

木を植えたら手入れを怠らないようにしなければなりません。まず草刈りです。草刈りといっても素人ボランティア集団による草刈りです。これも当日にならないと何人見えるのかわからないのです。中には、やまの空気を吸うために連れ立って参加する人もいます。子供を連れてくる人もいます。目的は草刈りではなさそうなのです。それでもボランティア集団の良さで、みんな大歓迎なのです。

草刈りは毎年七月と九月に行っています。最初の草刈りのときは、苗木は草の中に隠れていました。梅雨明けの暑い日で、鎌



2001年7月

での草刈りははかどりませんでした。鎌を使った経験のない人がたくさんいました。注意はしていましたが蜂に刺された人もいました。てんやわんやの最初の草刈りでした。刈り残しは森林組合に依頼することになりました。

今年七月、八回目の草刈りをしました。八回目ともなると常連は慣れた鎌さばきです。今では草刈り機も五台保有して威力を発揮し、参加人員の多さや草の繁茂が少なくなったことでもあります。半日で一ヘクタールの森の草刈りを終わらせることができるようになりました。

私たちは一ヘクタールの土地に二千本の広葉樹を植えました。その土地に二年目からいろいろな木が芽を出してくるようになりました。もともと国有のスギ林であったのですが、植えた後の手入れが行き届かなかったため林内にさまざまな樹種が成長し、実際は広葉樹とスギが半々ぐらいではなかったのかと、隣の国有林の姿を見て想像します。伐採後、それらの樹種がまず芽を出してきたのだと思われれます。シイが一番多いのですが、カシやイスノキ、ホルトノキ、ヤマモモ、クロガネモチ、カゴノキなどの照葉樹のほかムクロジ、エノキ、センダンなどのめずらしい落葉樹などを含め今ではその数五〇種類ばかりが成長

しています。そのように自然に生きてきた木は、成長力も旺盛で、背丈の伸びも枝の伸び具合も植樹木より早く、今年七月ではシイの高さは六メートルにもなっています。植樹木も五メートルになっていいるのもありますから、もう植樹したときの状況を思い出すのも難しくなっています。木が伸びるにしたがい草の伸びが弱くなってきています。これからは植樹木と自然に伸びてきた木が競争しながら森の姿を形づくっていくのだろうと思われます。私たちは、これからの木々の成長を見ながら、どの木を育てどのような森にしていくのかを考えながら、楽しく森づくりを進めていくことにしています。

私たちの森づくりはわずか一ヘクタールです。大淀川流域で再生を図るべき森林の五万分の一です。五万分の一のために二百万円もの金を使って森をつくること自体ナンセンス、という人がいます。素人集団が森をつくるという頭デッカチな行為は現実には何の価値もない、という人もいます。私たちもそのような悲観的な考えや傍観的な言葉を無視してはいません。直接その人たちと話ができるといいのにも思いますが。

わたしたちの森づくりの意思はただひとつ、荒れた森をこのままにしておいてはいけない、という思いだけです。そのため

にできるだけのことを考え、行動するというだけです。荒れた森を放置してよいはずはないのです。いつかはみんなで負担して森の再生を図らなければならない時期が必ず来ると思っています。私たちの森づくりはそのための一歩だと思っています。私たちは今第二の森づくり計画に着手しているところです。

(二〇〇二年八月)





# 事務局便り

## △二〇二一年の歩み▽

本会創立以来、理事・編集委員として、また名世話役としてご尽力戴いた山本昭平氏が平成十三年二月二十六日、御家族の手厚い看護の甲斐もなくご逝去なされました。会員一同心からご冥福をお祈りいたします。

本年度の総会は桜満開の城山公園で三十余名の参集を得て開催しました。本年は、庄内地区の各公民館館長さん方も会員になって出席戴き、大変心強くうれしく思いました。

総会終了後、ささやかなご馳走を囲み、あちこちに残る史跡の話や従来から実施している稚児桜の草刈り作業、年二回の史跡探訪、「庄内」の刊行など、細くとも永く続けていくことを確認しあって閉会しました。

## ※稚児ざくら公園の草刈作業、本年も実施

例年行なっている稚児ざくら公園の草刈りを本年も実施しました。

朝九時より約一時間半程度心地よい汗を流した後、恒例のお

茶飲み会を楽しみました。

ご承知の通り稚児ざくらに建てられている記念碑は未完成ですが、来年度は何とか完成しそうです。これからも会員の皆さんのご協力をよろしく願います。

## ※宮日新聞に掲載

平成十三年八月三十一日の宮日新聞に本会のご紹介されました。新聞でこのように広く報道され、増々私たちが『庄内の昔を語る会』の重責を痛感いたしました。どうぞ今後とも皆様のご指導、ご力添えよろしくお願いたします。

## ※「宮崎庄内会」の総会に

### 出席

庄内出身宮崎在住者で結成されている「宮崎庄内会」

## 史実を発掘、収録

### 昔を語る会

「子や孫に語り伝ふる」と「族、青春をたぎらして

庄内地区の歴史に触れ、先人のまじりごときで、同地区に関する史料を蒐めたい」と文筆を志すのほどで活動を続けているのが発足していることか  
（庄内昔を語る会）ら、史蹟編さんにも難を  
（坂井館長、五十二）様もある、それも踏まえて  
人。郷土史に傾き、庄内伝を含めて史実の発掘、  
歴史の記録、語り部や、収録に努めている。  
「郷土史」の趣向も、同会副館長の山本謙二  
を重んじている。

（二）年刊雑誌、地元や城（三）で自前立などのま  
外の手探しの年刊雑誌「庄内」を「異地」から見  
臨、購買や研究発表の場を、菓子野美和子さん  
も脱いでいるが、主眼（三）は「歴史」の発展を  
業とついでいるが年刊「うさぎ」も、多く  
会誌「庄内」の刊行である資料が集まってい  
る。同誌は既に十二号をた、誌「庄内」の  
致意、百二十号前後は「編集」がすすんで  
B5判。同誌では史料も大事に事なきが、  
編、町情、随想に加えては「ついで」



「庄内の昔を語る会」刊行の会誌「庄内」12号



十一月の第12号発行  
へ向けて編集作業が進ん  
でいる。

「庄内の昔を語る会」の活動を「ついで」刊行の会誌「庄内」12号

では年一回定例総会が開かれますが、この総会には私たちの会の代表も出席させてもらっています。

かねてから「宮崎庄内会」のかたがたには会誌「庄内」を愛読して戴き、また販売の方も大変お世話になっております。ありがたいことです。

私たち編集部も充実した会誌を発行するようがんばりたいと思っておりますので、今後ともよろしくお願いします。

(帖佐)

## 西岳地区史跡探訪記

町 区 山 下 謙二郎

「庄内の昔を語る会」の史跡探訪は、ここしばらく他市町の史跡巡りであった。しかし今年は、「近くを回って温泉にでもつかったりしようか」ということで、西岳地区になった。

九月二十日午前九時、全員二十六名を乗せたバスは出発した。皆さんなじみの地区なのでリラックス・ムードである。バスの

中で「西岳」の地名の由来などの説明となる。島津荘の東にある鰐塚山系の「東岳」に対して、西の霧島連山を「西岳」と呼んでいたであろう。その裾野にある村が「西岳村」である。

西岳地区内においても、打製石器、縄文土器、土師器などの破片が発見されている。だから縄文時代から集落があったと考えられる。また、ここは霧島（高千穂の峰）の麓にあるところから、山岳信仰（霧島信仰）に関係する寺社や遺跡が多い。

最初に立ち寄った所は千足神社せだしである。県道より右（北側）に入り坂道を上って行くと台地に出る。道路脇に鳥居が立ち、そこをくぐると周りを木々に囲まれて、広々とした境内がある。その奥に山を背負って社殿が建っている。

もとは「千多羅寺権現」とか「世足志権現」と称していたという。「権現」とは、仏・菩薩の「権（かり）の姿」ということであるから、天台宗の僧・性空（しょうくう）上人創建、再興した寺社の流れをくむものであろう。祭神を「ニギノミコト」ほか五尊として、「千足神社」と改めたのは明治初年のことである。これも、明治元年三月に出された神仏分離令に始まる祭政一致・廃仏毀釈運動の全国的な展開の中で行われたものである。それまでは神仏混合信仰であり、地域にあった多くの信仰の対象となっていた祀・社の祭神は阿弥陀とか菩薩となっ

ていた。しかし、祭政一致（天皇神格化）のために仏教を分離し、神話の中の神々を祭神としたのである。

さて、ここには鎌倉時代から江戸時代にかけての神像がある。中でも女神像一体と男神像三体は鎌倉時代の作と言われ、県北の高千穂神社の神像とともに優れた作品だと言われている。この神像四体は県指定重要文化財となっている。しかし、残念ながらこれらは拝むことができなかった。

神社向かって右手には、天正十七（一五八九）年と銘の入った供養塔があり、その脇に五輪塔の頭の部分の残欠がごろがっていた。私は何となくこんな古石塔に心引かれるのである。その他、「日露戦役の碑」や「忠霊塔」があった。

高野の町を過ぎて霧島へと曲がりくねった坂を上って行くと道の左側に「スッコントン」と標示してある。そこで下車し、下るとすぐに岩の間を流れる溪流がある。関之尾滝の甌穴のミニ版といったところか。千足川の溪流によって、熔岩が削られて出来た溪谷である。西岳村時代から景勝地として親しまれて来たと言う。夏には、岩の上でビールを飲みながら、焼き肉などをして楽しんでみたいところである。「スッコントン」のいわれは不明だと言う。

田野、吉之元、山神橋を過ぎて行くと右手の視界が開け、高

千穂の峰が見えてくる。狭い道を右に折れて田の間を行った突き当たりが、明観寺跡である。霧島山金剛院明観寺（本尊は不動明王）といい、応和三年（九六三）性空上人が荒嶽権現（荒武神社）とともに同じ場所に別当寺として創建したと伝えられている。霧島山の南門という。今は藪に覆われて、中に入っていくのは困難である。それでも藪をかきわけ入ってみる。あちこちに古石塔がある。不動明王座像がある。火焰光背の右上部は欠けているが、体の部分は浸食もなくしっかりした彫りである。背面に「○歴七年○十一月二十八日。奉造立不動明一体大隅加治木住施行 石工 市木新五兵衛 後藤伊左衛門 不動堂住人 黒木彦右衛門」とある。恐らく「宝暦七年丁丑」であろう。二百四十年程前のものである。

明観寺の御神体は高千穂の峰に建っている御鉾の折刃と伝えられている。明観寺と荒嶽権現は火災によって一時焼失するが、正徳元年（一七一）頃藩命によって天台宗僧智空が現在地に再興した。都城領で唯一の藩直轄寺として藩から支給される禄高は三十八石四斗で、藩の寺二百二寺の中で六十三番目の寺禄である。年老いた智空は宝暦七年（一七五七）火中に身を投じて火定（かじょう）した。

廃仏毀釈で廃寺になったが、その跡地に写経供養塔や智空火

定供養塔、歴代住職僧墓石塔がある。幕末、薩摩藩のお家騒動（お由良騒動）で

荒嶽権現社  
不動堂  
明観寺

八田知紀が一時この寺に預けられていたと言う。しかし、今は草が生い茂り、跡地まで行くのは困難である。誰でもが行けるように、遺跡などが分かるように、早く整備して欲しいものである。



「三国名勝図会」を頭に描きながらあたりを眺めると、当時の壮大な寺院を想像することができる。

この後のスケジュールはグリーンヒルでの入浴と昼食になっていたが、予定より時間が早いので、運転手さんの才覚により高千穂牧場に連絡、交渉されていて、そちらへ行くことになる。特別の計らいで中のほうまで車を乗り入れることができ、大助かりである。広大な敷地に家畜が飼われ、眺望もすばらしい。ここからグリーンヒルまでロープウェイを張り渡すという計画もあるとか聞くが、それは考え物である。これ以上自然を壊し

てもらいたくないし、眺望の妨げにもなる。自然との共生が大車である。

グリーンヒルの入り口は何とも狭い。まさにネックである。広間に落ち着くと、それぞれ温泉に入る。気持ちのいい温泉である。露天風呂で温まった体を外の風に当てながら、下に広がるながめはすばらしい。

ビールで乾杯、そして昼食である。思い思いに箸を動かしながら、互いに焼酎を酌み交わしながら話が弾む。楽しいひとときである。

帰りは、都城焼きの窯元に立ち寄ってみる。焼き物を眺めたり、お土産を買ったりであった。

かつては同じ荘内であり、今も関係の深い西岳であるのだが、私などは、表面から見ただけであって、西岳の具体的な事は何も分かっていなかった。この史跡探訪はその西岳を知るきっかけを作ってもらい大変ありがたかった。

# 史跡探訪

## 西都原古墳群 法華嶽薬師寺

西区 菓子野 美和子

二月十六日（金）庄内地区公民館主催「庄内地区ライフセミナー」が実施される。「庄内の昔を語る会」もこれに参加する。探訪経路は、庄内出発（九時）→西都原古墳群→民族資料館（昼食）→古墳群遺構保存覆屋→法華岳薬師寺→庄内帰着（四時三十分）。参加者は二十五名。

心配されていたお天気も、当日はよい天気で、役員の方々のお骨折りの資料や、館長さん方のさし入れもあって、遠足に行く様な楽しい気分になる。車中にて資料をもとにしての研修があり、一路西都原古墳群に向う。

西都原古墳群→一ッ瀬川右岸の標高六十米の洪積台地に位置し、前方後円墳31基。方墳1基。円墳279基。地下式横穴10基、横穴墓12基、右を見ても左を見ても古墳が群集している。この筑成年代は、四世紀代から七世紀前半に位置づけられているそうだ。古墳と自然が調和した草原の古墳群だ。整備が進んだ特別史跡を見て新しい息吹きを感じた。

鬼の窟いいわ—鬼の窟でバスを降りる。唯一横穴式石室を持ち、全国的にも稀な周囲に土塁を巡らせ、二段築成の円墳で、墳丘径約37米の規模を有している。石室は大きな岩石によって構築され、天井石は畳三枚程の大きな石を使っている。昭和十八年頃、私はここを見学したが、その当時からすると昔日の面影もなく驚く程よく整備され復元されていた。コノハナサクヤ姫を嫁にと請う悪鬼が、父親の大山祇命おおやまのみことの所望により一夜で石造りの館を完成させた窟だと神話では伝承されているが、壮大な太古のロマンに胸がおどる。上下左右、皆巨石でこれを築いているが、いったいどこから運んで来たのだろう。首長墓と考えられる



が、権力の象徴として造られたものであろう。鬼の窟の前で全員記念撮影。

### 男狭穂塚、女狭穂塚

ボランティアの方の説明を聞く。九州最大級の古墳で、他の墳墓を圧倒するほどの規模をもっている。相当の有力な豪族がいたのだろう。こんもりと繁った森の中に、見つめあうような男狭穂塚（全長二四九・一米、高さ一九・一米）と女狭穂塚（全長二二・八米、高さ一四・六米）。ニニギノ尊、コノハナサクヤ姫の御陵と伝えられている。五世紀前半の古墳で、宮内庁の管理下であり立ち入ることは出来ない。ふたつの古墳には、ロマンチックな伝説が数多く残されているが、今はただ静かな眠りを続け、ひっそりとしている。

### 西都原資料館（考古資料展示室・民俗資料展示室）

説明されるボランティアの先生が変られ、古墳時代の暮しや、文化を説明してくださる。資料館が半地下式構造になっていたのが面白い。子持家形はにわ、船方にはわは重要文化財である。西都原古墳群の首長がこの船に乗って、ヤマト王権の畿内地方にわたったのか、又子持家形植輪は首長の居館の建物を表現したものでしょうか？と古代日向にタイムスリップする。三角縁三神三獸鏡。武器（鉄劍、刀子<sup>とらす</sup>、あぶみ、甲冑）装身具（鏡、勾

玉、管玉、ガラス小玉）など、当時の豪族の権威・技術の高さがうかがえた。

### 西都原古代生活体験館

昼食を体験館の庭に設けたが、突風で弁当も吹き飛ばされる始末。体験館の御好意で館内でいたゞくことになり、御世話になった。平成九年設立され、多くの体験者でにぎわっているうだ。国民の関心が変化したので、これに対応するため、遺跡の保存から活用へ視点をうつしているとか。土に触れ、丁寧にひとすじひとすじを描きながら、いつのまにか古代のひとときに埋没する不思議な体験をし、古代の芸術家に身をおいてみるねらいの様だ。スライドを見せてもらい、丁寧なおもてなしを受けた。

### 西都原古墳群遺構保存覆屋（酒元ノ上横穴墓群）

平成六年の発掘調査により発見された酒元ノ上横穴墓群は、現在十基の墓道に六つの玄室、二重の溝をもつ円墳で、七世紀はじめくらいの時期が考えられているそうだ。鬼の窟の近くにあり、両者の関係は深かったのではと思われる。中国の西安にある兵馬俑を思い出した。秦の始皇帝の軍団が、大きなドームの中に観光客から見えるように、発掘し保存されていたが、それとよく似た発想だと思った。地下式横穴墓は確認されていた

が、横穴墓の存在が確認されたのは、初めてだとのこと。一・二・六号墓道の三つの玄室を見学した。特に六号墓道は、奥壁と側壁に玄室があり、側壁の玄室に埋葬された人の骨が残っていた。今から千四百年前の熟年女性の人骨とか、頭蓋骨の部分には須恵器があり、枕のかわりにされていたという。薄暗い中でそれを見ようと目をこらしてみつめた。施設内は天井部は杉材。ヒノキ材はデッキにとり入れ、スプリングラーが設置されていた。自然環境を視野に入れ周辺景観との調和を考えて屋根は緑化システム。文化保存費は二億五千万円とか。貴重な文化財。考古学上の価値を正しく理解しなければと思った。

千数百年前につくられた無数に息づいている古墳群に別れをつける時が来た。その古墳の大部分はまだまだ発掘されないまま多くの古代の謎を秘めて眠り続けているのだ。

宮崎県は神話で名高い日向の国である。「古事記」「日本書紀」などにいわゆる天孫降臨の地とされ、天孫ニニギノミコト以来三代の神は日向に都を置かれ、神武天皇のときに東征して大和の国に移られたという神話で私は育った。今日から見ればおかしなことであるが、終戦前までは歴史的事実と信じられ、国家権力も又これを支援していた。神話と古墳の関係に興味湧いてくる。又「魏志倭人伝」にある邪馬台国の所在について諸説

があるが、九州説をとる場合、九州における最大の古墳を有し、又最も多くの古墳を有する宮崎県を無視することは出来ない。郷土の歴史は奥深く、ロマンに満ちている。このたびの西都原古墳群の探訪は、歴史的遺産を多く所蔵している庄内に在住する一人として、地域の文化の保持と伝承、又、史跡の顕彰を図る努力が必要と感じた。

#### 法華岳薬師寺

古墳群をあとにして、法華岳薬師寺に向う。海拔二八〇米の山頂は生憎の雪が舞い出した。建立は大同三年（八〇八）平安朝初期。伝教大師が薬師如来の尊像を自ら彫刻安置し、一字を建立し、法華経十万部を寢食を忘れて読誦したのが始まりで、霊験あらたかな日本三大薬師寺の一つとして栄えた。県指定文化財として、仏像・須弥壇・什器などがある。平安中期の和泉式部の伝説がある。

伊東家の庇護を受けて栄えたが、南北朝の戦乱に巻き込まれ、戦火を受けた。伊東義祐の豊後落ちの時、僧侶四十名が薩摩兵によって殺された。二人は鼻削ぎの刑で追放された。武に於ては抵抗のすべも知らぬ僧侶の血潮が山を朱に染めたという。その後伊東家に取って替った島津家が、伊東家時代に勝る大寺院を建立し、島津家の厚い庇護を受け、日向の大寺院として栄華

を極めた。宮崎城主上井寛兼日記に、「天正十一年閏正月十九日の条上井寛兼、島津義久病氣平癒のため、法華嶽薬師寺へ参籠す」と残されている。薬師寺歴代墓地には、歴代和尚の石塔群が並び立ち、霊験あらたかな日本三大薬師寺として、近郷にその威光をはなっていたのである。

幕末の動乱に、一番先に倒幕旗揚げをした薩摩藩では、廃仏毀釈の破壊活動はことに激しく、寺院は宗派を問わず打ち砕かれ焼き討ちされた。薬師寺もその例外ではなく、壊滅した。本尊は和尚の咄嗟の機転で洞窟に隠され難を逃れた。江戸時代には、島津七十五万石の歴代の藩主がきらびやかな供揃えで、一家一門の武運長久と繁栄を祈祷していたという。読経の唱題が一山に響き渡ったことだろう。仏殿、拝殿、客殿、天井、戸板壁に至るまで、金箔漆が施こされ、黄金の輝く寺院であったという。時は流れ明治となり、島津家との縁がきれると、本堂の荒廃はなすすべもなく、戸は破れ、天井に穴があき、夜の星が見える荒れ果てた寺となった。

幾屋霜、時は移ったが、人々の信心は篤く絶える事なく、町民の熱意で再建され、法華岳自然公園として、スキー場が建設され、リフトの運行や、様々の施設が施され、近年様変わりして訪れる人々で賑わいを見せている。又荒れ果てていた裏の竹

藪が切り開かれ、枯れ山水の日本庭園が造成され、春に菜の花、秋にコスモスが咲き乱れ、訪れる参拝者の目を楽ませる山に変化した。

この日は、訪れる人もなく、古木が生い茂り静寂。境内に点在する石塔が当時の名残りを留めていた。有為転変は世のならば常に時の支配者の興亡と共に、栄枯盛衰は繰り返されるのだから法華岳薬師寺の佇まいは、昔も今も変わる事なく、千古の時を刻んでいた。

この歴史探訪は、ふるさとを見つめ、故郷を知り、ふるさと  
の大事な古い文化遺産をどう守るかを教えられた。このような  
企画立案していただき、感謝します。





# 「庄内」総目次

創刊号（平成元年発行）

過去二年間の歩み	編集部	1
庄内歴史年表	東区 坂元 徳郎	2
特別寄稿		
鬼県令三島通庸	妻ヶ丘 瀬戸山計佐儀	11
生い立ちと福島事件を中心に		
研究		
庄内史跡探訪	東区 坂元 徳郎	17
坂元源兵衛翁の陶像・前田用水路取入れ口・関之尾馬頭観		
音・北郷資忠の館跡・稚児桜・金石城跡・願心寺・山久院		
跡・釣璜院跡・仮屋跡・南洲神社・安永城跡		
庄内の石仏、石碑、講について	町区 山元 昭平	27
田の神*今屋・平田・関之尾・乙房		
その他*首なし地藏・南崎家の六地藏・東区のイボ神		
馬頭観音*関之尾、平田、乙房、宮島、今屋、東区、西区		
石碑*庄内村道路原標・西区の水分神・八坂神社の道路改		
追憶		
我れ満洲に生きて	東区 黒木 聖	59
軍隊生活 終戦 捕虜生活		
心のふるさと（庄内小の思い出）	鷹尾 岩佐 フヂ	65
平和を誓う（庄内空襲）	西区 池田 シヅ	70
太陽さまに向かって生きた人生	西区 池田 シヅ	74
詩・短歌		
庄内之乱行	妻ヶ丘 瀬戸山幽畝	81
交流		
植木町郷土史家中村稲男氏より東野孝之丞の事	郷土史家 児玉 三郎氏	55
けごと安永城の話	郷土史家 瀬戸山計佐儀氏	53
講演のあらまし	編集部	51
歴代村長、町長、助役、収入役一覽	西区 田中弥十郎	41
名・小字の由来・前田用水路と石	東区 片ノ坂 登	17
庄内小学校のイチイガシを中心に近辺の歴史・庄内町の字		
樹齢四百余年		
近辺の石敢当・稚児櫻の碑・稲荷石		
講*オケサ講・シンジ講・池田バチ講		

史跡探訪 ..... 町区 南崎 喜美 83

子や孫に語り伝える話

宮之原家言い伝えのこと ..... 西区 宮之原重忠 89

我が家のルーツと祖先の話

菅原神社(天神様) 由来記 ..... 東区 萩原 二郎 91

川底の土器 ..... 西区 山口 耕三 92

平田橋下流左岸から出土した縄文土器

東区カクン馬場の首なし地藏さん ..... 東区 福留 ふみ 93

かくれ念仏洞覚え書き ..... 平田 和田 吉雄 95

先輩から聞いた話 ..... 東区 鎌田 康正 96

オミケン坂の昔 豊幡神社の火の神

里寺仏壇の話 ..... 今屋 鶴島 善市 97

一門講の話・今屋の講のいわれ ..... 今屋 新地 美德 98

三体の田の神さあ ..... 今屋 鶴島 美鶴 99

田原坂で戦死した孝之丞のこと ..... 西区 塚野 民衛 100

塚野孝之丞の墓詣りのこと ..... 今屋 花盛 林 101

孝之丞の墓詣り ..... 西区 山下 尚則 102

父より聞いた昔の歌 ..... 町区 重久 政雄 104

火事場の腰巻き(由来) ..... 町区 山元 芳子 105

櫻会のこと ..... 乙房 馬籠 良孝 106

乙房に来ていた年期奉公の男達のこと

年寄りの知恵(父の訓え) ..... 西区 西俣 富子 108

乙房剣友少年団設立当時の思い出 ..... 乙房 乙丸 虎男 109

神田川堤防決壊のこと ..... 西区 伊地知義夫 110

旧制女学校時代の思い出 ..... 東区 秋永 フミ 111

ボランティア、昔と今 ..... 千草 赤崎 哲雄 113

海軍時代連合艦隊司令長官より感状を受ける

ひとつぶの飯 ..... 千草 長友 義行 114

ひもじい思い出で過ごした青春時代

廟巷鎮の話(肉弾三勇士の話) ..... 千草 永山 武義 116

支那大陸五千キロを歩く ..... 千草 長友 保 117

昭和の始め頃の夫人の活動 ..... 東区 黒木 ツミ 119

朝鮮からの引き揚げ ..... 東区 原 イツエ 121

死ぬ思いで庄内にたどり着きました

とても恐ろしかったこと(庄内空襲) ..... 東区 立山 トミ 123

終戦前後の思い出 ..... 乙房 宮田 孝行 124

編集後記 ..... 編集部 126

平成元年度 庄内の昔を語る会会員名簿 ..... 126

庄内の昔を語る会会則 ..... 128

協賛広告

江口板金工業・南崎常緑園・丸宮建設  
ふくぞき写真館・丸久建設・田中医院

## 第二号（平成二年発行）

平成元年度の歩み ..... 事務局 1

### 特別寄稿

続・庄内物語 ..... 妻ヶ丘 瀬戸山計佐儀 5

掌大の観音様など庄内の民話十六編

### 提言

旧庄内町史の編纂について ..... 庄内の昔を語る会編集部 13

庄内郷から庄内町への略史（明治二年～昭和四年） ..... 14

### 研究

庄内史跡探訪（その二） ..... 東区 坂元 徳郎 19

平田かくれ念仏洞・野牧跡・人参場・移転記念碑（上平田）

平田の「田のかんさあ」・中平田の馬頭観音・小松尾の古

戦場・熊野神社・皿良家の仏像・乙房神社・乙房田の神さ

あ・乙房馬頭観音・乙房かくれ念仏洞・護安寺（？）跡・

今屋上村の田の神さあ・今屋の馬頭観音・庄内古墳・菓子

野かくれ念仏洞・三原叢五先生の墓・宮島水路・宮島中

央権現

庄内の石碑・石仏その他 ..... 町区 山元 昭平 34

暴れ庄内川と石碑・北方多聞天王の石柱・城山の野仏様・

水分神と乙房筋益留の井堰・八坂神社・反逆の熊襲

宮島の史跡 ..... 宮島 今村 勇 43

宮島用水路のこと・中央権現のこと

### 講演のあらまし

演武と講演

演武 ..... 全国居合道連盟五段 白杵 徳光 49

講演 日本のお古武道について ..... 49

庄内の歴史（その一）、（その二） ..... 刀剣研究家 山路 徳二 49

南九州文化研究会会長 本村 英雄 50

町文化・体育情報

### 町文化・体育情報

ふるさと創生 ..... 庄内 城山創生会 55

南洲太鼓奮戦の記 ..... 南洲太鼓保存会 蒲生 宏孝 59

子どもの健やかな成長を願って ..... 庄内中学校陸上競技部 61

創意と工夫の学校教育 ..... 庄内小学校 63

命を大切にすると育てる教育の取り組み ..... 菓子野小学校 64

豊かな心を求めて ..... 乙房小学校 65

### 追憶

我れ満洲に生きて(その二)	東区	黒木	聖	69
心のふるさと(庄内小の思い出)	鷹尾町	岩佐	フヂ	76
ふるさとへの便り	宮崎市	村井	孝	80
小学校生活の思い出	葦原町	吉川	一郎	84

詩・短歌

怨深金石城	妻ヶ丘	瀬戸山計佐儀	91	
思い出の沖繩	町区	南崎	喜美	93
メタセコイアに思う	西区	池田	シヅ	94

子や孫に伝える話

菓子野原百姓一揆の話	今屋	花盛	林	97
乙房田人の苦勞話	乙房	乙丸	虎男	99
今屋の太鼓橋の話	今屋	鶴島	善市	102
戊辰の役の記録	乙房	馬籠	良孝	104
曾祖父の遺稿による都城隊の行動	千草	志々目	春海	106
私の先祖「小吉」と言う人	千草	長友	久二	107
油そめ(油搾り)の話	東区	帖佐	ミヤ	110
羊毛つむぎの話	東区	花盛	良作	112
明治の頃の学校とその周辺	東区	東	幸哉	115
小学校校地の移り変わり	東区	東	幸哉	115
庄内中学校の創設	宮島	坂元	庸	118

「カンジンゴラ」の思い出	西区	清水	省三	121
引き揚げと生活に苦しんだ人生	東区	黒木	タツヲ	124
苦勞した終戦のあの頃	関之尾	田川	正江	127
朝鮮引揚げの苦勞と町収入役としての仕事	吉田	米	(旧姓福田)	129
赤いリングに唇よせて	吉田	米	(旧姓福田)	129

満洲で迎えた終戦

国防婦人会・戦時中の婦人会活動	東区	黒木	ツミ	131
日本帝国海軍掌電通兵に任ず	吉之元町	吉田	米夫	133
勤勞動員学徒報告隊のこと	西区	清水	たつ子	135

戦争末期の女学校生活と小林中生徒の被爆

終戦前後の思い出(一)	乙房	宮田	孝行	138
「強く正しく」頑張っています	東区	立山	サダ子	139
薩摩義士	細木	行男		141

美濃の治水工事に散った薩摩藩士

読者よりの便り	149
---------	-----

付、庄内史跡地図

協賛広告

ショッピングかわくぼ・スーパー大浦・関之尾土産かめもと  
お菓子司やまもと・ミートシッブながやま・野村商店

第三号(平成三年発行)

平成二年度の歩み …………… 昔を語る会書記局 1

特別寄稿

続・庄内物語(二) …………… 瀬戸山計佐儀 4

さどます門など庄内の民話十二編

研究

庄内史跡探訪(その三) …………… 東区 坂元 徳郎 10

お軍神・三島通庸遺徳の碑・征清記念の碑・日露戦役記念

碑・日露戦争従軍者名・三原先生顕彰碑

石碑・石仏・その他(その三) …………… 町区 山元 昭平 22

庄内新郷立の事 …………… 東区 木幡 敏正 27

庄内地頭役所の構成・事業計画・道路の開通・住宅経営・

教育事業・常備隊・町内小字の由来・河川の修築

菓子野町宮島のあゆみ …………… 宮島 今村 勇 31

石が語るふるさと考 …………… 東区 片ノ坂 登 34

講演のあらまし

文化財としての古石塔等 …………… 都城市文化財専門委員

重永 卓爾 39

史跡探訪・史料収集について会員座談会 …………… 39

町文化・体育情報

庄内地区公民館活動の現状について ……………

庄内地区公民館主事 日高 寛助 42

庄内青年団の現状 …………… 団長 満永美佐男 43

子どもの健やかな成長を願って …………… 庄内中学校野球部 44

庄内青空スポーツ少年団 …………… PTA会長 大河原紀美生 47

NHK作文朗読コンクール優良賞を受けて …………… 菓子野小学校 48

豊かな心づくりをめざす白寿園訪問 …………… 乙房小学校 50

まなびや・いしとこ

庄内中・思い出のフェニックス …………… 今屋 花盛 林 52

庄内小学校「学校建設が復興の第一」 …………… 東区 帖佐 トキ 53

心のふるさと菓子野小の思い出 …………… 鷹尾 岩佐 フヂ 54

乙房小学校の思い出 …………… 早鈴町 内山 邦雄 56

追憶

我れ満洲に生きて(その三) …………… 東区 黒木 聖 58

続「三十三の足跡」 …………… 宮崎市 村井 孝 61

詩・短歌・俳句

地頭・三島通庸(漢詩) …………… 妻ヶ丘 瀬戸山幽畝 64

油照り(俳句) …………… 東区 巴 旦 杏 66

史跡探訪(短歌) …………… 町区 南崎 喜美 66

イチイガシの大木(詩) …………… 町区 池田 シヅ 67

俳句	……………	庄内俳句会	69
子や孫に語り伝える話	……………		

今平相中について(歴史と言ひ伝え)	…	乙房 黒木 重俊	72
坂元源兵衛翁の陶像について	…	町区 坂元 清景	74
庄内観瀾舎の思い出	…	東区 椋田 泉	77
庄内南洲神社	…	西区 伊地知義夫	79
八十年の歴史を誇る宮島の敬老会	…	宮島 宮島 実秋	80
乙房高齢者福祉会館について	…	乙房 乙丸 虎男	81
西諏訪融和クラブの思い出(終戦後の婦人会)	…		

「農村用」国語教科書	…	東区 黒木 ツミ	83
マルステンとシヤグマンケ	…	東京 青木 キク	85
菓子野ハナヨさんとの昔話	…	川崎 福留 ハツ	87
私が子供の頃聞いた話(その一)	…	西区 菓子野美和子	88
庄内の伝説と昔話三編	…	宮崎市 長友 莊二	90
庄内小空爆の日	…	都原町 橋口 利光	91
残念至極な思い出(その一)	…	町区 徳永 幸男	93
ポツダム宣言の恐怖と生地獄	…		
敵機に命中す	…	吉之元町 吉田 米夫	94
私の歩んだ道(その一)	…	平田 和田 盛行	95

チャンピオンになりたくて	……………	乙房 乙丸 幸一	96
ボクサー生活の思い出	……………		

遊、遊庄内川 元気づくり委員会	…	西区 蒲生 宏孝	97
バラすけ 昔の魚獲り	…	平田 浜田 義武	98
枅(ます) 昔の秤のこと	…	川崎 前畑 文利	99
暮らしの知恵	…	宮島 川畑 真理	100
やけど・傷の特効薬・葉草(アロエ・イチジク・ウコン)	…		
読者よりの便り	……………		
協賛広告	……………		

霧島酒造(株)・徳石石油店・陶器のヤマモト・庄内病院			
リカーショップいまむら・山下写真館・川畑整骨院			
宮崎銀行庄内支店・都城農協庄内支所・都城マルキガス(株)			
<b>第四号(平成四年発行) 特集 あの日、あの時</b>			
平成三年度の歩み	……………	書記局	1
特別寄稿			
庄内開田の父 坂元源兵衛翁(その一)	……………		
研究			
妻ヶ丘 瀬戸山計佐儀			2
庄内史跡探訪(その四)	……………	東区 坂元 徳郎	8

マリスタン・母智丘周辺遺跡・明治丁丑之役従軍者記念碑

招魂碑・忠魂碑・大東亜戦争戦没者碑・城山の石灯笼

石碑・石仏その他(四) …………… 町区 山元 昭平 26

宮崎元標拾八里・汾陽家所蔵の都城領主よりの孝子表彰状

金石城跡発掘調査 …… 都城市教育委員会 横山 哲夫 30

講演のあらまし

人形浄瑠璃の公演 …………… 編集部 33

祖先のくらし …………… 瀬戸山計佐儀 34

町文化・体育情報

庄内地区公民館活動の現状 …………… 主事 日高 覚助 35

全国高校総合体育大会自転車ロードレース ……

社教主事 浦田 兼義 37

遊・YOU・庄内川 …… 元気づくり委員会 蒲生 宏孝 38

大いなる庄内川 …………… 同会副会長 大川原紀美生 40

庄内川に魅せられて …… 都城カヌークラブ 小野 基宏 41

二十一世紀への学校づくりを目指して ……

庄内小校長 中原 照美 43

文芸

短歌 旅の思い出 …………… 町区 南崎 喜美 44

短歌 青春の回想 …………… 東区 黒木 聖 44

俳句ー当季雑誌 …………… 庄内俳句会 45

子や孫に語り伝える話

太平洋戦争の教訓 …………… 東区 黒木 聖 48

残念至極な思い出(その二) …… 町区 徳永 幸男 50

戦友の死 復員の感激

終戦の日前後の様子 …………… 東区 黒木 ツミ 52

「かんだれ」より怖い爆弾 …………… 千草 蒲生 トミ 53

あの頃の日記から …………… 東区 片ノ坂 登 54

太平洋末期の師範学校生活

賑やかだった庄内の街 …………… 町区 水谷 文江 57

最後の訣れ(特攻隊の兄との訣れ) …… 平田 平田 光盛 58

私の歩んだ道(その二) …………… 平田 和田 盛行 60

太平洋戦争時の旧制中学校生活

尊敬する亡父の話 …………… 平田 本野 アキ 61

私が子供の頃に聞いた話(その二) …… 宮崎市 長友 壮二 62

招魂碑並びに記念碑移転のこと ……

西南の役遺族会代表 池田 正巳 64

塚野孝之丞の墓碑に詣でて …………… 西区 塚野 米 65

ひくさ(千草)の奴踊 …………… 千草 長友 久二 67

特集「あの日、あの時」庄内空襲と終戦

昭和二十年八月六日忘れえぬ大惨事	東区	久保田武美	72
真っ黒い煙	今屋	鶴島 善市	74
庄内空襲の日	西区	今城フジエ	75
分散授業をしていた時	東区	帖佐 トキ	77
わが家が焼失した	西区	岩切 サキ	78
機銃掃射の弾痕	東区	島田 屯	80
阿鼻叫喚	関之尾	中井あさ子	82
子供の頃の罹災の思い出	西区	堀 弘子	83
超低空で飛来	西区	乙守 トミ	86
私が十八才の時	東区	長嶺 ツム	87
忘れ得ぬ人々	西区	菓子野美和子	89
<b>編集部の設問への回答</b>			92
宮崎市 畠中通夫・平田 和田ハツ子・西区 小林フジ子・今屋 吉村ア			
イ・西区 野海さえ・平田 杉山キミ・町区 水谷文江・東区 坂元守雄・			
西区 藤村チエ・西区 中村ツルエ・西区 谷口綾子・宮島 宮島 緑・			
宮島 宮島重利・都城 永井アキ・平田 福留ユキエ・西区 猪俣八重子・			
町区 重久正子 以上十七名			
庄内空襲被災状況説明略図	調査者	清水 省三	103
八月十五日			
南方戦線にて	町区	鶴村 肇	105

回想「八月十五日」	祝吉町	宮田 安子	106
鐘・奈良部隊(第57軍野戦貨物廠)	町区	堂園 幸子	108
<b>編集部の設問への回答</b>			110
千草 志々目義経・乙房 馬籠武男・千草 村永シツ・千草 白杵アヤ子・			
町区 山元昭平・宮島 今村 勇・東区 亀沢テツ・千草 赤池実平・町			
区 重久政雄・今屋 鶴村 栄・千草 長友ハツ子・乙房 中島善治・今			
屋 鶴島善市・町区 南崎喜美・平田 福留利行・乙房 馬籠アヤ子・西			
区 小林フヂ子・今屋 田村ミツエ・今屋 山元ハギ・今屋 新地イク			
宮崎「庄内会」紹介		編集部	125
読者よりの便り			127
編集後記		編集部	129

**第五号(平成五年発行) むかしの食生活をさぐる**

平成四年度の歩み	昔を語る会書記局	1
特別寄稿		

庄内開田の父 坂元源兵衛翁(その二)	妻ヶ丘 瀬戸山計佐儀	2
研究		

庄内史跡探訪(その五)	東区 坂元 徳郎	7
山田別荘跡・庄内観瀾舎跡・庄内南州神社		



安永城の縄張り図をよむ	……………	若葉町	横山	哲英	22
講演のあらまし					

庄内を中心とした方言を考える ……

高城町文化財保護委員	市園	辰夫	26
------------	----	----	----

かくれ念仏と殉難僧釈無涯	…	正定寺住職	尼子	章長	26
--------------	---	-------	----	----	----

戦前戦後に生きる	……………	郷土作家	大河原光廣	27
----------	-------	------	-------	----

庄内町情報

八月豪雨・十三号台風の産業被害とその対策 ……

平田	和田	輝男	29
----	----	----	----

庄内地区婦人会の集い	……………	東区	新穂	照子	30
------------	-------	----	----	----	----

庄内中学校クラブ活動の現状	……………	町区	溝口	修一	32
---------------	-------	----	----	----	----

庄内小学校ミニバスケットボールクラブ	……………	庄内小	岡田	新一	34
--------------------	-------	-----	----	----	----

随筆

私のふるさと考	……………	宮崎市	坂元	陽介	36
---------	-------	-----	----	----	----

大河内昭爾氏によせて	……………	町区	山元	昭平	37
------------	-------	----	----	----	----

心に残る二つのことば	……………	鷹尾	得能	哲夫	40
------------	-------	----	----	----	----

短歌

つれづれに	……………	町区	南崎	喜美	42
-------	-------	----	----	----	----

青春の回想(その二)終戦・引揚げ	……………	東区	黒木	聖	43
------------------	-------	----	----	---	----

俳句

庄内俳句会	……………				44
-------	-------	--	--	--	----

四季雑詠	……………	上川崎	福島	ハル子	45
------	-------	-----	----	-----	----

保護司	……………	西区	菓子野美	和子	45
-----	-------	----	------	----	----

子や孫に語り伝える話

庄内の昔	……………	東区	椋田	泉	46
------	-------	----	----	---	----

庄内新郷立のこと・三原宗五先生のこと・島田丑弥太先生

のこと・庄内村麓居住者名

戦後の熊襲踊り	……………	東区	鎌田	康正	53
---------	-------	----	----	----	----

車大工	……………	町区	重久	政雄	58
-----	-------	----	----	----	----

甘茶の葉	……………	東区	福留	フミ	59
------	-------	----	----	----	----

新町純良の昔話	……………	平田	新町	純良	61
---------	-------	----	----	----	----

こめんめし びのさら	……………	町区	坂元	清景	65
------------	-------	----	----	----	----

私の戦後	……………	小林市	向井	サエ	67
------	-------	-----	----	----	----

南洲神社最初の祭り	……………	西区	有嶋	義武	68
-----------	-------	----	----	----	----

鶏卵と甘露のこと	……………	町区	汾陽	綾子	69
----------	-------	----	----	----	----

飛行機見物	……………	今屋	鶴島	善市	70
-------	-------	----	----	----	----

近衛騎兵の想い出	……………	宮島	土屋	忠則	72
----------	-------	----	----	----	----

農家の下男	……………	宮島	今村	勇	74
-------	-------	----	----	---	----

幼い頃の思い出	……………	東区	黒木	ツミ	75
---------	-------	----	----	----	----

私の子供の頃聞いた話(その三) …… 宮崎市 長友 莊二 76

敗走する西郷軍とひくさば・薩英戦争と長友蔵兵衛・伊東

岩男氏と長友宗秋・長友蔵右衛門の語り伝え・平山八蔵と

ゆう人

特集 むかしの食生活をさぐる

「ユナマス」は冬の味 …… 宮崎市 肥後 兼行 80

食生活について …… 宮崎市 牧ノ瀬正雄 85

極く質素な食生活 満ち足りた人生 …… 平田 大久保 平 87

桑の実は唇を紫色に染めて …… 今屋 吉村 アイ 88

本物の味 …… 三股町 田上 順子 91

魚の骨も焼いて食べた頃 …… 東区 竹下ツルエ 92

からいも飴十個で一銭の時代 …… 東区 原 いつえ 93

食生活に関する編集部の設問 …… 95

設問への回答 …… 96

今屋 花盛 林・平田 新町純良・美川町 大重トシ・東区 黒木ツミ・

町区 水谷文江・東区 高妻ヒサ・町区 熊原光善・今屋 鶴島善市・

西区 新留 茂・今屋 原口ミサヲ・東区 坂元キミ・妻ヶ丘 瀬戸山

計佐儀・今屋 田村ミツエ・宮島 土屋忠則・宮島 今村 勇・町区

熊原ヨシエ・町区 鶴村 肇・平田 福留利行・平田 福留ユキエ・東

区 入来ミネ・千草 村永 強・千草 赤池実年・乙房 乙丸トシ子・

千草 白杵通夫・西区 山口耕二・平田 和田盛行・都城 金田光子・

千草 長友ハツ子・小松原町 柳田佳子・関之尾 樋口タミ・川崎 福

島ハル子・東区 坂元信八・東区 長峯泰彦・愛知県 田中ヨツ子

読者よりの便り …… 127

編集後記 …… 129

第六号(平成六年発行)

平成五年度の歩み …… 書記局 1

特別寄稿

布衣農相 前田正名 …… 妻ヶ丘 瀬戸山幽敏 2

その生涯を漢詩に詠む

生い立ちと猪野先生と観瀾舎 …… 茅崎市 萬代 久男 3

私の人生の方向を変えた(その一) …… 朝霞市 室屋 勝一 7

終戦直後の庄内小学校教諭時代

研究

庄内地方の古墳時代 …… 東区 横山 哲英 10

菓子野地下式横穴墓の発掘調査から

私達の庄内川 …… 宮島 坂元 庸 18

改修事業の歴史 平田井堰 川に架る橋

庄内史跡探訪 …… 東区 坂元 徳郎 31

諏訪神社の由来・祭神・変遷

史跡探訪(大隅方面) …………… 西区 菓子野美和子 36

鹿屋航空資料館 吾平山山陵・横瀬古墳

殖産に貢献した先達たち(三島通り) …… 町区 山元 昭平 40

講演のあらまし …………… 編集部 44

歴史の重さたいせつに ……

読売新聞都城通信部長 宮本 昌夫

生き生き人生 …………… 泉老連講師団 塘 辰二

庄内の史跡 …………… 東区 坂元 徳郎

庄内町情報

庄内のお寺の大屋根修理が完成 …… 町区 山元 一信 47

J A都城庄内支所 …………… 末永 悟 49

学校だより …………… 編集部

庄内小学校 ……………

全国保健体育優良校・バスケット部の活躍

菓子野小学校 …………… 51

創設者三原先生の遺徳を偲ぶ・スポーツ少年団剣道部

乙房小学校 …………… 52

体育館の改築・高齢者宅を訪問

庄内中学校 …………… 52

研究委嘱校・社会福祉普及校・陸上部

文芸欄

幼い日の言葉 …………… 鷹尾町 得能 哲夫 55

稚児桜の清掃作業 …………… 東区 帖佐 ミヤ 57

短歌・俳句

短歌・青竹林 …………… 町区 南崎 喜美 59

俳句・核弾頭 …………… 東区 岩佐巴旦杏 60

天の川 …………… 庄内俳句会

子や孫に語り伝える話

庄内の乱と高岡郷 …………… 宮崎市 松岡 優 62

乙房尋常小学校校旗制定由来 …………… 編集部 64

死線を越えて …………… 関之尾 佐土平栄蔵 65

北支前線で重傷を負う

庄内出身の俊英たち …………… 西区 清水 省三 66

陸士出身六名の人々

ひさば壮丁まうていの会 …………… 千草 長友 義行 69

大正年間の徴兵検査 初年兵教育

終戦前後の米の供出をめぐって …… 宮崎市 高橋 辰男 71

ふるさと「庄内」 …………… 三股町 田上 順子 75

女学生の頃の思い出

思い出すままに	東区	今村	登	76
大正から昭和の始め頃				
夏祭り生花会	町区	山元	一光	80
私の若い頃	川崎	川崎	速雄	82
大正の始め頃(その一)	町区	持永	テル	85
町通り商店街の様子 お寺の賑い		宇野ユキエ		
懐古	都城市	井上	カツ	89
追憶	鷹尾町	岩佐	フヂ	90
戦前戦中戦後庄内小に奉職・戦時下の生活				
私の子供のころ	宮崎市	宮島	忠	93
関之尾の滝の思い出	平塚町	山元昭三郎		95
あの頃(終戦引揚者の苦難の生活)		祝吉町	宮田 安子	96
から芋拾い	宮崎市	牧ノ瀬正雄		98
スポーツ王国庄内	町区	徳永	幸男	99
のぼり太鼓でダルマ行列	西区	有島	義武	100
町区甚句踊	町区	重久	正子	101
昔の葬式風景	町区	山元	昭平	103
懐かしい「箱バス」	西区	田崎	ミエ	104
つりん(吊井戸)	平田	和田	盛行	106
けごのたね屋	東区	野崎	兼次	107

前田どんの「古着行商鑑札」				編集部	109
昔の遊び	東区	黒木	ツミ		110
昔の子供の遊び	東区	東	幸哉		112
読者よりの便り				編集部	115
編集後記				編集部	116

**第七号 (平成七年発行)**

平成六年の歩み				書記局	1
---------	--	--	--	-----	---

特別寄稿

漢詩 石川理紀之助翁		妻ヶ丘	瀬戸山幽畝		2
私の人生の方向を変えた(その二)		朝霞市	室屋 勝一		3

研究

庄内小教諭時代					
庄内史跡探訪(その七)	東区	坂元	徳郎		5
豊幡神社と山久院・菅原神社					
石碑 石仏その他(その五)	町区	山元	昭平		11
水分神の碑七基 改修記念碑等五基 土地改良記念碑等十基					
四基 その他の記念碑十基					
前田三介氏の絵日記				編集部	27
観瀾舎と庄内学生会		船橋市	坂元 勲		34

講演のあらまし ..... 編集部 37

家庭における今と昔 ..... 人権擁護委員 岩切 彪氏

私と日本 .....

都市国際交流員 ジョン・フリバート・デーリー氏

ひねっみるかい .....

薩摩狂句さんぎし都城支部 半代一夫氏

庄内町情報

地域活性化と生涯学習 ..... 庄内公民館主事 和田 芳律 40

庄内空襲之碑建立の事 ..... 建立委員会 伊地知義夫 43

「語る会」が行なった史跡整備事業 ..... 編集部 44

学校便り

庄内小 菓子野小 乙房小 庄内中 ..... 46

まなび舎、いとしい

庄内中子供銀行最優秀校として受賞 ..... 東区 亀沢 温 51

新任教師「思い出の記」 ..... 東京都 青木 キク 57

文芸欄

室屋英子さんの遺詠 ..... 編集部 60

俳句 ..... 岩佐巴旦杏 他庄内俳句会 61

子や孫に語り伝える話

私の過ごしたお盆 ..... 東区 黒木 ツミ 62

わたしの家のお盆 ..... 東区 丸目 エミ 65

五蘭盆の精進料理のことなど ..... 東区 帖佐 トキ 66

南海に散った兄「決別の書」と回顧 ..... 西区 清水 省三 68

三島通庸と新穂一の事 ..... 町区 山元 昭平 73

山元家の氏子札 ..... 編集部 75

明治の地券証 ..... 編集部 76

森園清徳さんのこと ..... 東区 鎌田 康正 77

小林浩一氏の「新春随想」 ..... 編集部 79

庄内と都城の仲について

宮之原家の言い伝え ..... 西区 宮之原重忠 80

乗合自動車の移り変わり ..... 町区 目野 ミチ 82

大正時代から終戦までの庄内の乗合バス

懐かしの「箱バス」の訂正と補筆 ..... 編集部 清水 省三 85

本誌六号の記事と写真説明の訂正とお詫び

私の少年時代 ..... 延岡市 持永 篤志 86

波瀾の少年時代 ..... 平田 和田 盛行 88

庄内中草創の頃 ..... 姫城町 湯浅 隆一 91

照葉樹林追想(1) ..... 宮崎市 坂元 守雄 93

「やま」との暮らし・「やま」の消失のこと等

三島通庸と母智丘の櫻 ..... 宮崎市 松岡 優 99

大正の初め頃(その二)	町区	持永テル・宇野ユキエ	100
追憶(その二)		鷹尾町 岩佐 フジ	104

終戦前後の悲惨な生活

ふるさと「庄内」	埼玉県	馬籠 京子	107
----------	-----	-------	-----

森 ミキさんの昔話	東区	帖佐 ミヤ	109
-----------	----	-------	-----

塩と塩げ	三股町	田上 順子	110
------	-----	-------	-----

ジッコン谷(夏の思い出)	平田	新町 純良	112
--------------	----	-------	-----

流木で筏くんだり	平塚町	山元正三郎	113
----------	-----	-------	-----

読者よりの便り			115
---------	--	--	-----

平成七年度会員名簿			118
-----------	--	--	-----

編集後記			119
------	--	--	-----

第八号(平成八年発行)

平成七年度の歩み		書記局	1
----------	--	-----	---

特別寄稿

庄内に思う	庄内地区市民センター所長	吉原 秀治	2
-------	--------------	-------	---

研究

庄内史跡探訪(その八)	東区	坂元 徳郎	4
-------------	----	-------	---

庄内八坂神社

その後の「水分神」と「田の神」たち	町区	山元 昭平	8
-------------------	----	-------	---

菓子野町宮島の歩み(その二)		宮島 今村 勇	12
----------------	--	---------	----

昭和46年〜平成8年まで

照葉樹林追想(二)		宮崎市 坂元 守雄	14
-----------	--	-----------	----

都城盆地の風景・庄内の風景

講演のあらまし

私たちの庄内川

元都城土木事務所河川砂防課長	坂元 庸	21
----------------	------	----

庄内の中世山城について

市文化課文化財調査委員	横山 哲英	22
-------------	-------	----

庄内町情報

商工会のあゆみ	庄内商工会事務局長	馬籠 英男	23
---------	-----------	-------	----

地域に根ざした婦人活動

庄内地区婦人連絡会会長	新穂 照子	27
-------------	-------	----

庄内地区ボランティア連協の活動	連協長	木之下二郎	29
-----------------	-----	-------	----

J A 庄内支所の活動	J A 庄内支所長	山下美智夫	30
-------------	-----------	-------	----

庄内町壮年団体連絡協議会の歩み	理事	大川原紀美生	31
-----------------	----	--------	----

善意のチリ取りを贈り続けるー町区出身の本 楨二さんー

	西区	清水 省三	32
--	----	-------	----

宮崎庄内会から		庄内会会長	肥後 兼行	34
---------	--	-------	-------	----

学校便り

庄内中学校	……………	教頭	本田 雅康	36
菓子野小学校	……………	教頭	鳥飼 紘司	37
庄内小学校	……………	教頭	三浦 幸一	40
乙房小学校	……………	校長	稲井 健	41

幼稚園保育園便り

清涼幼稚園	……………	福留 郁子	42
ルンビニ保育園	……………	吉永 淑子	43
菓子野保育園	……………	大田 範子	45
乙房保育園	……………	刀坂 純子	47

まなび舎、いとし子

庄内中、乙房小勤務の頃の思い出	……………	蔵原町 大河原光廣	49
庄内小学校在職中の思い出	……………	えびの市 猪俣 良子	51
庄内小学校での思い出	……………	高崎町 森田 篤夫	55

文芸欄

随筆 前田用水路物語	……………	鷹尾町 得能 哲夫	57
俳句	……………	東区 岩佐巴旦杏・庄内俳句会	61
		佐世保市 長岡天狼	62

子や孫に語り伝える話

続・庄内物語(三)	……………	妻ヶ丘町 瀬戸山計佐儀	63
-----------	-------	-------------	----

川流れ婆講など庄内の民話七編

私の中学時代	……………	大宮市 馬籠 京子	66
戦中・戦後の当時に偲んで	……………	西区 池田 シヅ	71
大正の初め頃の学校生活	……………	今屋 鶴島 善市	72
秩父宮殿下ご夫妻・関之尾滝へお成り	……………	西区 清水 省三	74
乙房剣道の歴史	……………	平田 大久保 平	75
麻茹 <small>おい</small> で釜	……………	平田 福留 利行	78
お(麻)の話	……………	千草 村永 迪夫	79
昔のいろいろな思い出(自分史から)	……………	宮崎市 肥後 兼行	81

祖父から聞いた西南の役従軍時のエピソードなど

三石神社(境内の様子・神社の由来)	……………	西区 堀 弘子	86
私の見た昔の家	……………	町区 坂元 清景	87
町区祇園山車の復活	……………	町区 徳永 至彦	89
農業の無かった頃	……………	平塚町 山元正三郎	90
けんむ柿	……………	宮島 土屋 忠則	93

建武(一三三四年)の頃植えられた柿の木	……………	都原町 花村 節	94
思い出(その一)	……………		

生い立ち 自然の中で遊んだ日々	……………		
子 <small>こ</small> 転 <small>ころ</small> ばかし	……………	千草 赤池 厚	98
はやく会いたい!ブラジルの息子に	……………		

ー実現しそう五十年ぶり再会ー	千草 村永 強	99
私の人生	茅ヶ崎市 萬代 久男	102

墓碑までたてられていた第一の人生	抑留生活から生還第二の人生	鷹尾町 福村 静徳	105
敗戦と私	鷹尾町 福村 静徳	105	

命がけの落下傘降下訓練	東区 鍋倉 利美	109
執念の捜査(回顧録)	宮崎市 牧ノ瀬正雄	111
示現流(じけんりゅう)流祖と歴史	宮崎市 松岡 優	118

読者よりの便り		120
平成八年度会員名簿		121

協賛広告		
ツチャレンタカー・京呉服あずま・丸宮建設(株)		
宇野スポーツ・丸久建設(株)・カシノ建材・都城マルキガス(株)		
ハピネス関之尾・江口板金工業(株)・お菓子のやまもと		

<b>第九号 (平成九年発行)</b>		
---------------------	--	--

特別寄稿		
庄内に魅せられて	東京都 二宮 公雄	2

研究		
残して欲しい庄内の町並み、石垣、建物、そして景観		
庄内史跡探訪(その九)	東区 坂元 徳郎	7

川上神社、乙房神社、菓子野天神社、関之尾やまんかん		
庄内の伝承民俗芸能について	町区 山元 昭平	15

熊襲踊(ばら踊)、相撲甚句踊、水道音頭、馬踊(ジャン)		
カン馬)、夫婦踊(傘踊)、大太鼓踊		
照葉樹林追想(三)	宮崎市 坂元 守雄	26

人と森の試練、縄文の土器から		
庄内町情報		
庄内赤十字奉仕団の紹介	東区 山田小夜子	35
私は河川モニター	東区 新穂 照子	37
庄内地区ボランティア活動	東区 川越 タミ	38
元氣、根氣、やる気満々壮年団	理事 大川原紀美生	39
庄内郵便局のあゆみ	庄内郵便局長 萩原 六雄	43
宮崎庄内会からご挨拶	庄内会会長 肥後 兼行	46

学校便り		
菓子野小学校	教頭 鳥飼 紘司	48
乙房小学校	教頭 大浦 文夫	49
庄内小学校	教頭 石塚 康代	51
庄内中学校	教頭 佐澤 安孝	54
庄内中剣道部の現状	クラブ指導者 木幡 敏正	56
まなび舎、いとし子		



庄内小の思い出	.....	鷹尾町	藤崎	利夫	58
隨筆					

懐かしの庄内劇場	.....	平塚町	山元正三郎	76
思い出のかずかず	.....	下川東	江夏ハル子	79

「前田用水路物語」によせて	.....	鷹尾町	得能	哲夫	60
---------------	-------	-----	----	----	----

故郷の風物詩、遊び、学友たち、勤労報告隊	.....	西区	清水	省三	83
----------------------	-------	----	----	----	----

故郷に還って思うこと	.....	東区	坂元	勲	64
------------	-------	----	----	---	----

嗚呼！野海海軍大尉―無念の殉職	.....	西区	清水	省三	83
-----------------	-------	----	----	----	----

青年期、少年期のこと、海外生活、そして出合い、かけが	.....	東区	帖佐	ミヤ	86
----------------------------	-------	----	----	----	----

しよのたっ小屋	.....	東区	帖佐	ミヤ	86
---------	-------	----	----	----	----

えない故郷					
-------	--	--	--	--	--

「樟脳焚き小屋」の始まり、従事した人々、当時の様子	.....	西区	野海	正治	88
---------------------------	-------	----	----	----	----

十五夜と花嫁さん	.....	川崎	前畑	文利	66
----------	-------	----	----	----	----

西南の役戦跡を訪ねて	.....	西区	野海	正治	88
------------	-------	----	----	----	----

都会育ちの花嫁さん「イモはどこになっているの？」					
--------------------------	--	--	--	--	--

愛馬「誠冬号」	.....	東区	黒木	ツミ	90
---------	-------	----	----	----	----

俳句

夫と愛馬の召集・出征、愛馬の死					
-----------------	--	--	--	--	--

町区 山元マス子・東区 内野かね・菓子野 長岡照光・東					
-----------------------------	--	--	--	--	--

私達の仏飯講	.....	千草	今村	勇	93
--------	-------	----	----	---	----

区 竹下さつき・西区 蒲生敏子・平田 和田盛行・祝吉町					
-----------------------------	--	--	--	--	--

身辺雑記（回想Ⅰ）	.....	西区	清水	省三	95
-----------	-------	----	----	----	----

宮田安子・平田 平田ミチ・佐世保 長岡孝徳					
-----------------------	--	--	--	--	--

ジシメ（地搦き）	.....	西区	黒木	優一	100
----------	-------	----	----	----	-----

巴旦杏のこと	.....	祝吉町	宮田	安子	69
--------	-------	-----	----	----	----

変わる住宅様式、家建て行事、ジシメ唄	.....	千草	赤池	和秋	101
--------------------	-------	----	----	----	-----

岩佐道彦の俳歴と晩年のこと、最晩年の句					
---------------------	--	--	--	--	--

老婆と一兵士	.....	今屋	鶴島	善市	102
--------	-------	----	----	----	-----

巴旦杏先生へ	.....	編集部			70
--------	-------	-----	--	--	----

誇り高い庄内スポーツ	.....	今屋	鶴島	善市	102
------------	-------	----	----	----	-----

子や孫に語り伝える話

大正・昭和の郷土のスポーツ選手達					
------------------	--	--	--	--	--

続・庄内物語（四）	.....	妻ヶ丘町	瀬戸山計佐儀		71
-----------	-------	------	--------	--	----

巢立つ日まで	.....	鷹尾町	福村	静徳	106
--------	-------	-----	----	----	-----

甘め饅頭、眼鏡芝居など庄内の昔話八編					
--------------------	--	--	--	--	--

私の自分史、十七歳で巣立つまで	.....	西区	堀	弘子	111
-----------------	-------	----	---	----	-----

噫 呂号一〇一潜 未だ浮上せず	.....	町区	山元	昭平	75
-----------------	-------	----	----	----	----

戦前の初盆	.....	都原町	花村	節	112
-------	-------	-----	----	---	-----

有馬文夫大尉の戦死と在りし日の思い出、妹の作文					
-------------------------	--	--	--	--	--

思い出（その二）	.....	都原町	花村	節	112
----------	-------	-----	----	---	-----

田植え、六月灯、チンダイユエ

乙女時代を偲ぶー古びた手帖からー … 鷹尾町 岩佐 フチ 115

昔の遊び道具 …………… 平田 福留 利行 119

くや（紺屋）通り（由来） …………… 千草 長友 義行 121

ありし日を求めて …………… 宮崎市 田川 覚 122

還暦サイクリングと終戦直後の思い出 …………… 122

おはら節かえ唄 …………… 東区 大神 功 123

忘れ得ぬ思い出（戦中の中国行き） …………… 宮崎市 坂元 国良 126

命あればこそ …………… 平田 大田 範子 128

終戦の日のこと、北朝鮮からの引き揚げ

編集後記

平成九年度会員名簿 …………… 131

協賛広告 …………… 132

庄内田中医院・久保原田中医院・南崎常緑園・徳石石油店

宮崎銀行庄内支店・荘内郵便局・庄内病院

陶器のヤマモト・宮下クリニック・黒木建設

第十号（平成十年発行）

平成九年度の歩み …………… 書記局 1

特別寄稿

寛文三年 都城領主北郷氏の「島津」復姓をめぐる ……………

鷹尾町 山下 真一 2

研究

庄内史跡訪問（その十）馬頭観音 …………… 東区 坂元 徳郎 6

関之尾・上川崎・下川崎

廃置分合に関する申請書 …………… 町区 山元 昭平 10

都城市と合併にあたっての庄内町の要望事項

熊襲踊考 …………… 町区 山下謙二郎 15

古事記にみる熊襲討伐とその背景を探る

照葉樹林追想（四） …………… 宮崎市 坂元 守雄 20

庄内の気候風土 私たちの暮しと照葉樹林

庄内町情報

宮崎庄内会から …………… 庄内会会長 肥後 兼行 27

西諸方面の史跡を尋ねて …………… 鷹尾町 福村 静徳 29

伊集院忠真の墓、東麓磨崖仏、歴史民俗資料館

伊東塚、神武の里

学校だより

菓子野保育園 …………… 主任保母 大田 範子 35

清涼幼稚園 …………… 主任保母 福留 郁子 37

ルンビニ保育園 …………… 主任保母 吉永 淑子 39

もちお保育園 …………… 主任保母 上ノ原孝子 40

庄内小学校 …………… 教頭 黒木 浩志 42

菓子野小学校 …………… 教頭 緒方 和幸 44

乙房小学校 …………… 教頭 大浦 文夫 46

庄内中学校 …………… 教頭 佐澤 安孝 48

まなび舎、いとし子 …………… 48

小学生時代のひとこま …………… 西区 堀 弘子 51

庄内小学校の青少年赤十字活動 …………… 高岡町 松岡 優 53

田植え休みのわたし …………… 大宮市 馬籠 京子 55

小学校時代を顧みて思うこと …………… 茅ヶ崎市 萬代 久男 57

祖国振興隊 …………… 平塚町 山元正三郎 63

戦時下小学生も動員した食糧増産活動 …………… 町区 山元 昭平 64

小さなスプリンター …………… 64

庄内小が競技会で優勝 …………… 64

随筆 …………… 64

庄内の人 …………… 鷹尾町 得能 哲夫 65

親切な人達 名人気質 「庄内」のみかたについて …………… 70

扇（扇の効用 人生模様） …………… 川崎 前畑 文利 70

確かなる風の音 …………… 都北町 鎌田 秀峰 71

ゆかりある庄内への追想 …………… 71

私の外国体験（海外勤務十八年間） …………… 東区 坂元 勲 72

俳句 …………… 72

祝吉町 宮田安子・町区 山本ます子・東区 内野かね・西

区 蒲生敏子・平田 和田盛行・平田 平田ミチ・菓子野

長岡昭光 …………… 72

子や孫に語り伝える話 …………… 72

続・庄内物語（五） …………… 妻ヶ丘 瀬戸山計佐儀 81

庄内になつたる伝え話・頓知話など十七編 …………… 81

清水善左エ門翁のこと …………… 宮島 今村 勇 89

身近雑記（回想2） …………… 西区 清水 省三 90

思い出（その三） …………… 都原町 花村 節 94

からいも飴 アクマキづくり 小学校入学 …………… 94

「庄内縄工場」顛末期 …………… 町区 川崎 節 97

「おかあさん、お米がなくなりました」 …………… 97

（沖縄疎開者の「面倒をみた婦人会長の手記」） …………… 97

ねづみ電線を渡る …………… 千草 鎌田 巖 101

ひさばの火事のこと …………… 千草 長友 久二 102

北海道援農奉仕隊動員の思い出 …………… 宮崎市 高橋 辰男 104

上平田地区 坂道改修のこと …………… 平田 福留 利行 107

107

養蚕のこと ..... 東区 帖佐 ミヤ 108

庄内の養蚕、養蚕農家の作業のことなど

幼き日の思い出 ..... 菓子野 長岡 昭光 111

ひさば地名考 ..... 宮崎市 長友 壮二 113

門前の小僧習わぬ経を読む ..... 小倉市 山口 武郎 116

親兄弟のこと、我が生い立ちの記

皇勤の詩(感激の皇居奉仕作業) ..... 西区 池田 シズ 121

編集後記 ..... 編集委員 124

平成十年度会員名簿 ..... 125

協賛広告

(株)スーパード浦・ショッピング かわくぼ・ハピネス関之尾

都城マルキガス(株)・丸久建設(株)・宮崎銀行庄内支店

ファミリーマートまえた庄内店・琴吹寿司

ビューティーサロンわかまつ・ツチャレンタカー

第十一号(平成十一年発行)

特別寄稿

庄内に勤務して .....

庄内地区市民センター所長 八木 正人 1

庄内の印象 ..... 都城警察署庄内駐在所 伊東 茂雄 3

歴史編

史跡探訪(その11) ..... 東区 坂元 徳郎 5

庄内の馬頭観音(続き)

上平田 中平田 下平田 畜産広場 乙房神社 宮島

千草 菓子野 今屋 稚児ざくら 妙見坂 亀沢家

早馬神社 西区前ん馬場 南洲神社広場 西区ゲンツド

西区上ん段 観音原

火山灰に埋もれたムラ ..... 市文化課 横山 哲英 17

関之尾町伊勢谷第1遺跡の発掘調査の結果

近世の安永諏訪神社祭礼について ..... 鷹尾町 山下 真一 21

乙房地区の変化をたどる ..... 乙房 武田 浩明 24

庄内土地改良区の概要 ..... 平田 和田 輝男 30

千草の霧島講 ..... 千草 志々目光郎 33

庄内町情報

宮崎「庄内会」から ..... 庄内会会長 肥後 兼行 35

学校便り

庄内小 ..... 教頭 後藤 良雄

菓子野小 ..... 教頭 緒方 和幸

乙房小 ..... 教頭 大浦 文夫

庄内小学校の戦前戦後の日誌発見 ..... 編集部

乙房保育園 菓子野保育園

文芸編

短歌	……………	芦屋市	北条	ミワ	47
俳句	……………	……………	庄内俳句会	……………	48
随筆	庄内の人(2)	……………	鷹尾町	得能 哲夫	49
	関之尾と私	……………	関之尾	入江 秀子	54
	風の記憶	……………	公民館主事	花房 徹	56
	モンゴルを旅して	……………	……………	……………	……………
	私の中の方言	……………	大宮市	馬籠 京子	57
	手伝い	……………	川崎	前畑 文利	60
	手伝いの中で親子の繋がりが出来る	……………	……………	……………	……………
	30年ぶりの再会	……………	千草	鎌田 巖	61
	沖繩からの疎開者たちと再会	……………	……………	……………	……………
子や孫に語り伝える話	……………	……………	……………	……………	……………
安永の坂道物語(1)	……………	妻ヶ丘	瀬戸山計佐儀	……………	64
	センカンヤマン坂・ツツノハイの坂・ウツパン坂・マッノ	……………	……………	……………	……………
	ハイの坂・オミケン	……………	……………	……………	……………
	カイヤン坂・ゲンサツジん坂	……………	……………	……………	……………
	町制施行30周年記念祝賀会	……………	西区	清水 省三	69
	庄内製綱工場(マオラン工場)のこと	……………	町区	鎌田 学	71
	昭和初期の嫁入りとその生活	……………	東区	黒木 ツミ	74
	黒木ツミさんのこと	……………	東区	帖佐 ミヤ	76

菓子野の里寺	……………	……………	菓子野	菓子野清弘	77
西南戦争のなかの関之尾の戦い	……………	……………	関之尾	末原 兼光	78
16歳で赤紙(召集令状)	……………	……………	平塚町	山本正三郎	83
終戦直後の庄内の電気事情	……………	……………	姫城町	湯前 隆一	85
奉納、浦安の舞	……………	……………	西区	清水 たつ子	88
皇紀二千六百年の奉祝式典で諏訪神社に奉納	……………	……………	……………	……………	……………
私の子供時代	……………	……………	都北町	長峯泰太郎	89
庄内地区の婦人会活動	……………	……………	町区	宇野ユキエ	92
昭和30年代の結婚簡素化運動	……………	……………	……………	……………	……………
農協での若き日の思い出	……………	……………	東区	山元 哲朗	95
庄内ことば雑感	……………	……………	町区	山元 昭平	97
母の思い出	……………	……………	宮崎市	田川 精一	101
草創期の庄内中学校野球部のこと	……………	……………	宮島	坂元 庸	103
小学校の思い出	……………	……………	鷹尾町	吉牟礼フジ	106
昔の十五夜まつり	……………	……………	西区	和田 義秋	106
夏休みの思い出	……………	……………	東区	東 幸哉	109
思い出(その4) 小学校時代	……………	……………	都原町	花村 節	111
私が生どもの頃聞いた話	……………	……………	宮崎市	長友 荘二	115
子は親の背を見て育つ(その2)	……………	……………	小倉市	山口 武郎	116
自分史の一部	……………	……………	……………	……………	……………
あの頃(一) 終戦直後新任地西岳	……………	……………	妻ヶ丘	古川 益雄	119

二〇二一年間の歩み ..... 事務局 122

「庄内の昔を語る会」が都城市の「文化貢献賞」を受賞

史跡探訪―北薩路をたずねて ..... 東区 帖佐 ミヤ 124

志布志の史跡探訪の記 ..... 町区 山下謙二郎 127

編集後記 ..... 130

会員名簿 ..... 131

協賛広告

庄内田中医院・久保原田中医院・宮崎銀行庄内支店

ありしま歯科・川畑整骨院・徳石石油庄内店

宇野スポーツ・丸宮建設・江口板金・お菓子のやまもと

第十二号 (平成十二年発行)

特別寄稿

菓子野小創立五十周年 ―開校当時に思いを寄せて―

..... 学校長 森 茂樹 1

歴史・史料編

近世の都城領地 安永外城について .....

..... 都城市史編纂室 山下 真一 6

庄内小学校古文書 ..... 学校長 前田 博仁 10

史跡探訪 (その十二) ..... 東区 坂元 徳郎 13

諏訪神社の遷座 (山麓から山頂へ)

安永村戸長山下宗介 ..... 町区 山下謙二郎 22

「開田の光」前田正名と一步園の由来について .....

..... 町区 山元 昭平 28

庄内町情報

宮崎庄内会から ..... 宮崎市 肥後 兼行 34

東区造林組合の解散 ..... 東区 島田 昌一 36

学校便り

庄内小学校 ..... 教頭 後藤 良雄 38

菓子野小学校 ..... 教頭 緒方 和幸 40

乙房小学校 ..... 教頭 日高 啓子 42

随想・追憶

一步園物語 ..... 鷹尾町 得能 哲夫 45

子ども時代の思い出、用水路、片平市兵衛氏等

縁は異なるもの ..... 西区 野海 正治 50

「庄内」のとりもつ縁

イチイガシ ..... 宮崎市 坂元 守雄 52

分布、用材、光り輝くイチイガシ

故郷を想う ..... 大宮市 馬籠 京子 57

スイカンバン・ヘルニア物語 ..... 乙房町 満永 悟 61

高校三年夏休みの出来事

「結い」の心を大切に ..... 東区 新穂 照子 63

ふるさと随想	.....	都北町	長峯泰太郎	64
「稚児ざくら」に想いを寄せて	.....	五十市町	下蘭美和子	66

「あの頃」(2)	.....	妻ヶ丘町	古川 益雄	100
庄内中に赴任して、バラック校舎、教え子たち	.....			
お産昔ばなし	.....	東区	村井 涼子	101

俳句				
平田 平田ミチ・平田 和田盛行・町区 山本マス子・東区				
内野カネ・祝吉町 宮田安子・西区 蒲生敏子・菓子野 長				
岡照光				

子は親の背を見て育つ(その三)	.....			
高等科時代の様子	.....	小倉市	山口 武郎	103
故郷の想いで	.....	我孫子市	渡辺 トミ	107

子や孫に語り伝える話

安永の坂道物語(二)	.....	妻ヶ丘町	瀬戸山計佐儀	70
------------	-------	------	--------	----

ジッケンダン他六編

私の子ども時代の水浴び	.....	千草	臼杵 通夫	75
-------------	-------	----	-------	----

長兄の入宮

私の青春時代	.....	東区	黒木 正	79
--------	-------	----	------	----

朝鮮での生活、引き揚げ、青年団活動、恩師のこと

戦中戦後の思い出	.....	西区	小林 藁三	82
----------	-------	----	-------	----

大学生活、学徒動員、徴兵検査、戦後の暮らし

私の庄内小学校時代	.....	宮崎市	坂元 武	84
-----------	-------	-----	------	----

川崎梅ヶ谷ジャンカン馬踊り

焼酎の話あれコレ	.....	町区	徳永 至彦	90
----------	-------	----	-------	----

シベリア抑留記

したんこらと仲間たち	.....	川崎	福村 修	98
------------	-------	----	------	----

子ども時代の川遊び、仲間たち

事務局便り

昔の神田通り	.....	平塚町	山元正三郎	112
--------	-------	-----	-------	-----

ここ一年の歩み

国分市史跡探訪	.....	町区	山下謙二郎	115
---------	-------	----	-------	-----

宮崎施設めぐり

新聞社、放送局、芸術劇場、博物館	.....	東区	帖佐 ミヤ	119
------------------	-------	----	-------	-----

編集後記

会員名簿

協賛広告

久保原田中医院・庄内田中医院・介護支援くぼはら	.....			
-------------------------	-------	--	--	--

ミツワ産業(株)・末原歯科医院・前畑造園	.....			
----------------------	-------	--	--	--

ショッピングかわくぼ・京呉服あづま・とこなみ不動産	.....			
---------------------------	-------	--	--	--

宮下クリニック	.....			
---------	-------	--	--	--

# 編集後記

七年ぶりの猛暑となったこの夏も終りに近づき、ここに「庄内」十三号をお届けする運びになって、編集子一同ほっとしているところです。

本号では、創刊号から第十二号までの全目次を特集として掲載することになりました。本誌が平成元年の創刊から数えて十二年、暦が丁度一巡りしたのを機会に、これまでの歩みを振り返ってみたいと思い企画してみました。あらためて、過去の積み上げの重さを感じ入っている次第です。本式の索引にはなりませんでしたが、皆様の御参考になれば望外の喜びです。

本号にも多くの皆様から数々の体験談や回想が寄せられ感謝しております。

毎号貴重な記事を書いていただいている瀬戸山計佐儀氏の「安永の坂道物語り」が本号で完結しました。有難うございました。さらに次号もよろしく願います。

また、東区出身で宮崎市で環境問題に取り組んでおられる坂元守雄氏の「森づくりの光と影」は、大淀川支流のひとつの我が庄内川の水量の低下が源流周辺の森林の保水力の低下に原因があるとも考えられることから、森を育てることの重要性を教

えてくれる貴重な体験談として特に掲載しました。皆様の御一読をお勧めします。

八月三十一日付の宮崎日日新聞の「きりしま」地域欄の「ぐるっと都城」で、昔を語る会の活動が紹介されたところ、記事を見た人から編集部に激励や賞讃の電話などがありました。私達の地域の、そして時代の「語り部」としての使命をあらためて感じた次第でした。今後ともよろしくお願いしたいと思います。

平成十三年九月吉日

## 編集委員

木幡敏正	山下謙二郎
坂元徳郎	坂元勲
清水省三	坂元庸
帖佐ミヤ	鮫島亨
福村修	



# 平成十三年度 会員名簿

庄内の昔を語る会

地区	氏名	☎
西区	伊地知 義夫	三七二〇九九
〃	菓子野 美和子	三七一一八九
〃	清水省三	三七一一八四
〃	野海 正治	三七一一四四
〃	津曲 弘美	三七一一四六
〃	宮之原 重忠	三七〇三六八
〃	堀 弘子	三七〇七七一
〃	長峯 良文	三七〇三九九
〃	池田 平八郎	三七〇六一一
町区	鎌田 学	三七〇〇八六
〃	山元 一光	三七二二二六
〃	大河内 隆之	三七〇五六七
〃	大田 美智子	三七〇八四三
〃	鮫島 亨	三七〇二二七
〃	山元 一信	三七二八八三
〃	坂元 清景	三七二二二七

町区	氏名	☎
町区	山下 謙二郎	三七〇八三一
〃	山元 マス子	三七二二二六
〃	益田 義美	三七〇二〇三
東区	片ノ坂 登	三七二九七二
〃	木幡 敏正	三七二一六五〇
〃	坂元 徳郎	三七〇三五〇
〃	椋田 泉	三七〇七七六
〃	新穂 照子	三七〇二〇九
〃	帖佐 ミヤ	三七〇〇二一
〃	萩原 忠子	三七〇二二二
〃	江口 高見	三七〇一六一
〃	大川原 紀美生	三七二二一〇
〃	満木 敏公	三七〇三二八
〃	奥田 正幸	三七二二七三
〃	黒島 昭典	三七二〇二五
〃	坂元 勲	三七〇七七五
〃	井上 ミツル	三七〇四二三
〃	東 幸哉	三七二四九一
今屋	鶴島 善市	三七二二六八
〃	田村 誠	三七二二七八

川崎	前畑 文利	三七二〇四六
〃	福村 修	三七二〇四七
〃	田中 義輝	三七二〇二八
千草	長友 久二	三七二二三三
〃	臼杵 徳光	三七二一八五六
〃	鎌田 徹	三七二二三九〇
宮島	今村 勇	三七二九三六
〃	坂元 庸	三七二七六二
平田	野村 君雄	三七二〇八九二
〃	和田 盛行	三七二二四四六
乙房	馬籠 英男	三七二二五六五
〃	益留 道夫	三七二二一六七
関之尾	迫田 邦久	三七二一三六
鷹尾	福村 静徳	二四二二四四〇
都北町	長峯 泰太郎	三八二〇九六
市民セ	丸目 幸宏	三七二〇五二〇

24時間安全監視システムをめざす  
安心と信頼のブランド Marui Gas

お役に立つことはありませんか？

# 都城マルエーガス株式会社

本社・工場 都城市神之山町1857番 庄内サービス 都城市庄内町12668



0120-38-0322



0120-37-0127



# 丸久建設株式会社

特建事業部・住宅事業部

〒885-0114 宮崎県都城市庄内町8065番地  
TEL (0986) 37-0116・FAX (0986) 37-3151  
E-mail maruhisa@coral.ocn.ne.jp

自由設計  
注文住宅



坪単価  
37坪基準

29.8  
万円

基本本体価格

地域の皆様の  
「情報・交流・安心ステーション」

あなたの町の

# 荘内郵便局

局長 内村 成良

☎37-0542



和洋造園・設計・施工・管理

# 太陽造園

代表者 前畑 喜一

関之尾町5270 FAX兼用☎37-1046

建築板金工事一式  
宮崎県知事許可(般)第6402号

# (有)本板金工業

代表取締役 本 信幸

庄内町12483 (FAX兼用) ☎37-0617

都城茶  
創業明治2年

GREEN TEA



内閣総理大臣賞受賞(第16回農業祭)  
農林大臣賞受賞(第30回全国製茶品評会)

# 南崎常緑園

宮崎県都城市庄内町12613  
TEL (0986) 37-0010 FAX (0986) 37-2631

浄土真宗  
本願寺派 清涼山 願心寺

☎37-0567



清涼幼稚園 ルンビニ保育園 もちお保育園

肉の専門店

みぞのくち精肉店

庄内町12634 電話 37-0038

# 綺麗が上手

## クリーニングショップ 富士

庄内店 ☎ 0120(37)0127

スーパー大浦・Aコープ隣

写真プリント・洋服手直しの取次ぎも致します。



くらしの応援団  
株式会社  
スーパー大浦グループ

豊かな暮らしに奉仕する

庄内店

ほかほかメニュー

お弁当のヴィズン 庄内店

志和池店

志和池店

志比田店

姫城店

宮丸店

鷹尾にオープン



本格炭火焼

パシオたかお

なんでも100円

100円均一

二束三文

パシオ

パシオたかお

パシオ郡元

パシオ早鈴

パシオ山之口



ドラッグパシオ  
山之口店

株式会社  
スーパー大浦

代表取締役社長 大浦元義

本部 都城市鷹尾3丁目4街区6号

# 庄内 第十三号

平成十三年十一月一日 印刷

平成十三年十一月三日 刊行

刊行  
編集  
庄内の昔を語る会

都城市庄内町庄内地区公民館

電話(〇九八六)三七〇八八八番

印刷  
株式会社 文昌堂

都城市東町十八街区一号

電話(〇九八六)二二一一二二番

